調　査　研　究

朝日遺跡60C区方形周溝墓ＳＺ01について

丹羽　博

1

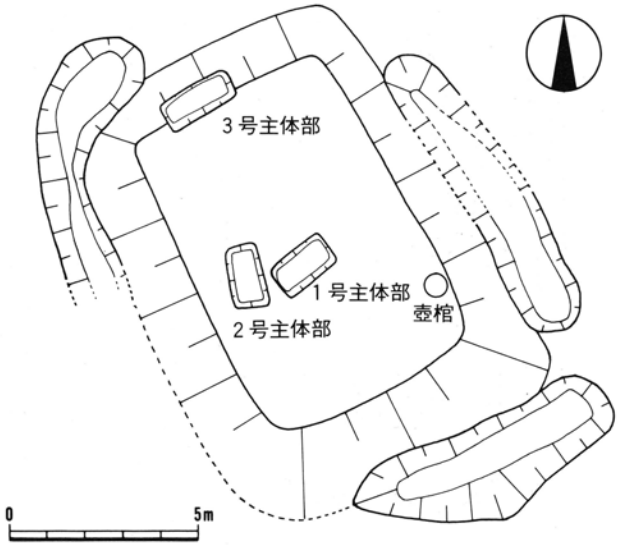
朝日遺跡にて、60年度に調査した方形周溝墓の内、C区のＳＺ01[1]より人骨の遺存した主体部３基を検出した。その内最も保存状態の良好な人骨１体について、池田次郎氏に鑑定を依頼した。本年報にその報告を掲載するに際し、まずこのＳＺ01の調査所見について記す。

2

60C区でほぼ全容を明らかにすることが出来たＳＺ01は、台状部長軸13m・短軸10mを測る長方形を呈する。西北を除く各コーナーに陸橋部を有する幅1.5～2.5mの周溝が廻る。西溝南半は浅く、溝底は基盤のシルト層に達していない。西北コーナーと東溝北端の周溝内より、それぞれ細頸壺を検出した。マウンドは中期の包含層上に盛土により構築され、周溝底とマウンド現存頂部の比高は1.3m程である。埋葬施設として土壙3基と土器棺１基を検出した。これらは盛土中に構築されており、１号主体部は２号主体部に先行する。

１号主体部　マウンドほぼ中央に位置し、当周溝墓の中心主体と考えられる。長軸1.7m・短軸9.2m・深さ0.4mを測る墓壙で、その長軸は周溝墓の短軸に近似する。墓壙内両小口に小溝が存在することから、組み合わせ式の木棺の使用が想定される。人骨は状態不良ながら遺存しており、頭位を東北に向けた仰臥屈葬である。

２号主体部　１号主体部の西側で検出され、長軸1.6m、短軸0.9mの墓壙で、おそらく２体と思わ



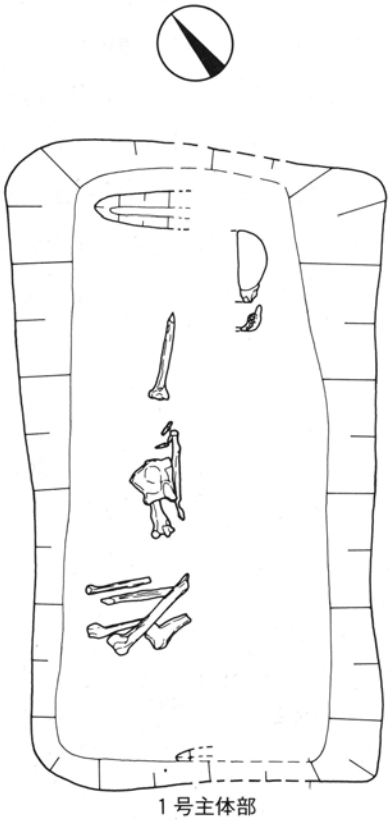
第１図　60C区SZ01平面図（１：200）

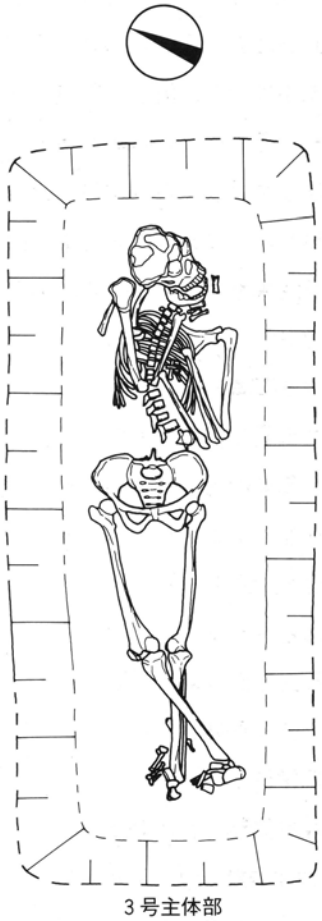




▲ 3号主体部

◀ 2号主体部





第2図 60C区SZ01主体部平面図（1：20）

れる頭位を南西に向け仰臥屈葬で並行して合葬された人骨を検出した。下肢骨は強く曲げられ折り重なる様にして遺存しており、同時に埋葬されたものと思われる。

3号主体部　マウンド北縁辺で検出された主体部で、平面プランは確認しえなかったが、東西に長軸を有する幅80cmの墓壙で、埋土の観察から、木蓋等の存在が推定される。当主体部の埋葬人骨の遺存状態は3主体部中最も良好で鑑定を依頼した。頭部を東北に向けた伸展葬である。

土器棺　主体部1の南東に位置する。胴部最大径50cm程の大型壺を使用し、頸部以上を欠落させ、底部中央に二次穿孔を施し水平に埋置される。蓋は確認されず、また棺中より人骨等は検出されなかった。

3

ＳＺ01の築造は、土器棺及び周溝内出土の土器より、尾張地方に畿内的要素の波及によって新たな土器群が成立する高蔵式期（中期末）でも早い段階に位置づけられる。

現在までに朝日遺跡で検出されている埋葬人骨のうち、葬位が明らかなものは、貝殻山地点の前期例(2)を含め屈肢位が12例中10例と主体をしめ、今回のＳＺ01の伸展位は最も初期の例となり、本来屈肢位が伝統的な朝日遺跡で、当周溝墓内にて3号主体部が伸展位であること、台状部縁辺部に埋葬されていることは、この被葬者の性格を示唆しているものと思われ、この時期の土器棺に周辺地域の土器が多々見られることと合わせ(3)、当時期の周辺地域との関係を推考する上で参考となる。

又、1号主体部でその痕跡から組み合わせ木棺が当期に使用されていることが判明したが(4)、従前の調査にて中期前半の周溝墓の主体部と推定される土壙の両小口に落ち込みが確認されている例があり(5)、その使用開始がこの段階まで遡る可能性もある。

ＳＺ01が築造された中期末は、前述した土器に見られる変容のみならず、集落構造においても大きな画期となる時期であり、当周溝墓はこの時期の朝日遺跡を考える上で一助となろう。

〔注〕

(1)　ＳＺ01の位置については下記文献を参照
『年報　昭和60年度』　愛知県埋蔵文化財センター　1986

(2)　『貝殻山貝塚調査報告』　愛知県教育委員会　1972

(3)　知多半島から三河西部にかけて分布する獅子懸式・古井式の大型壺のみの例や、高蔵式と獅子懸式・古井式とを棺身↔蓋として組み合わせるものが多々見られる。このように土器棺に他地域の土器が使用される現象を、都出比呂志はその被葬者もしくはその縁者の出自と関連づけて理解しているが、当地域においても、高蔵式がそれまでの在地性を一変させるかのごとく波及している現象を、各地域間におけるさかんな人的・物的交流を媒体として捉えた時、その結果として土器棺に見られるこの様な現象を理解できるのではないだろうか。
都出比呂志　「弥生土器における地域色の性格」　『信濃』　35巻4号　1983
都出比呂志　「墳墓」　『日本考古学』　岩波書店　1986

(4)　春日井市勝川遺跡では、当期の棺材と推定されるコウヤマキの板材5枚セット2組が、集落中の作業場的空間から土坑中に貯蔵された状態で検出されており、この時期にはコウヤマキに限らず、組み合わせ木棺が当地域においても使用されていたことはほぼ確実であるが、実際に確認された例はない。
石黒立人　「勝川遺跡出土の大型板材について」　『勝川』　愛知県教育サービスセンター　1984

(5)　県教育委員会の調査によるＳＸ097の主体部と思われるＳＫ157の両小口に落ち込みが確認されている。
『朝日遺跡』　愛知県教育委員会　1982

方形周溝墓出土の一弥生時代人骨

— 昭和60年度発掘朝日遺跡ＳＺ01号墓３号主体人骨 —

池　田　次　郎*

愛知県西春日井郡清洲町所在の朝日遺跡では、弥生時代中期から後期にかけて築造された多数の方形周溝墓がこれまでの発掘調査により確認されている。これらの方形周溝墓の主体部から人骨が検出された例も少なくなく、それらのうちいくつかの人骨についての研究報告[1], [2]がすでに公表されているが、いずれも骨質が著しく脆いため骨の復元はきわめて困難で、正確な計測に堪えうる資料は皆無に近かった。

ここに報告する人骨は、昭和60年２月、朝日遺跡60Ｃ区で検出された弥生時代中期末に築造されたＳＺ01号方形周溝墓の３号主体部の人骨で、ほとんど全身骨格を残しており、骨質も堅牢で、土圧による変形が著しいため今回は復元できなかった頭蓋骨以外の骨については、計測値をはじめとする人類学的データを得ることができた。

なお、ＳＺ01号墓の３主体部のうち１号主体部には１体、２号主体部には複数個体の人骨が遺存していたが、いずれも骨の保存状態はきわめて悪い。これらについての所見は省略する。

埋葬姿勢

３号主体部の埋葬施設に関する記載は別稿に譲り、ここでは人骨の配置から推定される埋葬姿勢について述べる（Ｐ65：第２図・Ｐ85：図版１参照）。

遺体は頭を東北東に向け、股関節、膝関節とも伸ばした、いわゆる伸展位で葬られている。次に軀幹部であるが、下位頸椎から第11胸椎までの椎骨は椎体前面を上に向けており、左右肋骨の配列および骨盤の状況とともに被葬者が仰臥姿勢をとっていたことを示しているが、第12胸椎以下第４腰椎までの椎骨は第11胸椎と仙骨に関節している第５腰椎を結ぶ線から左にずれており、第12胸椎、第１～第３腰椎はその右側を、第４腰椎は椎体の上端面を上に向けている。このような位置の乱れは、遺体が白骨化した後に生じたものと考えられ、埋葬時の姿勢が仰臥伸展位であったことは確かである。

頭蓋骨は左側頭部を下にし、顔面を左、斜め上、尾側方向に向けている。下顎骨はその下顎頭を側頭骨の下顎窩に関節した状態にあるが、上・下顎骨の歯列は大きく離れ、しかもずれている。これは、下顎骨が原形を保ち、かつ埋葬時の位置に止まっているのに対し、

＊　京都大学名誉教授・岡山理科大学教授

上顎骨をはじめとする顔面頭蓋骨は土圧のため押し潰され、著しく歪んだためである。また前頭骨の大部分、脳頭蓋骨の正中部および左側の骨は、破片となって内頭蓋底に落ちこんでいる。したがって、埋葬時の被葬者の頭は左側頭部を下にし、顔を左やや斜め上、尾側方向に向けていたが、下顎骨以外の骨が示すほど極端に左を向いてはいなかったはずである。

外側前面を上に向けた左上腕骨は脊柱にほぼ平行で、肘関節では前腕がまがり、橈骨と尺骨は回外位を保ち頭側、内側へ伸び、その遠位端は左の上位肋骨上にある。前腕骨遠位端よりさらに内側、尾側よりに散乱している手根骨、中手骨、指骨は、手根関節で手が折りまげられていたことを示している。

右上腕骨は肩関節で強く内転し、その遠位端は第11胸椎付近にある。前腕は肘関節で強く折りまげられ、橈骨の遠位端およびそれに続く手骨は下顎骨に接しているが、右尺骨は埋葬時の原位置にない。すなわち、肘関節にあるべき尺骨近位端は、左橈骨の近位端近くに、下顎骨付近にあるべきその遠位端が右肘関節付近にある。橈骨と手骨の位置関係から手根関節で手は伸ばされていたとみられる。

左大腿骨は前面を上にして体軸方向に伸び、膝関節では脛骨、腓骨は伸ばされ、その前縁を上に向けている。足根骨、中足骨、指骨などの足骨のうち、距骨は脛骨と腓骨に関節しているが、それ以外の骨は、それより尾側および脛骨遠位部内側に接した所に散乱している。

体軸方向に真直ぐ伸ばされていた左下肢骨と異なり、右下肢骨は斜め左方向に伸ばされている。すなわち、大腿骨はその前面をやや外側に向け、その遠位端は左大腿骨遠位端の内側でそれより高い位置にある。脛骨は膝関節で伸ばされているが、その内側面を上にし、左下腿骨近位部の上を横切り、その遠位端は左下腿骨遠位端の外側で、それとほぼ同じ高さにある。足が距腿関節で背側にまげられた状態で足骨が関節している。

以上の骨の配置から、遺体は仰臥、顔を左上に向け、左肘をまげて左手は胸の上に乗せ、右の肩、肘を強くまげ右手は顎の近くに置かれていた。左脚は真直ぐ伸ばしているが、右脚は脚を組むような形で左脚の上に重ねていた。ほとんどすべての骨は埋葬時の位置にとどまっているが、右尺骨だけが例外で、遺体が白骨化した後、かなり大きく移動している。

人骨の保存状態

胸骨を除くほぼ全身骨格が残っており、いずれも骨質は堅牢で、頭蓋骨以外の体肢骨、とくに下肢骨の保存状態は良好であった。骨の表面には赤味を帯びた黄褐色の物質が固着し、とくに頭蓋骨ではそれらが藍青色の鉱物質の層を挟んで層状に重なっている。これらは、水酸化鉄であり、地下水に含まれる鉄分が付着したものである。

頭蓋骨：左右の上顎骨、頬骨、鼻骨からなる顔面は、右では側頭骨の頬骨突起から乳様突起まで、左では前頭骨の眼窩上縁、左側頭骨、左頭頂骨、後頭骨の左半分へ続いている。これら以外に、下顎骨と、前頭骨、右頭頂骨、後頭骨の破片が存在する。

顔面部は押し潰され変形した状態のまま硬化剤を塗布され、容易に復元することは困難であるが、硬化剤の及んでいない左の側頭骨、頭頂骨、後頭骨、および変形することなく残っていた下顎骨の復元が可能であった。下顎骨の右下顎枝は筋突起と下顎頸を欠損し、残存する下顎頭を下顎枝に接続することはできない。

上顎骨には左右とも第３大臼歯を含む全歯が、下顎骨には左右の中切歯から第２小臼歯までの歯と右第２大臼歯が釘植しており、左の第１・第２大臼歯と右の第１大臼歯の歯槽は閉鎖している。下顎の第３大臼歯は右では萌出していないが、左のそれは脱落しており、その歯槽はきわめて浅く、この歯が生前すでに脱落していた可能性も考えられる。なお、下顎右の第１・第２小臼歯は歯根部だけが残っているが、これが磨耗によるものか、折れて歯冠部を失ったものか、判定できない。

胴骨：尾椎を除く全椎骨が残存する。ほぼ完形をとどめている第２頸椎を別とし、第１頸椎から第１胸椎までの椎骨は破損が著しく、多くは椎体を残すだけである。これに対して第２胸椎から第３腰椎までは完形に近いが、第４・第５腰椎は椎弓の一部もしくは全部を欠く。仙骨は左の外側部を失っている以外、右仙骨粗面などにも欠損部がみられる。肋骨は左右とも残っているが、保存状態は悪く、胸骨は存在しない。

上肢骨：左肩甲骨は外側縁から関節窩下部、肩甲棘基底をへて肩峰に至る部を、右肩甲骨は下角から外側縁、関節窩下部、肩甲棘をへて上角に至る部を残す。左鎖骨は肩峰端と胸骨端の一部を、右鎖骨は肩峰端を欠く。

左上腕骨は、頭、大・小結節、外側上顆などに僅かな欠損部が認められるが、ほぼ完形を保っているのに対し、右上腕骨は近位端およびそれに続く骨体近位部を欠くだけでなく、遠位端および骨体の破損が著しい。左橈骨も環状関節面、茎状突起、手根関節面のそれぞれ一部が破損しているもののほぼ完全であるが、右橈骨は遠位端を欠損する。左右の尺骨は、それぞれ骨体の約⅙、約⅓を失っており、左尺骨の骨体上部の後縁も一部欠損している。

手根骨としては、左右の舟状骨、有頭骨、有鉤骨、左の大菱形骨、右の月状骨、小菱形骨、三角骨、豆状骨が遺存しており、左の大菱形骨と右の有鉤骨が一部破損している以外すべて完全である。中手骨は、左の第３中手骨を除きすべて存在するが、この中、右の第２・第４・第５中手骨以外は破損している。指骨では基節骨は全部、中節骨は左第５中節骨以外すべて認められたが、末節骨の中では左の第１・第２・第４と右の第４末節骨が欠

けている。

寛骨は左右とも腸骨と坐骨はよく残っているが、腸骨隆起および恥骨下枝の一部が破損しているため、残存する恥骨の破片を腸骨、坐骨と接続させることはできない。また左恥骨は恥骨結合面の全部を、右恥骨はその大半を欠いている。

左大腿骨は、頭、頸、大転子、内・外側顆のそれぞれ一部を欠くが、ほぼ完全であり、右大腿骨は、頭、頸、外側上顆、内・外側顆のそれぞれ一部と大転子の大部分を欠くなど、左より欠損部が多いが、それでも残りはよい。左右の膝蓋骨は、ともに膝蓋骨尖の後面を欠損する。左脛骨は、上関節面の前部から脛骨粗面の上部にかけて破損しており、右脛骨は上関節面、脛骨粗面のごく一部を欠くだけで完形に近い。左腓骨は、近位端を欠き、骨体近位部も破損しているのに対し、右腓骨は骨体近位部約3/4を欠いている。

左第３楔状骨以外の足根骨はすべて存在し、しかも右距骨がその距骨後突起の内側結節を欠く以外、すべて完全である。中足骨は左右ともすべて遺存するが、指骨の中で残っているのは、左の第２、右の第３基節骨と、基節骨の小破片１片だけである。

性、年齢の判定

保存良好の寛骨の形態から男性と判定されるが、男性的特徴はそれほど顕著でない。

年齢推定に最も有効な恥骨結合面は、左では欠損し、右でもその大半を欠いているので、これを利用することはできない。上下顎歯の歯冠の磨滅度をみると、上顎左の第１大臼歯と右の第１・第２大臼歯の咬耗は歯頸部まで達しており、小臼歯の磨滅もかなり進んでいる。下顎左の第１・第２大臼歯と右の第１大臼歯の歯槽は閉鎖しているが、上顎左の第２・第３大臼歯、右第３大臼歯の磨耗が軽微で、かつそれらの歯が下方に突出していることは、下顎大臼歯、とくに左の歯槽閉鎖がかなり早い時期に完了したことを示しており、小臼歯の強い磨滅もそのためと考えられる。

次に頭蓋縫合のうち、癒合度が観察できた左の人字縫合についてみると、その内板はもとより外板においてもほぼ全域にわたって縫合は消失しており、また後頭乳突縫合の癒合もほとんど完了している。これら縫合癒合の程度から、被葬者は熟年後半から老年と推定されるが、椎骨椎体や四肢長骨骨端に骨増殖が認められないこと、下顎骨にみられた歯槽閉鎖や小臼歯の強い磨耗は下顎大臼歯の早期脱落に起因すること、縫合癒合の進行の個体差などを考慮すれば、被葬者の死亡時年齢は歯や縫合から推定される年齢よりは若く、壮年後半から熟年前半にかけてであったと推定される。

人骨の計測的、非計測的特徴

朝日ＳＺ01男性の下顎骨、四肢長骨の計測値と示数を第１表～第５表に示す。比較のために、山口県土井ヶ浜遺跡の弥生前期人骨、(3), (4)愛知県吉胡貝塚の縄文晩期人骨(5), (6), (7)および近畿現代人骨(8), (9), (10)の数値を表に加えたが、これらはいずれも男性骨で、四肢長骨の場合には左を用いている。

頭蓋骨(第１表)：すでに述べた通り、脳頭蓋は復元できないので計測値を知ることはできない。乳様突起は小さく、項線の発達も弱く、男性骨としてはきゃしゃである。左右の舌下神経管は単一で、外耳道骨腫は認められない。歪んでいる顔面頭蓋も計測できないが、上顔高は明らかに低い。

下顎骨の計測値の中では、下顎角幅、下顎枝高、前枝高、下顎頭高など下顎枝に関係する計測値が著しく小さく、オトガイ高も吉胡縄文人とともに小さいが、他の計測値は中程度である。下顎枝高が低いため下顎枝示数は大きい。下顎切痕示数は土井ヶ浜弥生人、近畿現代人より小さく、吉胡縄文人に近い。軽度の角前切痕が認められる。咬合型式は鉗子状と推定され、風習抜歯は施されていない。

上肢骨(第２表・第３表)：鎖骨の計測値は吉胡縄文人、近畿現代人と大差なく、骨体断面示数は縄文人と現代人の中間に入る。右鎖骨の肋鎖靱帯圧痕はやや強い。上腕骨は細長く、きゃしゃである。すなわち、最大長、全長は縄文人、現代人だけでなく、土井ヶ浜弥生人より長いのに対し、骨体周径、中央最大径・最小径はいずれも小さく、また上端幅、下端幅、頭最大矢状径など骨端部計測値も小さい。したがって、長厚示数は最小である。中央最小径が著しく小ないため、骨体断面示数は吉胡縄文人よりさらに小さく、その著しい扁平性を示す。顆体角と捻転角が大きく、三角筋粗面の発達は弱いが、橈骨神経溝は深い。

橈骨も上腕骨同様、細長く、きゃしゃである。最大長、生理長とも著しく長く、骨体の周径と横径は小さく、長厚示数は極端に小さい。骨体横径が小さいため、骨体断面示数は大きく、骨体弯曲は弱い。大きな橈骨上腕骨示数は吉胡縄文人の数値に近い。尺骨骨体の横径、上横径の大きさは中程度であるが、前後径、上前後径が小さいため、骨体断面示数は著しく小さく、扁平示数は吉胡縄文人と同程度に大きい。回外筋稜、尺骨粗面は強く、また深指屈筋起始部の付着部は深く凹んでいる。

下肢骨(第４表・第５表)：大腿骨は上腕骨同様、細長いが、その程度は上腕骨ほど著しくない。最大長は縄文人、現代人より大きく、土井ヶ浜弥生人の平均値と一致し、中央周は縄文人、弥生人より小さいが、現代人より大きく、長厚示数は現代人、弥生人よりやや小さい程度にとどまっている。骨体中央の矢状径は縄文人、弥生人より小さく、現代人に近いが、横径はいずれより大きく、そのため中央断面示数は現代人をはるかに下まわる。これに対して上骨

体断面示数は縄文人、現代人より小さく、土井ヶ浜弥生人と大差なく、扁平である。大腿骨頭の垂直径、横径、周径はいずれもやや小さいが、外顆、内顆の各径は土井ヶ浜弥生人とともにやや大きい。骨体の弯曲は弱いが、顎体角、顆体角、捻転角は他と大差ない。大腿骨が上腕骨に比し相対的に頑丈であることは上腕骨最小周の大腿骨中央周に対する比率が著しく小さいことでも明らかで、比較３集団中最小の土井ヶ浜弥生人をさらに下まわる。また、殿筋粗面や粗線は強いが、中央断面示数が示すように柱状性は弱い。膝蓋骨は高径、幅径ともに小さく、細長いが、厚径は大きい。

脛骨は大腿骨と異なり、著しく細長く、上肢、下肢長骨のうち最もきゃしゃである。その最大長は縄文人、現代人はもとより、大腿骨最大長ではほぼ同程度であった土井ヶ浜弥生人よりはるかに長い。その結果、脛骨大腿骨示数、あるいは脛骨最大長の大腿骨最大長に対する比率では吉胡縄文人とともに大きい。骨体の中央および栄養孔部における最大径、横径、周径、さらに最小周が著しく小さいため、長厚示数も小さく、３集団中これに近いのは土井ヶ浜弥生人である。中央断面示数は、左では著しく小さいが、右では逆に大きく、脛示数すなわち栄養孔の位置における断面示数は厚型に属し、縄文人、弥生人より大きく現代人と一致する。骨体の弯曲はやや強く、縄文人に近いが、後傾角と傾斜角は小さく土井ヶ浜弥生人に、捻転は弱く現代人に似た数値を示す。骨間縁は鋭いが、ヒラメ筋線は弱く、遠位骨端に著明な蹲踞面は認められない。腓骨の骨体中央における諸径は、土井ヶ浜弥生人とともに縄文人と現代人の中間に位置し、中央断面示数も弥生人に最も近い。

左の大腿骨最大長から推定される身長は、ピアソン式で163.8cm、藤井式で163.3cmと算出され、高身長である。

以上、朝日ＳＺ01号男性骨の最も顕著な特徴として、高身長、男性骨としてはきわめてきゃしゃである点を挙げることができる。とくに四肢長骨はいずれも著しく長く、細いが、大腿骨および腓骨が比較的頑丈であるのに対し、脛骨は著しくきゃしゃである。土井ヶ浜弥生人、吉胡縄文人、近畿現代人との比較において、朝日ＳＺ01号人骨は、大腿骨の長厚示数、上骨体示数、遠位端の大きさ、中央周の上腕骨最小周に対する比、脛骨の長厚示数、後傾角、傾斜角、腓骨の中央径など下肢骨に土井ヶ浜弥生人に類似する特徴が認められるが、大腿骨中央断面示数や脛示数では近畿現代人に近く、橈骨上腕骨示数と脛骨大腿骨示数では吉胡縄文人と同様、前腕、下腿が相対的に長いという縄文時代人特有の特徴も示している。

他地域の弥生人骨との比較

弥生時代の中期から後期にかけて築造された方形周溝墓の主体部に被葬者の遺骨が遺存

していた例は、これまでのところ数遺跡を数えるに過ぎない。朝日遺跡では本資料が出土したＳＺ01号の１号、２号主体部のほか６例が報告されているが[1],[2]それ以外には東大阪市の瓜生堂遺跡[11]巨摩廃寺遺跡[12]山賀遺跡[13]八尾市亀井遺跡[14]神戸市玉津田中遺跡[15]および愛媛県釈迦面山遺跡[16]が知られているだけである。粘土でおおわれた箱式石棺内に埋葬されている釈迦面山遺跡を別とすれば、木棺に埋納されている方形周溝墓被葬者の遺骨は、その埋葬施設の性格上残存しにくいと考えられ、上記の遺跡の場合は方形周溝墓自体あるいは木棺だけが長期間にわたって水に浸っていたために遺骨が残ったと思われる。しかし、これらの人骨も水分の多い土中に埋っていたため、いずれも骨質が著しく脆く、人類学的研究に堪える状態にまで復元することは困難である。本資料は、大半の四肢長骨が復元でき、その特徴を知ることができた方形周溝墓出土人骨として釈迦面山人骨とともに貴重であり、また九州、山口地方以外の地域では出土例の少ない弥生人骨資料としても重要である。

朝日遺跡から出土した人骨は、これまでに９例が報告されているが[1] [2], [17]そのうちある程度の特徴が判明しているのは７例で、それらは弥生時代中期の土壙墓出土の１例を除き、中期、もしくは後期前半の方形周溝墓から出土した人骨である。７例中３例が男性、４例が女性であるが、その推定身長は男性で169cm、162cm、女性で155cm、156.4cm、155cm前後といずれも高身長で、ＳＺ01号を含む朝日弥生人が高身長をその特徴としていることは確かである。身長以外の特徴として、女性２例の頭蓋長幅示数が長頭ないし中頭であること、男性１例の大腿骨、脛骨の扁平性が弱いことが明らかにされ、それらの特徴は古墳時代人的特徴を濃厚に示しているという見解が提出されている[1]。

朝日遺跡以外の東海地方の弥生人骨としては、朝日遺跡に隣接する貝殻山貝塚出土の弥生前期人骨２体[18]名古屋市熱田高蔵貝塚で発掘された熟年男性骨２体[19]が報告されている。貝殻山人骨は２体とも男性で、そのうち１体の左上腕骨から算出された推定身長は160cm、他の１体もそれと同程度とみられているので、これも高身長の部類に入る。

大正初年に発掘された高蔵貝塚人骨は、日本人種論の学史上、見逃すことができない資料である。低顔、頑丈な顎骨、短く太い四肢長骨という特徴が明らかにされながら、結論としてはアイヌより現代日本人に類似するとされ、当時のアイヌ説を補強するのに大きな役割を果した。左上腕骨からピアソン式で算出されるその推定身長は152.0cm で著しく低く、この点で朝日、貝殻山弥生人骨とは異なる。しかし、その四肢骨の頑丈性は、朝日ＳＺ01号人骨にくらべれば確かに強いが、西日本の弥生人骨に比し特に顕著であるとはいえない。高蔵貝塚からは、この２体以外に３体が大正８年に清野謙次により発掘され、それらは未報告に終っているが、そのうちの壮年男性骨１体の上腕骨、大腿骨、脛骨の計測値は、佐藤が報告している高蔵人骨の数値によく似ている。

朝日ＳＺ01号人骨を含む東海地方の弥生人骨は、高蔵を別とすれば高身長で、計測値は得られていないが、朝日ＳＺ01、ＳＺ021、高蔵は低顔と推定されている。SZ01号の骨格、とくに四肢長骨がきわめてきゃしゃであるのは、この個体特有のものであり、東海弥生人の集団特徴を代表するものではないことを念頭に置き、朝日ＳＺ01号人骨の特徴を他地域、とくに一遺跡から多数の弥生人骨が出土している九州、山口地方の資料と比較する。

比較に用いた資料は、いわゆる渡来系弥生人といわれている山口県土井ヶ浜遺跡[3], [4]吉母浜遺跡[20]中ノ浜遺跡[21]福岡市金隈遺跡[22]佐賀県三津遺跡[23]二塚山遺跡[24]など北部九州・山口地方の弥生人骨と、縄文人的色彩を濃く残しているとされる佐賀県大友遺跡[25]長崎県深堀遺跡[26]宮の本遺跡[27]など西北九州の弥生人骨、さらに１例ではあるが方形周溝墓から出土した愛媛県釈迦面山遺跡の保存良好な弥生中期人骨[16]である。釈迦面山人骨の特徴は、西北九州タイプとされている。これら遺跡から出土した下顎骨、四肢長骨の計測値を第６～９表に示したが、いずれも男性、四肢骨は左側の数値である。

下顎骨計測値（第６表）では、朝日の下顎角幅は著しく小さく、比較集団中最小であるのに対し、その下顎長は大きく、土井ヶ浜、吉母浜、深堀に近いが、釈迦面山より小さい。オトガイ高、枝高、枝幅はいずれも小さく、この点で深堀、釈迦面山に近く、大きな下顎枝示数は釈迦面山と同程度である。このように朝日の下顎骨計測値は全体として釈迦面山人骨に最もよく似ている。

上肢骨計測値（第７表・第８表）についてみると、鎖骨が比較できた資料は僅かであるが、朝日の鎖骨計測値は同地域の高蔵、北部九州の三津に近く、釈迦面山より大きい。朝日の四肢骨は著しく長く細い点を最大の持徴としているが、上腕骨の最大長は比較集団中、中ノ浜に次いで長く、中央部の最大径、最小径、周径および最小周は、釈迦面山を除き最小である。したがって長厚示数も釈迦面山に次いで小さく、中ノ浜より僅かに大きい。朝日人骨の特徴の一つである上腕骨骨体の扁平性をあらわす骨体断面示数は釈迦面山を除き朝日が最も小さく、それよりやや大きいのが金隈、高蔵、吉母浜であるが、他ははるかに大きい。骨体の頑丈性が弱く、扁平性が強い点で朝日人骨は釈迦面山人骨によく似ている。

朝日の橈骨最大長は、１例の三津よりは短く、中ノ浜に一致するが、それ以外の集団より大きく、最小周は最も小さい。その結果、長厚示数も最小で、中ノ浜、三津がこれに次ぐ。釈迦面山の最小周は計測されていないが、その骨体横径、矢状径から朝日に匹敵するほど細いものと推定される。骨体矢状径、中央矢状径は比較集団と大差ないが、骨体横径、中央横径は最小で、そのため骨体断面示数、中央断面示数は最大値を示し、骨体の扁平性は弱い。釈迦面山の骨体断面示数は吉母浜とともに最も小さく、この点で朝日人骨とは異なり、朝日に最も近いのは中ノ浜の中央断面示数である。各集団の平均値から算出した橈

骨上腕骨示数を比較すると、朝日の数値は１例の三津を除き最大で、中ノ浜、大友がこれに次いで大きい。朝日の尺骨前後径は小さく、横径は中程度で、骨体断面示数は中ノ浜に次いで小さい。なお、この示数は、西北九州弥生人で大きく、吉母浜を除く北部九州・山口弥生人で小さいが、朝日は高蔵とともに後者の範囲内にある。

下肢骨計測値(第９表・第10表)についてみると、朝日の大腿骨最大長は二塚山、金隈、土井ヶ浜など北部九州・山口地方の各集団とともに大きく、西北九州の大友よりはるかに長い。資料数はそれぞれ２例、１例ではあるが、山口地方の吉母浜は比較集団中最も小さく、西北九州の宮の本が最大であるのはその例外である。中央周では朝日、釈迦面山、宮の本が最小グループを形成し、土井ヶ浜を除く北部九州・山口のいずれよりもはるかに小さく、土井ヶ浜、大友、高蔵はその中間に入る。その結果、朝日の長厚示数は比較集団中最も小さいが、宮の本とほぼ一致し、三津以外の他集団との差もそれほど著しくない。

松下[27]は、西北九州の宮の本弥生人の上肢骨、とくに上腕骨が太く頑丈であるのに対し下肢骨、とくに大腿骨は著しくきゃしゃであるが、佐賀平野の二塚山弥生人の上腕骨と大腿骨の関係は宮の本の場合と全く逆であるという興味深い提言を行った。その後、内藤[28]は、上肢骨と下肢骨の関係について、西北九州弥生人は宮の本と三津の弥生人は二塚山と同様それぞれ上腕骨と下肢骨が相対的に頑丈であるが、土井ヶ浜弥生人は上肢、下肢骨ともに著しく細く、きゃしゃであると追加している。さらに、中橋ら[22]は、上腕骨と大腿骨の頑丈性を比較するため、上腕骨最小周の大腿骨中央周に対する比を各集団の平均値から求めて比較した。その結果、男性では三津、二塚山、金隈など北部九州の甕棺人骨の数値が小さく、大友、宮の本など西北九州弥生人のそれは津雲、吉胡など縄文後晩期人とともに大きく、顔面形態や身長などの点で三津、二塚山、金隈と同一群に入る土井ヶ浜と島根県古浦の弥生人骨が、この点ではむしろ大友や縄文人に近い傾向を示すことを明らかにした。

朝日人骨の大腿骨が上腕骨ほどきゃしゃでないことは既に述べたが、それは計測値だけでなく、上腕骨の三角筋粗面、大腿骨の殿筋粗面や粗線など筋付着部の発達程度をくらべても明らかである。また上腕骨最小周と大腿骨中央周の比でも朝日の数値は吉母浜、金隈、三津など大腿骨が相対的に頑丈なグループに入る。なお、東海地方の高蔵の数値も小さいが、西北九州タイプとされている釈迦面山が比較集団中、最小の数値を示している点も注目される。

大腿骨中央の横径は、他集団と比較しそれほど小さくないが、その矢状径は釈迦面山とともに著しく小さい。そのため朝日の中央断面示数は釈迦面山に次いで小さく、これに吉母浜、高蔵が続く。骨体上部の横径、矢状径とも小さく、上骨体断面示数は三津、中ノ浜、二塚山ほどではないが大きい方で、大友、土井ヶ浜などに近い。なお、この示数では、

釈迦面山が極度に小さく、宮の本、高蔵も小さい。

全般的に細長い朝日の四肢長骨の中で、比較的頑丈な大腿骨とは対照的に、最もきゃしゃな骨が脛骨である。その最大長は比較集団中最大で、骨体中央部周径は釈迦面山より僅かに大きいが、栄養孔部周径、最小周とともに最も小さく、その結果、長厚示数も最小値を示す。大腿骨と脛骨の頑丈性を比較するために、脛骨骨体周と大腿骨中央周の比率を各集団の平均値から計算すると、九州・山口地方の弥生人の数値が90以上であるのに対し、朝日は86.9で、釈迦面山の85.5に近く、朝日の脛骨が釈迦面山とともに著しくきゃしゃであることが明らかである。なお、ヒラメ筋線など筋付着部の発達の程度も、朝日の脛骨が、きゃしゃであることを示している。

前腕骨や下腿骨が相対的に長いという縄文人骨の特徴は、古くから津雲人について指摘されているが[29]・[30] 山口[31]はこれを狩猟採集生活と関連させている。朝日の橈骨上腕骨示数および脛骨大腿骨示数、とくに後者が著しく大きく、吉胡縄文人に一致することはすでに述べたが、中橋ら[22]は各集団の平均値から求めた脛骨最大長の大腿骨最大長に対する比率を、九州・山口地方の弥生人の間で比較している。その結果、大友は縄文人に匹敵するほど大きいが、古浦、金隈、三津、二塚山など北部九州・山口タイプの弥生人は縄文人や大友より小さいことが明らかにされている。朝日の数値は大友に次いで大きいが、土井ヶ浜にも近い。

脛骨の骨体中央部および栄養孔の位置における最大径と横径を比較すると、朝日はほとんどすべての項目で最小値を示し、釈迦面山は朝日に次いで小さい。両径の比のうち栄養孔部における脛示数では、朝日は北部九州・山口地方弥生人とともに西北九州弥生人より大きく、釈迦面山も前者の範囲内にある。これに対して、中央断面示数では朝日は比較集団の中で最小値を示すが、その右脛骨の示数(76.9)は著しく大きいので、朝日の脛骨の扁平性は特に強いとはいえない。なお、この示数でも釈迦面山は西北九州集団より北部九州山口集団に近い。

腓骨骨体中央部の各径でも、朝日の数値は釈迦面山に次いで小さく、中央断面示数では北部九州・山口地方弥生人とともに釈迦面山および宮の本より小さい。

大腿骨最大長を用いピアソン式で算出した朝日の推定身長163.8cmは、比較集団中、二塚山に次いで高く、北部九州・山口地方弥生人および島根県古浦(165.8cm)の範囲内にあり、大友、西北九州弥生人(158.8cm)との間にはかなり大きな差が認められる。

以上、朝日人骨、とくにその四肢長骨計測値を渡来系とみなされる北部九州・山口地方弥生人と在来系といわれる西北九州弥生人と比較した結果、高身長を始めとし多くの特徴で北部九州・山口地方弥生人に類似するが、一方、橈骨、脛骨が相対的に長いなど、縄文

人的特徴においては西北九州弥生人に近く、また大腿骨に比し著しくきゃしゃな脛骨をもつ点ではいずれのタイプとも異なっていることが明らかにされた。

朝日の四肢骨計測値、示数に類似する数値は、四国の釈迦面山人骨に最も多くあらわれている。著しくきゃしゃな上・下肢骨、頑丈性が弱く、扁平性が強い上腕骨、相対的に頑丈で、柱状性が弱い大腿骨、大腿骨に比し著しくきゃしゃで、扁平性の弱い脛骨などがそれであるが、そのうち、極度に細い脛骨は、北部九州・山口地方・西北九州地方いずれの弥生人骨にも見られない特徴である。全四肢骨の長経、橈骨および大腿骨上部の扁平性など、朝日と釈迦面山との間で必ずしも一致しない特徴が存在することも事実であるが、両者の間の類似点は相異点よりはるかに多く、しかもそれらの特徴の多くは西北九州弥生人よりも北部九州・山口地方弥生人に通じるものである。しかし四肢骨形態の類似を集団間の系統関係に結びつけて論じるのには問題がある。

四肢骨の頑丈性、とくに上肢骨と下肢骨の相対的頑丈性は、縄文時代では早前期人と後晩期人[32]あるいは山間部住民と海岸居住者の間[33]に差があることが指摘され、その要因として、栄養条件その他の環境要因が重視されている。また、西北九州弥生人の頑丈な上腕骨は彼らの漁撈生活と、三津弥生人の頑丈な下肢骨はその農耕生活と関連するという推論[28]も提出されている。

山口[16]は、釈迦面山弥生人骨は低身低顔など縄文人の特徴を有し、西北九州弥生人と同様に、土着集団と考えられるが、その四肢骨の細さ、大腿骨の非柱状性、脛骨の非扁平性などの非縄文人的特徴は、繊細化への時代的変化が下肢骨に強くあらわれたものと、これを小進化の一環として捉えている。

朝日人骨、釈迦面山人骨はともに1例ずつであり、その特徴は必ずしもそれぞれの地域の弥生人集団を代表しているとは限らないが、両者の類似は、ともに弥生時代中期の方形周溝墓から出土しているという点からも興味深い。

ＳＺ01号人骨を始めとする朝日遺跡出土の弥生人骨はいずれも高身長で、この点では北部九州・山口地方弥生人の範囲に入る。またＳＺ01号の四肢骨には、これら渡来系集団に通じる特徴が認められるが、これを根拠に朝日弥生人を渡来系集団に帰属させるわけにはいかない。その結論は頭蓋骨とくに顔面形態が正確に把握しうる資料が、今後、東海地域で追加されるまで待たなければならない。また、四肢骨の相対的頑丈性の時代的変化と地域的変異の実態とその要因の解明が、今後の弥生人研究を進める上で大きな課題の一つであることを指摘しておきたい。

本資料を調査する機会を与えて頂いた愛知県埋蔵文化財センターの各位に感謝の意を表わしたい。

〔注〕

(1) 江原昭善・木下　実　1982　朝日遺跡出土の人骨について．「朝日遺跡　Ⅰ（本文編　1）」pp. 249－256．愛知県教育委員会．

(2) 江原昭善・木下　実・松本　眞　1984　ＳＺ021出土の人骨について．「環状２号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ－昭和58年度」pp. 142－145．愛知県教育サービスセンター．

(3) 大堀正俊　1958　山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生式前期人骨の下顎骨に就いて．人類学研究、5；87～151．

(4) 財津博之　1956　山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生前期人骨の四肢長骨に就いて．人類学研究、3；320～349．

(5) 金高勘次　1928　吉胡貝塚人々骨の人類学的研究．第１部　頭蓋骨の研究．人類学雑誌、43、附録：497～736．

(6) 大場秀夫　1935　吉胡貝塚人々骨の人類学的研究．第４部　上肢骨の研究．人類学雑誌、50、第９附録、pp. 89．

(7) 石沢命達　1931　吉胡貝塚人々骨の人類学的研究．第３部　下肢骨．其一　大腿骨、膝蓋骨、脛骨及腓骨の研究．人類学雑誌、46、附録：１～192．

(8) 宮本博人　1924　現代日本人人骨の人類学的研究．第１部　頭蓋骨の研究．人類学雑誌、39：307～451．

(9) 宮本博人　1925　現代日本人人骨の人類学的研究．第２部　上肢骨の研究．人類学雑誌、40：219～305．

(10) 平井　隆・田幡丈夫　1928　現代日本人人骨の人類学的研究．第４部　下肢骨の研究．其一　大腿骨・膝蓋骨・脛骨及腓骨に就て．人類学雑誌、43、附録：１～82．

(11) 池田次郎　1980　瓜生堂遺跡方形周溝墓出土の人骨について―1978～1979年度．「瓜生堂－本文編」pp. 449－450．大阪府教育委員会・大阪文化財センター．

(12) 池田次郎　1981　瓜生堂・巨摩廃寺遺跡方形周溝墓出土の人骨について．「巨摩・瓜生堂－本文編」pp. 309～315．大阪府教育委員会・大阪文化財センター．

(13) 大阪府文化財センター編　1983　「山賀（その２）」p.67．

(14) 大阪府文化財センター編　1982　「亀井遺跡」p.64．

(15) 未報告

(16) Yamaguchi B.　1979　A human skeletal remain of Yayoi period from Shakameyama site, Ehime Prefecture, Shikoku. Bulletin of the National Science Museum, Series D (Anthropology), 5：13－30．

(17) 江原昭善　1975　朝日遺跡群出土人骨について．「環状２号線関係朝日遺跡群第一次調査報告」pp. 100－105．愛知県教育委員会．

(18) 寺門之隆　1972　人骨の鑑定．「貝殻山貝塚調査報告」p.23．愛知県教育委員会．

(19) 佐藤亀一　1918　尾張国熱田の貝塚より得たる日本石器時代人骨に就て．人類学雑誌、33：309－349．

(20) 中橋孝博・永井昌文　1985　山口県下関市吉母浜遺跡出土の弥生・中世人骨．「吉母浜遺跡」pp. 154－225．下関市教育委員会．

(21) 中橋孝博・船越公威・永井昌文　1985　山口県中ノ浜遺跡第９次調査出土人骨．「中ノ浜遺跡、第９次発掘調査概報」pp. 25－38．豊浦町教育委員会．

(22) 中橋孝博・土肥直美・永井昌文　1985　金隈遺跡出土の弥生時代人骨．「史跡　金隈遺跡」pp. 43－145．福岡市教育委員会．

(23) 牛島陽一　1954　佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生時代人骨の人類学的研究．人類学研究、１：273－303．

(24) 松下孝幸　1979　二塚山遺跡出土の弥生時代人骨．「二塚山」佐賀県文化財調査報告書第46集．pp. 242－255．佐賀県教育委員会．

(25) 松下孝幸　1981　大友遺跡出土の弥生時代人骨．「大友遺跡」呼子町文化財調査報告書第１集．pp. 223－253．呼子町教育委員会．

(26) 内藤芳篤・栄田和行　1967　人骨．「深堀遺跡」人類学考古学研究報告第1号．pp．87－94．　長崎大学医学部解剖学第2教室．
(27) 松下孝幸　1981　宮の本遺跡出土の人骨．「宮の本遺跡」佐世保市埋蔵文化財調査報告書昭和55年度．pp．93－109，114－118，145－146．佐世保市教育委員会．
(28) 内藤芳篤　1981　弥生時代人骨．小片保編「人類学講座5　日本人Ⅰ」 pp．57－100．　雄山閣出版、東京．
(29) 清野謙次　1929　津雲石器時代人の身長と身体各部比例．史前学雑誌．1：221－288．
(30) 岡本辰之輔・関　政則　1930　日本石器時代人々骨（津雲貝塚人々骨）身体各部比例に就て．人類学雑誌、45：51－78．
(31) 山口　敏　1981　縄文時代人骨．シンポジウム「骨からみた日本人の起源」季刊人類学、12(1)：38－50．
(32) 小片　保　1973　縄文人の形質序説．どるめん、1：22－33
(33) 池田次郎　1985　海と山の縄文人－形態の地域差と時代差－．「日本史の黎明」 pp．29－56．　六興出版、東京．

第1表　下顎骨の計測値と示数

		朝日 SZ・01	土井 ヶ浜	吉胡近畿	
		弥・中	弥・前	縄・晩	現代
66	下顎角幅	90	106.8(42)	103.7(33)	100.5(30)
67	前下顎幅	48	48.3(56)	49.1(61)	45.9(30)
68	下顎長	76	76.0(42)	77.0(36)	73.4(30)
69	オトガイ高	30	33.3(47)	29.4(34)	36.5(29)
69(1)	下顎体高	32	31.6(54)	30.4(59)	33.6(30)
69(3)	下顎体厚	13	13.0(58)	13.1(65)	12.7(30)
70	枝高	54	62.2(45)	61.8(22)	61.0(29)
70(1)	前枝高	55	63.1(51)		64.8(30)
70(3)	下顎切痕高	13	14.5(44)	13.1(19)	15.1(30)
70a	下顎頭高	50	55.9(41)		
71	枝幅	34	36.4(54)	34.2(45)	33.5(28)
71a	最小枝幅	34	36.3(57)		
71(1)	下顎切痕幅	36	36.1(44)	37.5(20)	37.3(29)
79	下顎角	122	123.9(43)	120.9(38)	123.3(29)
69(3)／69(1)	下顎体高厚示数	40.6	41.4(53)	43.9(59)	38.4(29)
71 ／70	下顎枝示数	63.0	58.5(44)	55.5(21)	56.2(28)
70(3)／71(1)	下顎切痕示数	36.1	40.2(44)	35.6(19)	40.6(29)

（　）内は資料数

第2表　鎖骨、上腕骨の計測値と示数

		朝日 SZ・01		土井 ヶ浜	吉胡近畿	
		弥・中		弥・前	縄・晩	現代
鎖骨		左	右	左	左	左
4	中央垂直径	10	11		10.0(18)	10.4(30)
5	中央矢状径	13	13		14.1(18)	12.2(30)
6	中央周	37	39		40.3(18)	37.7(30)
4／5	骨体断面示数	76.9	84.6		71.3(18)	86.8(30)
上腕骨						
1	最大長	311		299.4(15)	283.1(27)	292.5(30)
2	全長	307		295.4(14)	278.9(27)	288.5(30)
3	上端幅	43		49.0(16)	49.2(27)	45.8(30)
4	下端幅	54		60.5(23)	59.6(27)	58.4(30)
5	中央最大径	21	22	22.6(53)	24.7(25)	22.0(30)
6	中央最小径	15	16	17.2(54)	18.1(25)	17.0(30)
7	最小周	59		64.5(53)	66.6(42)	63.9(30)
7a	中央周	62	63		72.1(25)	65.5(30)
10	頭最大矢状径	40		43.3(14)	44.8(24)	42.8(30)
16	顆体角	85		81.6(26)	83.7(37)	82.3(30)
17	頭体角	46		48.2(16)	44.1(21)	45.1(30)
18	捻転角	160		150.5(12)	141.7(20)	150.8(30)
7／1	長厚示数	19.0		21.3(17)	23.8(27)	21.9(30)
6／5	骨体断面示数	71.4	72.7	77.4(53)	73.4(25)	77.5(30)

（　）内は資料数

第3表　橈骨、尺骨の計測値と示数

		朝日 SZ・01		土井 ヶ浜	吉胡近畿	
		弥・中		弥・前	縄・晩	現代
橈骨		左	右	左	左	左
1	最大長	246		232.8(17)	227.7(28)	222.7(30)
2	生理長	236		219.6(20)	214.4(28)	207.2(30)
3	最小周	39	39	42.7(36)	48.5(44)	41.2(30)
4	骨体横径	15	15	17.0(39)	19.4(43)	16.3(30)
4a	中央横径	13	15	15.8(30)		
5	骨体矢状径	12	11	12.0(39)	13.0(43)	11.6(30)
5a	中央矢状径	11	10	10.6(27)		
5(5)	中央周	40	41			
6	骨体弯曲	2.3		3.2(23)	2.5(13)	2.7(30)
7	顆体角	170	168	166.7(27)	171.2(13)	168.4(30)
3／2	長厚示数	16.5		19.4(19)	22.6(28)	20.0(30)
5／4	骨体断面示数	80.0	73.3	70.4(39)	67.8(43)	70.6(30)
	橈骨上腕骨示数	76.9		74.3*	77.6(14)	71.5(30)
尺骨						
6	尺骨頭幅	23	23	25.2(30)		25.6(30)
7	尺骨頭深	24	23	25.5(35)		24.3(30)
11	前後径		12	13.3(40)	15.1(51)	12.5(30)
12	横径		16	15.4(28)	16.6(51)	15.4(30)
13	上横径	19	19	19.1(43)		19.8(30)
14	上前後径	23	23	25.8(38)		26.5(30)
15	尺骨角	82	77			85.4(30)
7／6	尺骨頭深示数	96.0	100.0	101.3(29)		95.0(30)
11／12	骨体断面示数		75.0	78.5(40)	92.2(47)	81.3(30)
13／14	扁平示数	82.6	82.6	74.4(37)	82.4(53)	75.8(30)

（　）内は資料数
＊平均値から算出

第4表　大腿骨、膝蓋骨の計測値と示数

		朝日 SZ·01		土井ヶ浜	吉胡	近畿
		弥・中		弥・前	縄・晩	現代
大腿骨		左	右	左	左	左
1	最大長	439	438	438.3(15)	420.2(20)	413.7(30)
2	自然長	429	435	428.7(15)	417.8(19)	410.2(30)
3	転子顆長	425		422.4(13)	405.4(17)	392.7(30)
4	自然位転子長	405		415.8(13)	395.3(17)	388.5(30)
5	骨幹長	354		342.5(11)	330.1(25)	325.5(30)
6	中央矢状径	27	27	28.6(53)	29.8(66)	26.8(30)
7	中央横径	27	27	26.6(53)	26.0(66)	25.6(30)
8	中央周	84	86	87.4(54)	89.2(66)	83.1(30)
9	骨体上横径	30	29	32.9(51)	30.2(47)	29.4(30)
10	骨体上矢状径	24	24	25.8(51)	25.0(48)	24.6(30)
14	前顎及び頭長	71	72	70.8(24)		73.1(30)
15	顎垂直径	33	33	33.6(22)	30.4(26)	32.8(30)
16	顎矢状径	25	26	27.1(22)	25.1(26)	25.4(30)
17	顎周	94		99.3(21)	92.1(26)	94.2(30)
18	頭垂直径	43	43	45.2(22)	44.0(19)	45.3(30)
19	頭横径	43	43	45.5(21)	43.8(23)	44.8(30)
20	頭周	(140)		144.1(17)	141.9(16)	142.5(30)
22	外顆厚	61		62.4(11)	59.9(34)	60.3(30)
23	外顆最大長	62	62	63.1(10)	59.8(20)	60.6(30)
24	内顆最大長	(61)	62	62.2(9)	60.7(17)	58.8(30)
25	外顆後高	34	35	36.9(17)		
26	内顆後高	38	36	36.8(17)		
27	骨体弯曲	2.5	3.1	4.1(15)	4.1(36)	3.3(30)
28	捻転角	22	14	18.8(16)	22.9(17)	11.0(30)
29	顎体角	129	129	127.2(24)	126.2(45)	131.3(30)
30	顆体角	77	80	80.6(17)	81.2(25)	79.8(30)
8 / 2	長厚示数	19.6	19.8	20.5(15)	21.9(19)	20.3(30)
6 / 7	中央断面示数	96.3	100.0	107.7(53)	114.8(66)	106.4(30)
10 / 9	上骨体断面示数	80.0	82.8	79.4(51)	83.5(47)	84.3(30)
16 / 15	顎断面示数	75.8	78.8	80.3(22)	83.5(42)	78.1(30)
19 / 18	頭断面示数	100.0	100.0	101.4(21)	99.9(30)	98.4(30)
上腕骨最小周 / 大腿骨中央周*		70.2		73.8*	74.7*	76.9*
膝蓋骨						
1	最大高	35	(35)		39.9(34)	41.2(30)
2	最大幅	40	40		44.3(35)	43.7(30)
3	最大厚	20	19		19.5(35)	19.7(30)
1 / 2	高幅示数	87.5	87.5		90.0(34)	94.6(30)

(　)内は資料数
＊平均値から算出

第5表　脛骨、腓骨の計測値と示数

		朝日SZ・01		土井ヶ浜	吉胡	近畿
		弥・中		弥・前	縄・晩	現代
脛骨		左	右	左	左	左
1	全長	359	361	351.0(9)	342.7(26)	327.2(30)
1a	最大長	366	368	356.6(9)	346.8(25)	331.8(30)
1b	脛骨長	355	356	346.4(10)	336.2(23)	321.9(30)
2	顆距間長	341	343	321.0(10)	333.8(23)	313.0(30)
3	最大上端幅		70	74.5(9)	73.7(30)	75.3(30)
6	最大下端幅	45	48	46.8(13)	48.1(34)	47.0(30)
7	下端矢状径	35	35		37.1(47)	36.0(30)
8	中央最大径	27	26	29.6(50)	31.0(60)	28.5(30)
8a	栄養孔部最大径	28	29	34.4(45)	34.2(55)	32.6(30)
9	中央横径	18	20	21.2(50)	21.0(61)	21.0(30)
9a	栄養孔部横径	20	21	24.0(52)	23.3(54)	23.6(30)
10	骨体周	73	74	81.4(50)	84.7(61)	79.0(30)
10a	骨体周	79	81	93.2(45)	93.4(54)	89.3(30)
10b	最小周	67	69	74.8(44)	77.8(54)	71.1(30)
11	弯曲	1.8	1.7	1.4(31)	1.7(38)	1.5(30)
12	後傾角	10	8	8.3(6)	19.2(21)	12.6(30)
13	傾斜角	7	5	4.5(6)	13.2(21)	8.5(30)
14	捻転	12	14	19.4(9)	17.5(21)	12.4(30)
10b／1	長厚示数	18.7	19.1	20.8(10)	22.7(26)	21.8(30)
9／8	中央断面示数	66.7	76.9	70.9(50)	67.5(60)	73.7(30)
9a／8	脛示数	71.4	72.4	69.5(45)	68.0(54)	72.4(30)
	脛骨大腿骨示数	82.8	81.8	80.8*	82.2(10)	78.5(30)
脛骨最大長／大腿骨最大長*		83.3	84.0	81.4	82.5*	80.2
腓骨						
2	中央最大径	15	15	16.5(29)	18.8(52)	13.7(30)
3	中央最小径	10	10	10.7(29)	11.8(52)	10.4(30)
4	中央周	43	43	44.5(29)	52.8(52)	41.1(30)
3／2	中央断面示数	66.7	66.7	68.3(26)	63.6(52)	76.5(30)

（ ）内は資料数
＊平均値から算出

第6表　各地弥生人骨の下顎骨計測値（男性）

		東海			北部九州・山口					四国	西北九州
		朝日SZ・01	朝日8号土壙	高蔵	土井ヶ浜	三津	金隈	吉母浜	二塚山	釈迦面山	深堀
66	下顎角幅	90		113 (1)	106.8	106.1(4)	108.8(14)	101.8(4)	114.5(2)	106 (1)	
68	下顎長	76		71 (1)	76.0	71.8(4)	73.2(17)	77.5(4)	67.3(3)	80 (1)	75.3(3)
69	オトガイ高	30		33.0(2)	33.3	33.9(17)	33.8(23)	34.0(2)		27 (1)	30.7(3)
69(1)	下顎体高	32	28.5(1)	30.5(2)	31.6	32.4(17)			33.6(9)		
69(3)	下顎体厚	13	15 (1)	13.0(2)	13.0				14.1(11)	13 (1)	
70	枝高	54		65 (1)	62.2	65.6(7)	64.8(6)	63.5(4)	64.8(5)	58 (1)	61.0(3)
70(3)	下顎切痕高	13		13 (1)	14.5	14.2(8)			15.6(5)		
71	枝幅	34		36 (1)	36.4	36.1(10)	37.0(12)	36.3(4)	35.6(8)	37 (1)	34.3(3)
71(1)	下顎切痕幅	36		33 (1)	36.1	35.5(8)			37.6(5)		
79	下顎角	122		123 (1)	123.9	121.3(9)	118.9(17)	121.0(4)	124.2(6)	121 (1)	124.0(3)
69(3)／69(1)	下顎体高厚示数	40.6	52.6(1)		41.4						
71／70	下顎枝示数	63.0		55.4(1)	58.5	55.3(7)	58.9(6)	57.1(4)	54.3(5)	63.8(1)	56.4(3)
70(3)／71(1)	下顎切痕示数	36.1		39.0(1)	40.2	40.1(8)			41.7(5)		

（ ）内は資料数

第7表　各地弥生人骨の鎖骨、上腕骨計測値（男性、左）

		東海		北部九州・山口						四国		西北九州	
		朝日SZ-01	高蔵	土井ヶ浜	三津	金隈	吉田汲	中ノ浜	二塚山	釈迦面山		大友	宮の本
鎖骨													
4	中央垂直径	10	10.5 (2)		10.4(10)								
5	中央矢状径	13	12.5 (2)		13.3(10)								
6	中央周	37	36.0 (2)		39.7(10)					29 (1)			
4 / 5	骨体断面示数	76.9	82.2 (2)		79.2(10)								
上腕骨													
1	最大長	311	281 (1)	299.4	306.3(3)	304.5(4)	288.5(2)	320.7(3)	300 (2)*	(296)(1)*		291.4(11)	305 (1)
2	全長	307		295.4	299.5(2)	304.0(2)	286.0(2)	304.3(3)*	296.5(2)*	293 (1)*		285.8(8)	300 (1)
3	上端幅	43	47 (1)	49.0	56 (1)								
4	下端幅	54	55 (1)	60.5	60 (1)								
5	中央最大径	21	23 (1)	22.6	23.4(13)	23.6(12)	23.0(3)	22.7(8)	24.1(12)*	20 (1)*		23.4(34)	24.3(6)
6	中央最小径	15	17 (1)	17.2	18.0(13)	17.1(12)	17.0(3)	17.5(8)	17.9(12)	14 (1)*		17.6(33)	19.5(6)
7 a	最小周	59	62 (1)	64.5	65.5(13)	65.3(14)	61.7(3)	63.8(8)	65.9(9)*	54 (1)*		63.5(33)	66.3(6)
7	中央周	62	66 (1)			68.3(12)	66.3(3)	66.5(6)	69.9(12)*	58 (1)*		68.2(33)	72.7(6)
7 / 1	長厚示数	19.0	22.1(1)	21.3	22.1(3)	21.9(4)	20.9(2)	19.6(2)	21.3(2)*	(18.2)(1)*		22.4(11)	22.0(1)
6 / 5	骨体断面示数	71.4	73.9(1)	77.4	77.3(13)	72.7(12)	74.1(3)	77.3(8)	76.5(2)*	70.0(1)*		75.0(33)	80.1(6)

（ ）内は資料数
＊右

第8表　各地弥生人骨の橈骨、尺骨計測値（男性、左）

		東海		北部九州・山口					四国		西北九州	
		朝日SZ-01	高蔵	土井ヶ浜	三津	金隈	吉母浜	中ノ浜	釈迦面山		大友	宮の本
橈骨												
1	最大長	246	192 (1)	232.8	252 (1)	238.8(12)	223.3(3)	246.6(5)			231.5(6)	237 (1)
2	生理長	236		219.6	237 (1)	220.0(9)	207.0(3)	231.0(3)			215.8(9)	221 (1)
3	最小周	39		42.7	42.7(6)	42.6(17)	42.0(3)	41.7(9)			44.7(15)	43.7(3)
4	骨体横径	15		17.0	16.9(7)	17.1(17)	18.3(3)	17.0(9)	16(1)*		17.1(25)	16.9(8)
4 a	中央横径	13	17 (1)	15.8		16.3(16)	16.3(3)	16.0(4)			16.4(25)	16.9(7)
5	骨体矢状径	12		12.0	12.3(7)	12.3(17)	12.0(3)	12.1(9)	10.5(1)*		12.4(25)	12.6(8)
5 a	中央矢状径	11	12 (1)	10.6		12.4(16)	12.0(3)	12.8(5)			12.4(26)	12.9(7)
5(5)	中央周	40	47 (1)								45.9(23)	48.0(5)
3 / 2	長厚示数	16.5		19.4	19.0(1)	19.2(9)	20.3(3)	18.6(3)			20.5(5)	19.9(1)
5 / 4	骨体断面示数	80.0	67.6(1)	70.4	72.5(7)	71.9(17)	65.5(3)	71.6(9)	65.6(1)*		72.3(25)	73.4(8)
5 a / 4 a	中央断面示数	84.6	40.6	67.1**		71.1(16)	73.4(3)	80.1(4)			75.2(25)	77.0(6)
橈骨最大長 / 上腕骨最大長**		79.1	68.3	77.8	82.2	78.4	77.4	76.9			79.4	77.7
尺骨												
11	前後径	12*	14(1)*	13.3	13.6(11)	13.1(23)	13.3(3)	13.1(7)			15.0(26)	14.8(6)
12	横径	16*	18(1)*	15.4	17.7(11)	16.8(23)	15.7(3)	17.9(7)			17.3(26)	17.5(6)
11 / 12	骨体断面示数	75.0*	77.8(1)*	78.5	76.5(11)	78.6(23)	86.9(3)	72.6(7)			88.0(26)	84.9(6)

（ ）内は資料数
＊右
＊＊平均値から算出

第9表　各地弥生人骨の大腿骨計測値（男性、左）

		東海		北部九州・山口					四国	西北九州	
		朝日SZ-01	高蔵	土井ヶ浜	三津	金隈	吉母浜	中ノ浜	二塚山	釈迦面山	大友	宮の本
1	最大長	439		438.3	429.5(6)	438.6(11)	413.5(2)	432.7(6)	441.3(7)*		420.1(15)	450 (1)
2	自然長	429		428.7	422.0(6)	438.0(7)	409.0(2)	426.0(2)*	441.0(3)*		413.9(7)	445 (1)
6	中央矢状径	26	29.0(2)	28.6	30.3(6)	29.4(3)	28.3(3)	29.4(4)	30.4(5)*	25 (1)	28.6(4)	27.6(8)
7	中央横径	27	28.0(2)	26.6	27.6(6)	27.7(3)	28.7(3)	27.1(4)	28.1(6)*	28.5(1)	26.4(2)	26.4(8)
8	中央周	84	87.5(2)	87.4	92.4(6)	90.0(3)	90.7(3)	89.0(3)	91.8(5)*	83 (1)	87.0(4)	85.5(8)
9	骨体上横径	30	32 (1)	32.9	31.7(6)	32.9(4)	33.7(3)	31.8(5)	32.2(2)*	34.5(1)	31.6(8)	31.4(8)
10	骨体上矢状径	24	24 (1)	25.8	29.8(6)	25.8(4)	26.0(3)	26.1(5)	26.6(2)*	20.5(1)	25.2(8)	23.4(8)
8 / 2	長厚示数	19.6		20.5	22.5(6)	21.1(7)	21.5(2)	20.5(2)*	21.3(3)*		21.4(6)	19.8(1)
6 / 7	中央断面示数	96.3	103.6(2)	107.7	111.3(6)	105.5(3)	100.1(3)	106.9(4)	108.7(5)*	87.7(1)	108.6(4)	105.0(8)
10 / 9	上骨体断面示数	80.0	75.0(1)	79.4	94.5(6)	78.7(4)	78.0(3)	82.8(5)	82.5(2)*	59.4(1)	80.1(9)	74.6(8)
上腕骨最小周 / 大腿骨中央周**		70.2	71.5(2)	73.8	70.9	70.7	68.0	71.7	71.8*	65.1	73.0	77.5

( )内は資料数
*右
**平均値から算出

第10表　各地弥生人骨の脛骨、腓骨計測値（男性、左）

		東海		北部九州・山口					四国	西北九州	
		朝日SZ-01	土井ヶ浜	三津	金隈	吉母浜	中ノ浜	二塚山	釈迦面山	大友	宮の本
脛骨											
1	全長	359	351.0	346.8(4)	329.7(3)	333.3(3)	349 (1)	355.7(3)*		345.3(10)	341 (1)
1a	最大長	366	356.6	347.6(7)	345.3(11)	338.7(3)	354.7(3)	358.6(5)*		354.8(11)	346 (1)
8	中央最大径	27	29.6	32.0(14)	31.6(17)	29.8(4)	32.0(6)	31.0(20)*	26.5(1)	31.0(13)	30.0(6)
8a	栄養孔部最大径	28	34.4	37.7(17)	36.0(29)	35.8(4)	35.5(10)	35.4(17)*	31 (1)	34.5(5)	34.8(6)
9	中央横径	18	21.2	23.2(14)	22.9(17)	22.3(4)	22.5(6)	22.5(20)*	19 (1)	21.4(3)	20.5(6)
9a	栄養孔部横径	20	24.0	26.0(17)	25.5(29)	25.0(4)	25.0(10)	25.0(16)*	22 (1)	23.3(6)	22.7(6)
10	骨体周	73	81.4	89.5(14)	85.4(17)	82.0(4)	86.5(6)	84.2(20)*	71 (1)	83.4(1)	81.0(6)
10a	骨体周	79	93.2	102.8(17)	97.2(29)	95.5(4)	94.7(10)	95.8(16)*	83 (1)	92.6(4)	91.8(6)
10b	最小周	67	74.8	81.6(13)	77.5(26)	75.5(4)	76.5(11)	76.6(11)*		75.6(8)	76.4(5)
10b / 1	長厚示数	18.7	20.8	23.5(3)	23.5(3)	22.5(3)		23.3(3)*		21.9(10)	22.9(1)
9 / 8	中央断面示数	66.7	70.9	73.0(14)	72.7(17)	74.9(4)	70.4(6)	72.7(20)*	71.7(1)	69.1(4)	68.4(6)
9a / 8a	脛示数	71.4	69.5	68.9(17)	71.2(29)	70.1(4)	70.5(10)	70.9(16)*	71.0(1)	67.7(5)	65.1(6)
脛骨最大長 / 大腿骨最大長**		81.8	81.4	80.9	78.7	80.6	80.7	80.6*		84.5	75.8
脛骨骨体周 / 大腿骨中央周**		86.9	93.1	96.9	94.9	90.4	97.2	91.7*	85.5	95.9	94.7
腓骨											
2	中央最大径	15	16.5	17.2(8)	17.0(3)	17.5(4)			13.5(1)		16.0(5)
3	中央最小径	10	10.7	11.1(8)	11.3(3)	12.0(4)			9.5(1)		11.4(5)
4	中央周	43	44.5	48.8(8)	46.3(3)	49.0(4)			38 (1)		45.6(5)
3 / 2	中央断面示数	66.7	68.3	64.7(8)	67.0(3)	68.6(4)			70.4(1)		71.4(5)
大腿骨最大長からの推定身長(cm)		163.8	162.8(18)	162.0(7)	162.7(17)	159.1(2)	163.6(10)	164.3(7)	155.1(1)	159.1(15)	165.9(1)

( )内は資料数
*右
**平均値から算出

図版Ⅰ　人骨出土状態・下顎骨



3号主体部人骨出土状態▲◀



下顎骨　前面観▶　側面観▲　上面観▼







図版Ⅱ　四肢骨（前面）



肩甲骨・鎖骨・上腕骨



橈骨・尺骨



大腿骨・膝蓋骨



脛骨・腓骨

朝日遺跡61B区貝層のブロック・サンプリング

渡　辺　　誠*

1．はじめに

朝日遺跡61B区ⅦHグリットにおいて、1986年11月にサンプリングを行った貝層ブロックのサイズ・層序などは、第1表に示すとおりである。時期は弥生時代中期前葉の朝日式期より同後葉の高蔵式期までである。サンプリングは上層から順番に実施したので、数字の多いほど概して下層に相当するが、これらの作業を各グリットごとに進めたため、若干の錯綜もある。これらを時期別に整理すると、次のとおりである。

第1表　ブロック・サンプリング一覧表

No.	サイズ（タテ・ヨコ・厚さ）	地区	層位	構成	時期
1	30×30×20	ⅦH13n	第3層	混土貝層	高蔵
2	30×30×5	〃	第4層上部	混土貝層　鉄分多	〃
3	30×30×5	〃	第4層下部	混土貝層　鉄分多	〃
4	30×30×20	〃	第6層	混土貝層	貝田町～高蔵
5	30×30×10	ⅦH13q	第21層	混土貝層	〃
6	30×30×5	〃	第23層	混土貝層	〃
7	30×30×5	〃	第25層	破砕貝層	貝田町
8	30×30×5	〃	第27層	破砕貝層	〃
9	30×30×10	〃	第33層	混土貝層	〃
10	30×30×5	〃	第38層	破砕貝層	〃
11	30×30×2	〃	第47層	破砕貝層	〃
12	30×30×10	ⅦH12q	第52層	混土貝層　鉄分多	貝田町～高蔵
13	30×30×5	〃	第53層	混土貝層	〃
14	30×30×5	〃	第54層	混土貝層	〃
15	30×30×5	〃	第55層	混土貝層	〃
16	30×30×5	〃	第58層	混土貝層	貝田町
17	30×30×3	〃	第20層	混土貝層	〃
18	30×30×3	〃	第60層	混貝粗砂層	〃
19	30×30×3	〃	第62層	混土貝層	朝日
20	30×30×8	ⅦH11q	第18層	破砕貝層、水中堆積？	貝田町
21	30×30×10	〃	第71層	破砕貝層、水中堆積？	朝日
22	30×30×10	〃	第72層	破砕貝層、水中堆積？	〃

＊　名古屋大学文学部助教授

第2表　貝類種名一覧表

A．腹足綱　GASTROPODA

1．ツタノハガイ科	ヨメガカサ *Cellana toreuma* REEVE
2．ニシキウズガイ科	キサゴ *Umbonium*(*Suchium*) *costatum* KIENER
3．リュウテンサザエ科	サザエ *Turbo* (*Batillus*) *cornutus* SOLANDER
4．アマオブネ科	アマオブネ *Nerita* (*Theliostyla*) *albicilla* LINNAEUS
5．タニシ科	オオタニシ *Cipangopaludina japonica* MARTENS
6．タニシ科	マルタニシ *Cipangopaludina malleata* REEVE
7．カワニナ科	カワニナ *Semisulcospira bensoni* PHILIPPI
8．ウミニナ科	ウミニナ *Batillaria multiformis* LISCHKE
9．ウミニナ科	イボウミニナ *Batillaria zonalis* BRUGUIERE
10．ウミニナ科	ヘナタリ *Cerithidea* (*Cerithideopsilla*) *cingulata* GMELIN
11　ウミニナ科	フトヘナタリ *Cerithidea* (S.S.)
12．アクキガイ科	アカニシ *Rapana thomasiana* CROSSE
13．アクキガイ科	イボニシ *Purpura clavigera* KÜSTER
14．アクキガイ科	レイシ *Purpura bronni* DUNKER
15．エゾバイ科	オガイ *Cantharus cecillei* PHILIPPI
16．オリイレムシロガイ科	アラムシロ *Hinia festiva* POWYS
17．イトマキボラ科	イトマキボラ？ *Pleuroploca trapezium* LINNAEUS

B．斧足綱　PELECYPODA

1．イタボガキ科	イタボガキ *Ostea* (s. s.) *denselamellosa* LISCHKE
2．イタボガキ科	マガキ *Crassostrea gigas* THUNBERG
3．カワシンジュガイ科	カワシンジュガイ *Margaritifera margaritifera* LINNAEUS
4．フナガタガイ科	ウネナシトマヤガイ *Trapezium* (*Neotrapezium*) *Iiratum* REEVE
5．シジミ科	ヤマトシジミ *Corbicula japonica* PRIME
6．マルスダレガイ科	ハマグリ *Meretrix Iusoria* RÖDING
7．マルスダレガイ科	カガミガイ *Dosinia* (*Phacosoma*) *japonica* REEVE
8．マルスダレガイ科	オキシジミ *Cyclina sinensis* GMELIN
9．バカガイ科	シオフキ *Mactra veneriformis* REEVE
10．エゾオオノガイ科	オオノガイ *Mya* (*Arenomya*) *arenaria oonogai* MAKIYAMA

朝日式期（前葉）　No.19・21・22（第62～72層）

貝田町式期（中葉）　No.6～11・16～18・20（第18～60層）

貝田町～高蔵式期　No.4～6・12～15（第6～23・52～55層）

高蔵式期（後葉）　No.1～3（第3～4層）

貝層には貝の密度や状態によって、混土貝層と破砕貝層とがある。これらのうち混土貝層は各期にわたってみられるが、破砕貝層は朝日式期～貝田町式期にのみみられる。そし

てこのうち特に第18・71・72の３層は、旧河道へ水で流されて堆積した可能性が大きい。

水洗選別の結果は、これらの各ブロック内の遺物はほとんど自然遺物であり、人工遺物は少量の土器片がみられたのみである。自然遺物の主体をなすものは貝類であり、他は少量の獣骨・魚骨、および植物遺体などである。本稿では主に貝類について報告し、他の遺物については略記するにとどめる。

２．貝の種類と構成

検出された貝類は27種である（第２表・写真１参照）。これらの大部分は食用に供せられたものとみられるが、なかには幼貝も含まれていて、食用価値の乏しいものもある。なお陸産の微小貝も少なくないが、本稿では省略せざるをえない。

27種の各ブロックにおける構成比は、第４表に示すとおりである。

27種のうち腹足綱（巻貝）は17種みられ63％を占めるが、個体数は少なく15％にしか相当しない。これに対して斧足綱（二枚貝）は10種で27％にすぎないが、個体数においては85％を占めている。そのなかでももっとも多いのはハマグリであり、53％を占める。発育のよい大型品が多い。これについでやや多いのはマガキ・ヤマトシジミ、および腹足綱のタニシ類である。このタニシ類（オオタニシ・マルタニシ）とカワニナ・カワシンジュガイの４種は淡水産で、ヤマトシジミは汽水産であるが、他の22種はすべて鹹水産である。そしてこれらの鹹水産貝類のうちでも主体をなすハマグリ・マガキは典型的な内湾の砂泥底に棲む種類であり、他の多くも同様である。そのなかにあってごく少量ではあるが、サザエ・レイシなどの岩礁性の貝類も含まれることは、少量のウニとともに興味深いことである。

これらの貝類の構成比からみると、貝層は次の４群に大別される。

Ａ．マガキが主体となる貝層

Ｂ．ヤマトシジミが主体であるが、ハマグリの比重も高い貝層

Ｃ．ハマグリが主体であるが、ヤマトシジミやタニシ類の比重も高い貝層

Ｄ．ハマグリが主体となる貝層

そしてこれらと時期の関係を整理すると第３表のとおりである。なお個体の絶対数の少ないNo.10・11・15については省くこととする。

これによって明らかなように、Ａのマガキ主体型はすべて朝日式期、Ｂのヤマトシジミ＋ハマグリ型は貝田町式期、貝田町～高蔵式期、Ｃのハマグリ＋ヤマトシジミ・タニシ類型はすべて貝田町～高蔵式期に属す。そしてＤのハマグリ主体型は貝田町式期、貝田町～高蔵式期、高蔵式期に属し、朝日式期に属するものはない。

したがって貝類の構成は、朝日式期のマガキ主体型から、貝田町式期のハマグリに加え

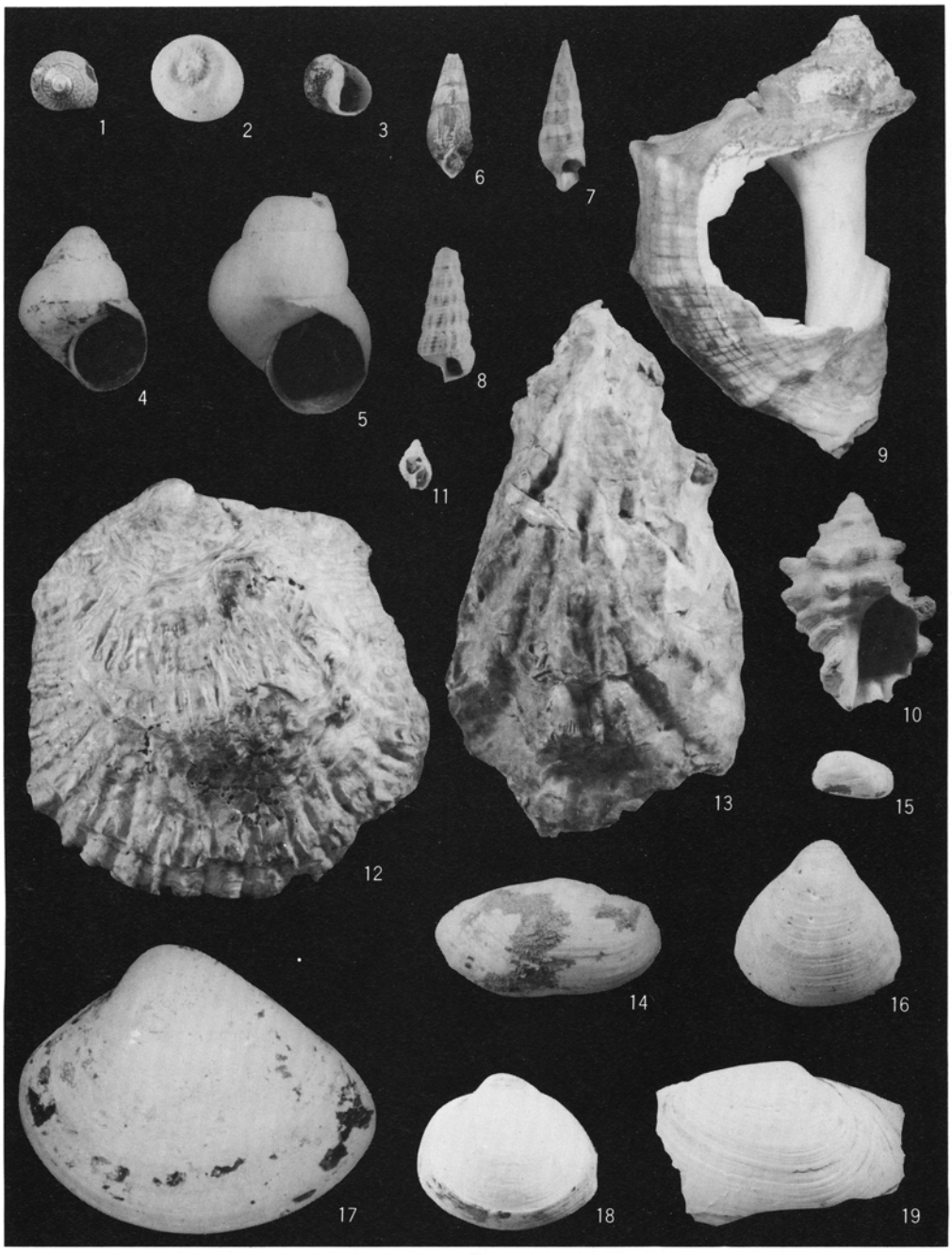


写真1　貝類（縮尺3分の2）

1：キサゴ、2：サザエ蓋、3：アマオブネ、4：オオタニシ、5：マルタニシ、6：カワニナ、7：イボウミニナ、8：フトウミニナ、9：アカニシ、10：レイシ、11：アラムシロ、12：イタボガキ右殻、13：マガキ左殻、14：カワシンジュガイ右殻、15：ウネナシトマヤガイ左殻、16：ヤマトシジミ左殻、17：ハマグリ左殻、18：シオフキ左殻、19：オオノガイ右殻.

第3表　貝層類型と時期の関係

時期＼類型	A	B	C	D
朝日式期	19・21・22			
貝田町式期		7・8・17・18		9・16・20
貝田町～高蔵式期		13	5・6・12・14	4
高蔵式期				1・2・3

て汽水および淡水産のヤマトシジミやタニシ類の比重も高い段階を経て、高蔵式期のハマグリ主体型へと推移しているとみることができる。ただしこの傾向を朝日遺跡全体の傾向とみなしうるどうかは、さらに他地区のブロック・サンプリングの調査を行った上で検討する予定である。

3．他の自然遺物

貝類以外の動物遺体は、獣骨・鳥骨の細片、ヘビ類の脊椎骨、ウニ、フジツボ、魚骨、および植物遺体などである。後二者を除く他の種類はきわめて少量である。

魚骨にはタイ類・スズキ・ボラなどがみられる。これらはいずれも浅海河口性の魚類であり、ハマグリを多産する水域環境とよく一致している。

またコメやヒョウタン仲間などの栽培植物の種子もみられるが、これらに混じってオニグルミ・サンショウなどもみられる。

4．おわりに

弥生時代の代表的な遺跡である朝日遺跡の貝層には、縄文時代のそれとは異なるいくつかの顕著な特徴がみられる。

その第1は人工遺物があまり含まれないこと、第2は埋葬人骨がみられないこと、第3は獣骨がきわめて少なくなることである。

これらの背景には、単に方形周溝墓が発達したばかりでなく、貝塚が霊の送り場から単なるゴミ捨て場へと変質しつつあることが示唆されている。また水田の発達による平野部における狩猟活動の衰退も示唆されている。タニシ類などの若干の比重の増加や粱の存在などは、こうした新時代に適応した農村型漁業によって、動物蛋白の欠乏を補おうとしている姿勢の反映である。

また三河湾の貝塚にはハイガイが多いのに対し、伊勢湾奥部の本貝塚にハイガイがほとんどみられないことも、顕著な地域性とみることができる。

そして最後に今後の重要課題として、貝層内の遺物の分析ばかりでなく、住居址群との関係において貝層の形成のプロセスを検討していく必要のあることを強調しておきたい。

第4表　貝類構成比一覧表

種名	ブロック番号 / 構成比	1 左殻/右殻	1 最小個体数	1 %	2 左殻/右殻	2 最小個体数	2 %	3 左殻/右殻	3 最小個体数	3 %	4 左殻/右殻	4 最小個体数	4 %
腹足綱	ヨメガカサ		—	—		—	—		—	—		—	—
	キサゴ		—	—		—	—		—	—		—	—
	サザエ		—	—		—	—		—	—		—	—
	アマオブネ		—	—		—	—		—	—		—	—
	タニシ科		4	0.96		1	0.74		1	0.81		7	1.28
	カワニナ		—	—		—	—		—	—		—	—
	ウミニナ		—	—		—	—		—	—		—	—
	イボウミニナ		—	—		2	1.48		—	—		—	—
	ヘナタリ		—	—		—	—		1	0.81		—	—
	フトヘナタリ		4	0.96		—	—		—	—		—	—
	アカニシ		8	1.92		3	2.22		2	1.61		2	0.36
	イボニシ		—	—		—	—		—	—		—	—
	レイシ		1	0.24		—	—		—	—		—	—
	オガイ		—	—		—	—		—	—		—	—
	アラムシロ		—	—		—	—		—	—		—	—
	イトマキボラ		—	—		—	—		—	—		—	—
	小計		17	4.08		6	4.44		4	3.23		9	1.64
斧足綱	イタボガキ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	マガキ	31/24	31	7.47	20/11	20	14.81	3/2	3	2.42	0/1	1	0.18
	カワシンジュガイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ウネナシトマヤガイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ヤマトシジミ	48/59	59	14.22	15/15	15	11.11	28/14	28	22.58	26/30	30	5.47
	ハマグリ	283/277	283	68.19	90/85	90	66.67	85/86	86	69.35	490/503	503	91.79
	カガミガイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	オキシジミ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	シオフキ	—	—	—	1/0	1	0.74	—	—	—	4/2	4	0.72
	オオノガイ	25/22	25	6.02	3/1	3	2.22	0/3	3	2.42	0/1	1	0.18
	小計		398	95.90		129	95.55		120	96.77		539	98.34
	計		415	99.98		135	99.99		124	100.00		548	99.98

種名	ブロック番号 / 構成比	5 左殻/右殻	5 最小個体数	5 %	6 左殻/右殻	6 最小個体数	6 %	7 左殻/右殻	7 最小個体数	7 %	8 左殻/右殻	8 最小個体数	8 %
腹足綱	ヨメガカサ		—	—		—	—		—	—		—	—
	キサゴ		—	—		—	—		—	—		—	—
	サザエ		—	—		—	—		—	—		—	—
	アマオブネ		—	—		—	—		—	—		—	—
	タニシ科		22	21.57		39	42.86		2	4.65		1	1.37
	カワニナ		1	0.98		1	1.10		3	6.98		2	2.74
	ウミニナ		—	—		—	—		—	—		—	—
	イボウミニナ		—	—		—	—		—	—		2	2.74
	ヘナタリ		—	—		—	—		—	—		—	—
	フトヘナタリ		1	0.98		3	3.30		1	2.33		5	6.85
	アカニシ		3	2.94		—	—		—	—		3	4.11
	イボニシ		—	—		—	—		—	—		—	—
	レイシ		—	—		—	—		—	—		—	—
	オガイ		—	—		1	1.10		—	—		—	—
	アラムシロ		—	—		—	—		—	—		—	—
	イトマキボラ		—	—		—	—		—	—		—	—
	小計		27	26.47		44	48.36		6	13.96		13	17.81
斧足綱	イタボガキ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	マガキ	—	—	—	—	—	—	0/1	1	2.33	2/1	2	2.74
	カワシンジュガイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ウネナシトマヤガイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ヤマトシジミ	17/18	18	17.65	1/0	1	1.10	20/15	20	46.51	36/39	39	53.42
	ハマグリ	34/45	45	44.12	35/32	35	38.46	16/12	16	37.21	18/14	18	24.66
	カガミガイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	オキシジミ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	シオフキ	1/0	1	0.98	—	—	—	—	—	—	1/0	1	1.37
	オオノガイ	11/10	11	10.78	8/11	11	12.09	—	—	—	—	—	—
	小計		75	73.53		47	51.65		37	86.05		60	82.19
	計		102	100.00		91	100.01		43	100.01		73	100.00

種名	ブロック番号 / 構成比	9 左殻/右殻	9 最小個体数	9 %	10 左殻/右殻	10 最小個体数	10 %	11 左殻/右殻	11 最小個体数	11 %	12 左殻/右殻	12 最小個体数	12 %
腹足綱	ヨメガカサ		—	—		—	—					—	—
	キサゴ		—	—		—	—					—	—
	サザエ		—	—		—	—					—	—
	アマオブネ		—	—		—	—					—	—
	タニシ科		16	6.72		—	—					70	32.41
	カワニナ		2	0.84		—	—					2	0.93
	ウミニナ		2	0.84		—	—					—	—
	イボウミニナ		3	1.26		1	10.00					4	1.85
	ヘナタリ		—	—		—	—					1	0.46
	フトヘナタリ		30	12.61		—	—					—	—
	アカニシ		7	2.94		3	30.00					4	1.85
	イボニシ		—	—		—	—					—	—
	レイシ		—	—		—	—					—	—
	オガイ		—	—		—	—					1	0.46
	アラムシロ		—	—		—	—					—	—
	イトマキボラ		—	—		—	—					—	—
	小計		60	25.21		4	40.00					82	37.96
斧足綱	イタボガキ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	マガキ	12/ 4	12	5.04	3/6	6	60.00	2/0	2	100.00	2/ 1	2	0.93
	カワシンジュガイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ウネナシトマヤガイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/ 0	1	0.46
	ヤマトシジミ	26/ 16	26	10.92	—	—	—	—	—	—	7/ 3	7	3.24
	ハマグリ	139/107	139	58.40	—	—	—	—	—	—	114/114	114	52.78
	カガミガイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	オキシジミ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	シオフキ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	オオノガイ	1/ 0	1	0.42	—	—	—	—	—	—	5/ 10	10	4.63
	小計		178	74.78		6	60.00		2	100.00		134	62.04
	計		238	99.99		10	100.00		2	100.00		216	100.00

種名	ブロック番号 / 構成比	13 左殻/右殻	13 最小個体数	13 %	14 左殻/右殻	14 最小個体数	14 %	15 左殻/右殻	15 最小個体数	15 %	16 左殻/右殻	16 最小個体数	16 %
腹足綱	ヨメガカサ		—	—		—	—		—	—		—	—
	キサゴ		—	—		—	—		—	—		—	—
	サザエ		—	—		1	1.01		—	—		—	—
	アマオブネ		—	—		—	—		—	—		—	—
	タニシ科		5	10.00		21	21.21		—	—		1	1.27
	カワニナ		—	—		2	2.02		—	—		—	—
	ウミニナ		—	—		—	—		—	—		—	—
	イボウミニナ		4	8.00		1	1.01		—	—		—	—
	ヘナタリ		—	—		—	—		1	4.55		—	—
	フトヘナタリ		—	—		—	—		2	9.09		1	1.27
	アカニシ		1	2.00		3	3.03		5	22.73		—	—
	イボニシ		—	—		—	—		—	—		—	—
	レイシ		—	—		—	—		—	—		—	—
	オガイ		—	—		—	—		—	—		—	—
	アラムシロ		—	—		—	—		—	—		—	—
	イトマキボラ		1	2.00		—	—		—	—		—	—
	小計		11	22.00		28	28.28		8	36.37		2	2.54
斧足綱	イタボガキ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	マガキ	3/ 3	3	6.00	2/ 2	2	2.02	—	—	—	1/ 0	1	1.27
	カワシンジュガイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/ 1	1	1.27
	ウネナシトマヤガイ	—	—	—	—	—	—	0/ 1	1	4.55	—	—	—
	ヤマトシジミ	14/18	18	36.00	13/17	17	17.17	2/ 2	2	9.09	11/21	21	26.58
	ハマグリ	15/16	16	32.00	47/38	47	47.47	11/ 5	11	50.00	52/50	52	65.82
	カガミガイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	オキシジミ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	シオフキ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	オオノガイ	1/ 2	2	4.00	5/ 1	5	5.05	—	—	—	0/ 2	2	2.53
	小計		39	78.00		71	71.71		14	63.64		77	97.47
	計		50	100.00		99	99.99		22	100.01		79	100.01

種名	ブロック番号 / 構成比	17 左殻/右殻	17 最少個体数	17 %	18 左殻/右殻	18 最少個体数	18 %	19 左殻/右殻	19 最少個体数	19 %	20 左殻/右殻	20 最少個体数	20 %
腹足綱	ヨメガカサ		—	—		—	—		—	—		—	—
	キサゴ		—	—		—	—		—	—		—	—
	サザエ		—	—		—	—		—	—		—	—
	アマオブネ		—	—		—	—		1	1.03		—	—
	タニシ科		2	4.35		2	2.63		2	2.06		2	1.14
	カワニナ		—	—		1	1.32		4	4.12		21	12.00
	ウミニナ		—	—		—	—		—	—		—	—
	イボウミニナ		1	2.17		1	1.32		4	4.12		8	4.57
	ヘナタリ		—	—		—	—		1	1.03		2	1.14
	フトヘナタリ		1	2.17		1	1.32		2	2.06		2	1.14
	アカニシ		—	—		1	1.32		1	1.03		7	4.00
	イボニシ		—	—		—	—		—	—		—	—
	レイシ		—	—		—	—		—	—		—	—
	オガイ		—	—		—	—		—	—		—	—
	アラムシロ		1	2.17		—	—		—	—		3	1.71
	イトマキボラ		—	—		—	—		—	—		1	0.57
	小計		5	10.86		6	7.91		15	15.45		46	26.27
斧足綱	イタボガキ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	マガキ	1/0	1	2.17	5/3	5	6.58	46/20	46	47.42	1/2	2	1.14
	カワシンジュガイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ウネナシトマヤガイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ヤマトシジミ	22/21	22	47.83	37/42	42	55.26	13/11	13	13.40	10/13	13	7.43
	ハマグリ	16/17	17	36.96	21/22	22	28.95	9/1	9	9.28	79/112	112	64.00
	カガミガイ	—	—	—	0/1	1	1.32	—	—	—	—	—	—
	オキシジミ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	シオフキ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	オオノガイ	0/1	1	2.17	—	—	—	14/8	14	14.43	2/0	2	1.14
	小計		41	89.13		70	92.11		82	84.53		129	73.71
	計		46	99.99		76	100.02		97	99.98		175	99.98

種名	ブロック番号 / 構成比	21 左殻/右殻	21 最小個体数	21 %	22 左殻/右殻	22 最小個体数	22 %	総計 最小個体数	総計 %
腹足綱	ヨメガカサ		—	—		9	3.77	9	0.29
	キサゴ		—	—		1	0.42	1	0.03
	サザエ		—	—		—	—	1	0.03
	アマオブネ		—	—		—	—	1	0.03
	タニシ科		24	11.01		2	0.84	224	7.23
	カワニナ		12	5.50		—	—	51	1.65
	ウミニナ		—	—		—	—	2	0.06
	イボウミニナ		3	1.38		6	2.51	40	1.30
	ヘナタリ		1	0.46		2	0.84	9	0.29
	フトヘナタリ		2	0.92		1	0.42	56	1.81
	アカニシ		1	0.46		3	1.26	57	1.84
	イボニシ		1	0.46		—	—	1	0.03
	レイシ		—	—		—	—	1	0.03
	オガイ		—	—		—	—	2	0.06
	アラムシロ		1	0.46		—	—	5	0.16
	イトマキボラ		—	—		—	—	2	0.06
	小計		45	20.65		24	10.06	462	14.90
斧足綱	イタボガキ	—	—	—	0/1	1	0.42	1	0.03
	マガキ	144/45	144	66.06	125/66	125	52.30	409	13.20
	カワシンジュガイ	—	—	—	—	—	—	1	0.03
	ウネナシトマヤガイ	5/9	9	4.13	59/41	59	24.69	70	2.26
	ヤマトシジミ	4/3	4	1.83	13/5	13	5.44	408	13.17
	ハマグリ	12/10	12	5.50	13/16	16	6.69	1,643	53.08
	カガミガイ	—	—	—	—	—	—	1	0.03
	オキシジミ	—	—	—	1/0	1	0.42	1	0.03
	シオフキ	—	—	—	—	—	—	7	0.23
	オオノガイ	1/4	4	1.83	—	—	—	95	3.07
	小計		173	79.35		215	89.96	2,636	85.13
	計		218	100.00		239	100.02	3,098	100.03

朝日遺跡出土の外来系土器について　—1—

石　黒　立　人

I

朝日遺跡では各種の外来系土器が出土している。外来系土器は西日本、東日本の広範囲に係累を辿ることができる。しかし、搬入品と在地品の識別に関しては未だ試行中であり、確定したものとはなっていない。この点は将来の課題として持ち越さざるを得ない。

外来系土器の出土頻度には時期的な変動がある。Ⅲ期までは東西とも存在するのに対し、Ⅳ期以降は西日本系に占められ東日本系はほとんどみられなくなるという傾向を見せる。詳しい比率を出すための統計的処理は実施していないので定量比的な検討は行い得ないが、とりあえず目立つ資料を抽出し、本稿以降シリーズで紹介することでカタログ作成を進めたいと思う。

本稿では、Ⅱ、Ⅲ期の東日本系土器を重点的に取り上げた。それらは「東日本系」という言葉からくるイメージと異なり、恐らく伊勢湾周辺地域で製作されたものがほとんどと思われる。あるいは、朝日遺跡で製作されたものが含まれているかもしれない。

Ⅱ

Ⅱ期に属す東日本系土器は、条痕文系土器、平行線文（半截竹管文）系土器、沈線文系土器（縄文充塡、擬縄文充塡を含む）に類別する。

条痕文系土器　器形のわかるものは『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題　資料編Ⅰ』（愛知考古学談話会　1985）に準拠するので、以下に調整・施文に関する分類を原体に則して提示する。

a類　二枚貝条痕（文）のみ　第1図1・2・7・9・12

b類　二枚貝条痕（文）＋平行線（半截竹管）文　第1図3。

c類　二枚貝条痕（文）＋篦描沈線文　第1図4・8。

d類　櫛（Ⅱ種B）条痕（文）＋平行線文　第1図5。

平行線（半截竹管）文系土器　器形的には条痕文系土器に類似するものもあるが、施文技法の異なることをもって区分する。とはいえ、破片資料中には条痕文系土器b類と区分

の難しい例もある。特に壺の場合、体部上半にナデ調整ののち平行線文のみを施し、体部下半に二枚貝条痕のみを施す例もあり、〈折衷系〉を含めての厳密な区分には困難を伴う。第1図6。

沈線文系土器　沈刻文を主文様とする一群である。今回は紹介しなかったが、小形壺、浅鉢からなる。小形壺では充填縄文を加えるものもある。（→大地型壺）。

以上の類別は、文様表出手法を規準としている。つまり調整・施文の未分化・分化という点を重視したのであるが、条痕文系土器と平行線文系土器との折衷型の位置づけや、沈線文系土器における縄文の評価など問題は多い。また条痕文系土器と櫛描文系土器との関係においても、全く無関係として区分することのできない部分もあり、この点はⅢ期での類別を難しいものにしている。

Ⅲ

Ⅲ期に属す東日本系土器は続条痕文系土器と櫛描文系土器に類別する。

続条痕文系土器　器形全体のわかる例は少ない。壺の基本形はⅡ期条痕文系土器を継承するが、そのうち肩に段をもつ長頸壺形土器の発達が著しい。

a類　条痕（文）主体で、原体には二枚貝、櫛（Ⅱ種B）がある。

b類　条痕（二枚貝・櫛Ⅱ種B）＋篦描沈線文または平行線文。篦描沈線文・平行線文が従属的施文であるb_1と、篦描沈線文が主体的施文となっているb_2とに区分できる。

篦描沈線文のb_1・b_2に共通する用法は、Ⅲ期に始まる横位区画を軸とする施文の多段化に対応した区画文に代表される。b_1の場合には区画文としての篦描沈線文の欠落する例がある。

体部上半施文部と体部下半の条痕部との境界には複合鋸歯文を配置する例が目立つ。この点は別稿で触れたとおりである。第3図1・4・5・6・13。

c類　篦描沈線文。条痕は欠落するが、条痕文系土器との系譜関係を重視して含めることにした。第2図4、第3図12。

x類　二枚貝背面押圧による擬縄文充填を特徴とする一群である。全形のわかる例は未確認である。続条痕文系土器に含めるべきか判断に迷うが、a類・b類に二枚貝使用例のあることを重視し、とりあえずここに含めておく。第4図1・2・3

櫛描文系土器　櫛描文のみという例はない。すべて篦櫛併用である。この点はⅢ期に属す土器全般の特徴でもある。特に篦描沈線は横位区画文としての用法が通例である。

櫛描文は、いささか感覚的な区分になるが、太描と細描に区分できる。太描は二枚貝や太目の枝茎を用いた櫛、細描は細目の枝茎を用いた櫛である。太描は条痕文に共通する原体を使用している。太描：第3図9。細描第4図5・6。

Ⅳ

今回紹介した土器群をめぐる若干の問題についてコメントを加える。

1．Ⅱ期条痕文系土器に特徴的なハネアゲ文は3つに分類できる。

A類〔∪〕　波状文の施文動作で行うハネアゲ文典型。

B類〔／〕　下端のハネアゲ部分が斜下方へ逃げる。

C類〔∧〕　A・B両類が上から下への動作を基本としていたのと異なり、下から上への動作による。縦位・斜位がある。

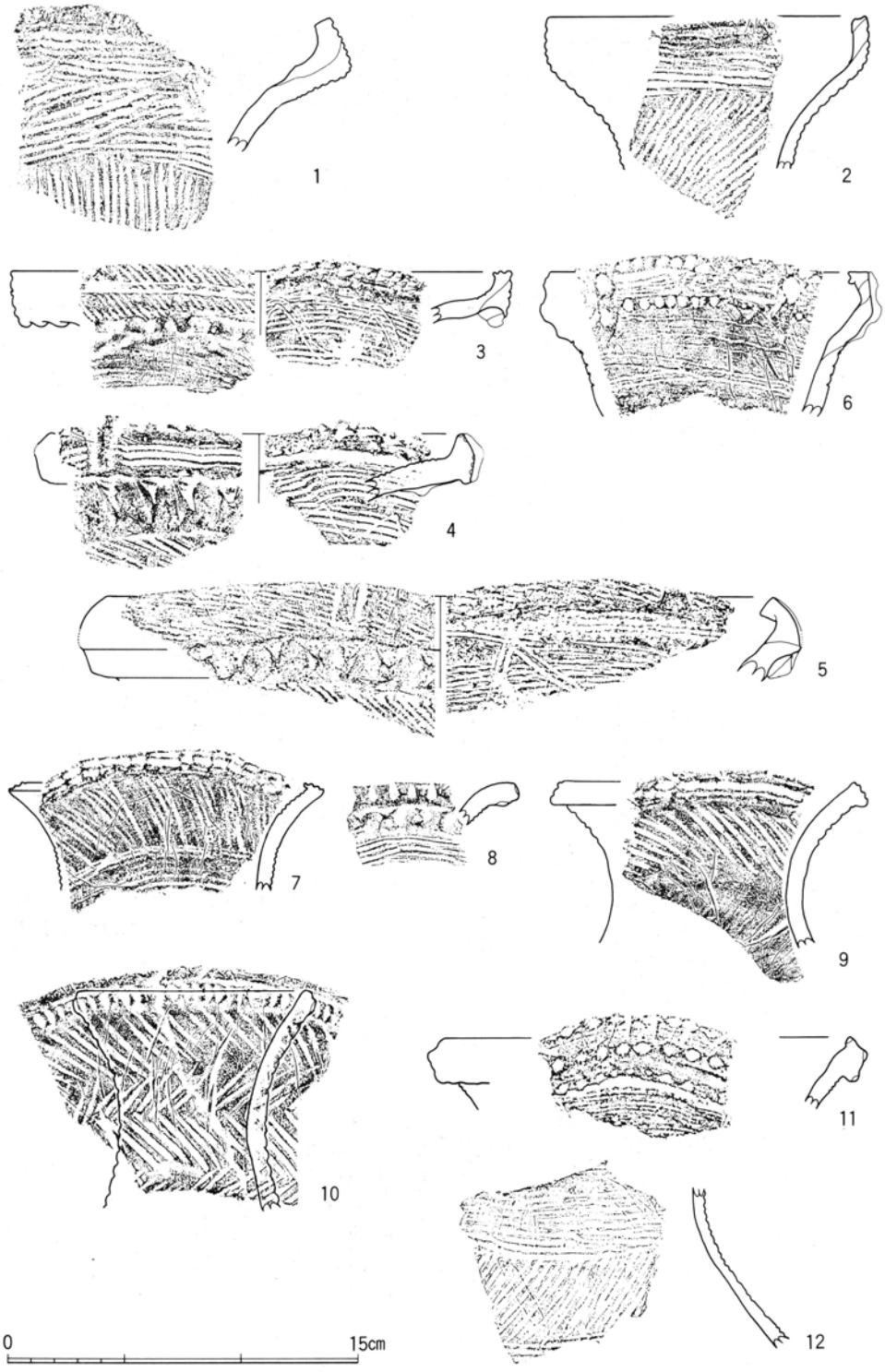
A類はⅡ期に限定される。壺の場合口縁部外面の貼付突帯はもつものもたないものの両者があり、比率は前者が高い。B・C両類になるとA類に比べ突帯欠落率は高くなる。C類はⅢ期にも存在する。つまり、Ⅱ期内でA類からB類へと変化し、B類に併行して始まったC類はⅢ期へ継承されるという図式に整理することができる。

2．条痕文系土器―調整・施文b類の分布は知多半島と尾張低地部で知られているにすぎないが、美濃に同C類の存在することをみれば美濃も分布圏となる可能性はある。遠江の丸子式にみられる波状平行線文や口唇部圧痕文は三河を飛び越した連繋を示唆するものであろうか。

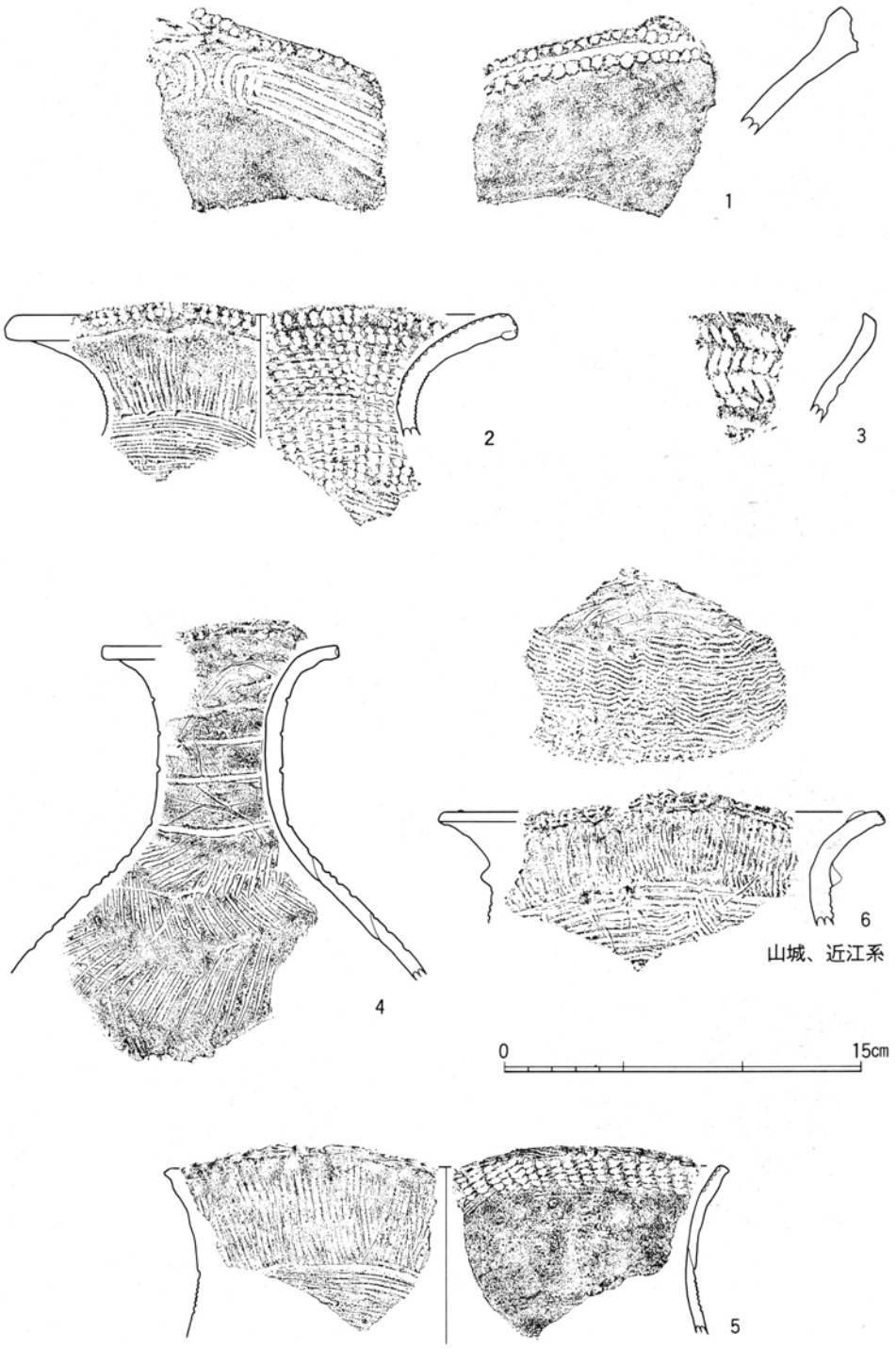
3．条痕文系土器b類や平行線（半截竹管）文系土器はⅢ期にはほとんど見られなくなるが、それに代わって続条痕文系土器b_2類や同c類の優勢になる点は平行線（半截竹管）文から沈線文への転換を意味するのであろうか。

4．調整・施文への二枚貝使用は、Ⅱ期は朝日式壺・甕、尾張・美濃の条痕文系土器に優勢である。Ⅲ期続条痕文系土器や櫛描文系土器の一部にある二枚貝使用例はⅡ期を継承するものとすれば、尾張、美濃という近接地での製作を想定できるのであり、「東日本系」といえども決して遠隔地製作ばかりではないことになる。この点に関しては別稿でも触れているように、地域差の歴史性として「地域性」一般とは区別されねばならない。

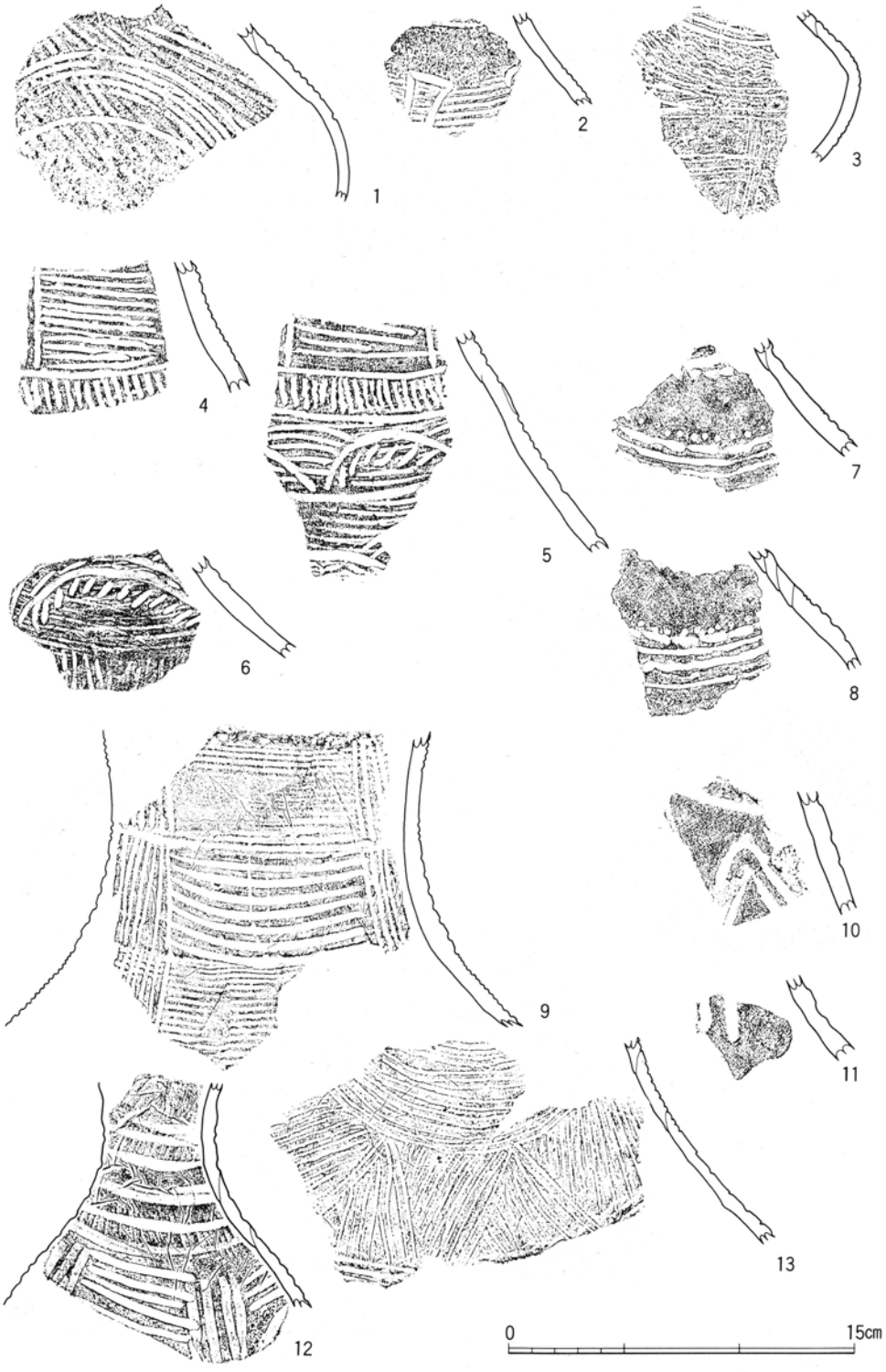
（つづく）



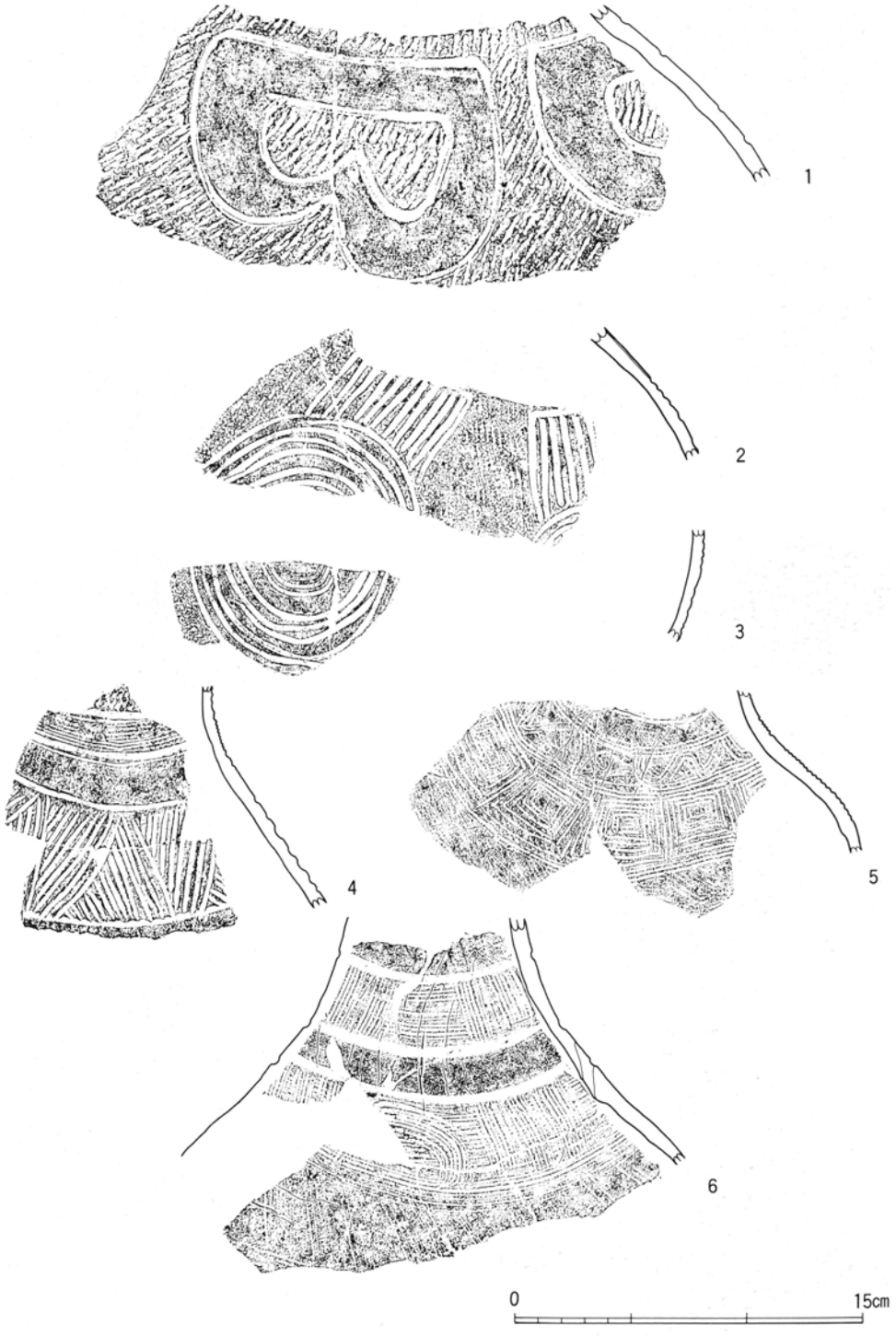
第1図



第2図



第3図



第4図

図版番号	実測図番号	出土地点	器種	残存部 部分名	残存部 口径	胎土	焼成	色調	形態・施文・技法
1－	1	I AS60B ⅦH 15b サブトレ	壺	口縁～頸	/	細石粒子を極多量に含む。2㎜程度の金雲母片が顕著。	良好	淡灰褐色	受口状口縁。口唇部：二枚貝の背面圧痕文。受口部外面：二枚貝による直線と連弧(←)、背面圧痕文。頸部外面：上半に、ヨコ～ナナメ(←)への、下半に、タテ(↑)への二枚貝条痕文。口縁内面ヨコナデ。
	2	I AS60B ⅦH 17a 検出Ⅱ	壺	口縁～頸	13.7	2㎜程度の細石粒子を極多量に含む。	普通	淡灰白橙色	受口状口縁。受口部外面：二枚貝によるヨコ(←)への条痕文。頸部外面：右上から左下へのハネアゲ文B。
	3	I AS60G ⅦG 18a 検出Ⅲ	壺	口縁	21.5	細石粒子を多く含む。	良好	淡灰黄色	受口状口縁。口唇部：二枚貝腹縁による押引き文(←)。受口部外面：下端を下方へ拡張し、粘土帯貼付後、指頭による押捺(↑)。二枚貝によるナナメ(↖)への条痕文(←)の後、二又工具による直線文。頸部外面：二枚貝によるヨコへの条痕文。頸部内面：二枚貝によるヨコ(→)への条痕文の後、二又工具のヘラ波状文(←)。
	4	I AS60G ⅦH 10t 検出Ⅰ	壺	口縁	17.8	細石粒子を極多量に含む。	良好	淡灰褐色	受口状口縁。口唇部：二枚貝腹縁による押引き文(←)。受口部外面：下端を下方へ拡張し、二枚貝によるヨコ(→)への条痕文の後、1本1単位の棒状浮文を貼付。頸部外面：二枚貝によるナナメへの条痕文の後、粘土帯を貼付し、指頭によりナデ気味に押捺(↑)。頸部内面：二枚貝によるヨコ(←)への条痕文の後、ヘラによる波状文(←)。
	5	I AS60B ⅦH 17a トレンチ	壺	口縁	28.5	〃	不良	淡灰黒褐色	受口状口縁。口唇部：ナナメ(↘)への短いクシ描直線文と、指頭単独圧痕。受口部外面：ナナメ(↘)への短いクシ描直線文の後、棒状浮文を貼付。頸部外面：二枚貝によるナナメ(↖)への条痕文(←)の後、粘土帯を貼付し、指頭によりナデ気味に押捺(↑)。頸部内面：二枚貝によるヨコへの条痕文の後、二又工具による山形文(←)。
	6	I AS60G ⅦF 17t 検出Ⅰ	壺	口縁～頸	13.9	5㎜前後の細石粒子を多量に含む。	良好	淡灰白黄色	受口状口縁。口唇部：両端を拡張、下方へ折り返した後、両端にヘラ側面による刻み。受口部外面：二又工具による流水文風の文様の後、下端にヘラ側面による刻みを行い、口唇部から頸部外面上半にかけて棒状浮文を貼付し、口唇部上部には、二枚貝背面圧痕、受口部上部と頸部外面上半上部には、指頭圧痕。頸部外面：二又工具による直線文(→)。
	7	I AS60G ⅦF 17t 検出Ⅰ	壺	口縁～頸	13.5	極微細な金雲母片を多く含む。砂分がやや多い。	良好	淡灰黄褐色	単純口縁。口唇部：二枚貝腹縁による押引き文(←)。口縁部外面：タテ～ナナメ(←)へのハネアゲ　C。口縁部内面：ヨコ(←)への二枚貝による条痕文。頸部外面：ヨコ(←)への二枚貝による条痕文。
	8	I AS60G ⅦH 16t 検出Ⅰ	壺	口縁	/	微細な金雲母・雲母片をやや多く含む。	良好	黄土色	単純口縁。口唇部：棒状工具側面による刻み。口縁部外面：口唇部直下に粘土帯を貼付した後、指頭による押捺。粘土帯より下方は、二枚貝による直線文(←)。
	9	I AS60B ⅦH 11a 検出Ⅱ	壺	口縁～肩	13.2	極微細な金雲母片を極めて多量に含む。	良好	淡灰褐色	単純口縁。口唇部：二枚貝腹縁による押引き文(←)。口縁部外面：二枚貝(?)によるハネアゲ文C(↑)。頸部外面：頸部以下肩部まで、ミガキ顕著。
	10	I AS60G ⅦF 15S	壺	口縁～頸	10.1	極微細な金雲母・雲母片を極めて多量に含む。砂分がやや多い。	良好	淡灰黒褐色	単純口縁。口縁部外面：口唇部直下に粘土帯を貼付した後、板状工具によるD字の刻み(←)。粘土帯より下方は、ヘラによる羽状文(①↓・←)。頸部外面：口縁部外面にひき続き、ヘラによる羽状文(②↓，③↓，④↓)。全部で4段ある羽状文の施文順序は、上段から順になっており、①→②→③→④。
	11	I AS60G ⅦG 18b サブトレ	壺	口縁	18.2	細石粒子を極多量に含む。	普通	淡灰白橙色	口縁部外面を四角く肥厚させ、肥厚部分の下端を下方へ拡張し、内側へ折り返す。口唇部：二枚貝による直線文(→)。内側口唇端は内側へ肥厚させた上で、内外側口唇端とも、丸棒状工具側面による刻み。口縁部外面：肥厚部分下端に、丸棒状工具側面による刻み。肥厚部分より下方は、二枚貝による直線文(→)。
	12	I AS60A ⅦI 10d 検出Ⅳ 下層・貝層	壺	頸～肩	/	細石粒子を極多量に含む。	含む。普通	淡黒灰色＼淡灰褐色	頸部外面：以下肩部外面にかけ、クシによる施文。文様構成は上方より、ヨコ(←)への条痕文→ハネアゲ文C(↓)→ヨコへの条痕文。土器内面に黒斑あり。
2－	1	I AS60G ⅦG 18C 検出Ⅲ	壺	口縁	/	石英細石粒子が顕著。微細な金雲母片を少量含む。	良好	淡灰白橙色	単純口縁。口唇部：中央に棒状工具側面による沈線を1本めぐらした後、内・外とも口唇端に先端の丸い棒状工具による刻み。内側口唇端を拡張・肥厚させ、三角様の突起を形成。口縁部内面：棒状工具による沈線文を、三角様の突起の下で対向するように配置。
	2	I AS60A ⅦI 12a 検出Ⅴ 基盤直上	壺	口縁～頸	20 .9	細石粒子を多く含む。	良好	淡灰黄土色	単純口縁。口唇部：以下口縁部内面を経て、頸部内面上まで全面に、クシによる刺突(→)。外側口唇端に沿ってスス付着。口唇部外面：ハケによる調整。頸部外面：ハケ調整の後、クシ描直線文(←)。頸部内面：クシ描直線文。

図版番号	実測図番号	出土地点	器種	残存部 部分名	残存部 口径	胎土	焼成	色調	形態・施文・技法
	3	Ⅰ AS60G ⅦG 16 t サブトレ	壺	口縁～頸	/	〃	普通	淡灰白色	袋状口縁。口縁部外面：断面U字状の工具による3段にわたるナナメ(①↘，②↙，③↘)への短線文。その下に同工具による刺突文。頸部外面：断面U字状の工具による沈線を1本めぐらす。沈線以下赤彩。口縁部内面：赤彩
	4	Ⅰ AS60A ⅦⅠ 10 e 検出Ⅳ 貝層	壺	口縁～体上	9.8	微細な金雲母片を含む。	良好	灰黒褐色	単純口縁。口唇部：外側口唇端に、ヘラによるD字の刻み。口縁部外面：ヘラナデ顕著。又、頸部外面にかけ、板ナデ顕著。口縁部内面：以下体部上半まで板ナデ顕著。頸部外面：ヘラによる4本の沈線(←)。頸部内面：シボリ痕あり。肩部外面：以下体部上半にかけ、ヘラによる3段の羽状文(①↗・←，②↖，③↘)。
	5	Ⅰ AS60B ⅦH 15 b サブトレ	深鉢	口縁～頸	23.1	5㎜前後の細石粒子を少量含む。	良好	黒色	単純口縁。口縁部外面：クシによるタテ(↓)への条痕文。口縁部内面：クシによる押引き文(→)。その際の指頭圧痕が口縁部外面口唇端近くに見られる。頸部外面：クシによるヨコ(→)への条痕文。全体の施文順序は下から上。
	6	Ⅰ AS60G ⅦⅠ 17 a 検出	甕	口縁～頸	18.2	細石粒子を多く含む。	普通	淡灰白色	単純口縁。口唇部：クシによる刺突文(→)。口縁部外面：クシによるタテ(↓)への条痕文。口縁部内面：クシによる不整た波状文(→)の後、内側口唇端直下に2個1単位の粘土粒貼付。頸部外面：やや幅広いクシによる流水文の後、頸部最上部に、内側粘土粒と同位置に、2個1単位の粘土粒貼付。
3－	1	Ⅰ AS60G ⅦG 18 b 検出Ⅲ	壺	肩～体上	/	細石粒子を極多量に含む。	普通	淡灰白橙色	肩部外面：以下体部上半まで二枚貝による条痕文。後、ヘラによる環状弧文。弧文内部に、二枚貝による弧文が見られるが、充填か否かは不明。
	2	Ⅰ AS60B ⅦH 17 a 検出Ⅱ	壺	頸～肩	/	2㎜前後の細石粒子を多く含む。	良好	灰橙褐色	頸部外面：頸部最下部に、ヘラによる沈線を1本めぐらす。頸部内面：以下肩部まで、板ナデ顕著。肩部外面：二枚貝による直線文(→)の後、断面U字状の工具による文様を重ねる。
	3	Ⅰ AS60B ⅦH 16 a 検出Ⅱ	壺	肩～体	/	極微細な金雲母・雲母片を含む。	良好	灰黒褐色	形態は、大地形壺に類似。肩部外面：最上部にヘラによる沈線が現状で2本、その下に、二又工具による波状文を4列置く。体部外面：体部最大径のやや上に、二又工具による直線文を施し、最大径以下に、同工具による幾何学風の文様を施す。
	4 5 6	Ⅰ AS60G ⅦG 17a 検出Ⅱ ・ 16 a 検出Ⅱ ・ 16 b 検出Ⅲ	壺	頸～肩 肩～体上 体上	/	極微細な金雲母片を多く含む。	良好	淡灰黄土色	頸部外面：以下肩部にかけて、二又工具の背面によるタテ(↓)への2本の沈線の間にヨコ(←)への沈線を充填。頸部内面：板ナデ。肩部外面：二又工具の背面によりヨコへの沈線を1本めぐらし、その下に、同工具によりタテ(↓)への短線文。肩部内面：板ナデ。体部上半外面：肩部短線文に続き、クシによる条痕の後、その上に二又工具の背面によるヨコへの沈線を1本、やや離れてヘラによるヨコへの沈線を1本施し、その間にヘラによる連弧文を置き、連弧文間を、二又工具の背面による重弧文で充填。連弧文の内側に、同工具による短線文(↙)を弧に沿って置く。やや離れて、ヘラによる二重の連弧文を施し、より内側の連弧文の上下を、二又工具の背面による短線文が取り巻く。上の短線文の施文は(↗)、下の短線文の施文は(　)。連弧文間は、重弧文で充填。連弧文より下方には、地のクシによるヨコ・タテへの条痕が見られる。体部上半内面：板ナデ。
	7 8	Ⅰ AS60A ⅦⅠ 10 t 検出Ⅴ 貝田町層も含む	壺	頸～体上	/	細石粒子を多く含む。	良好	淡灰黒褐色	頸部外面：最下部に、ヘラによるヨコ(→)への沈線を現状で一本めぐらし、その直下に、ヘラによる平坦な刺突文(→)。体部上半外面：管状工具による刺突文(→)の後、その直下に、ヘラによるヨコ(→)への短線文、3本のヨコ(←)への沈線の順で置く。体部上半内面：板ナデ。
	9	Ⅰ AS60F ⅦG 17 f 検出Ⅱ	壺	頸～体上	(頸) 14.1	5㎜前後の石英細石粒子、極微細な金雲母・雲母片を多く含む。	良好	淡赤褐色	頸部外面：二枚貝による直線文(←)の後、肩部外面文様帯との区画として、ヘラによるヨコへの沈線を1本めぐらし、その後、ヘラによるタテ(↓)への直線交。頸部内面：以下内両に板ナデナデ顕著底部部外面：ヘラによるタテへの直線文の後、ヘラによるヨコへの直線文を充填。体部上半外面：頸部外面に同じ。但し、沈線は現状では見られない。全体の施文順序は、頸部・体部上半外面文様帯→肩部外面文様帯。
	10 11	Ⅰ AS60B ⅦH 11C 検出Ⅱ	壺	肩～体上	/	極微細な金雲母片を含む。	良好	/	肩部外面：断面U字状工具によりヨコへの沈線を一本めぐらす。体部上半外面：同工具により、山形曲線文を二重に施す。沈線部分を除き、肩部外面以下全面を赤彩。
	12	Ⅰ AS60F ⅦG 17 d 検出Ⅱ	壺	頸～体上	(頸) 5.3	微細な雲母・金雲母片を含む。		灰黒色	頸部外面：地に、クシによる条痕が肩部まで見られる。その後、ナデ調整し、断面U字状工具によるヨコ(←)への沈線を肩部にかけて4本めぐらし、続いて、断面平坦な工具によりヨコ(→)への沈線を1本めぐらす。頸部内面：以下肩部にかけ、体部上半内面と異なり、粘土乾燥が十分でなかったと思われる。体部上半外面：断面平坦な工具によりタテ(↓)への直線文を4本施した後、直線文間を、断面U字状工具によりヨコ(→)への直線文を充填。

図版番号	実測図番号	出土地点	器種	残存部 部分名	残存部 口径	胎土	焼成	色調	形態・施文・技法
	13	I AS60F Ⅶ G 15・16 d 検出Ⅱ・検出Ⅲ	壺	頸～体上	/	細石粒子を多く含む。	良好	淡灰橙褐色	頸部外面：以下肩部にかかる辺りまで、二又工具による直線文(←)。肩部外面：以下体部にかけて、同工具による鋸歯文(↓・→)。本部上半外面：鋸歯文の後、再び、同工具による直線文(←)。全体の施文順序は、直線文→鋸歯文。
4－	1	I AS60G Ⅶ G 16 b 検出Ⅲ	壺	体上	/	〃	良好	淡灰黄土色	外面：ナデ調整の後、ヘラによるヨコB字型の文様を施し、内外に二枚貝背面圧痕を充填。内面：板ナデ。内外面とも、黒斑が見られる。
	2 3	I AS60G Ⅶ G 15・16 a 検出Ⅲ	壺	肩～胴上	/	〃	良好	淡灰黄土色	肩部外面：最上部に、断面U字状工具により現状で沈線を1本めぐらす。その下に、同工具によりコの字型に区画した中をタテ(↓)への直線文で充填した文様を置き、その文様の外を二枚貝背面圧痕で満たす。肩部内面：体部上半と異なり、粘土乾燥が十分でなかったと思われる。体部上半外面：肩部コの字型文様に連結させ、同心円状の文様を同工具により施し、文様以外は、肩部と同様、二枚貝背面圧痕。全体の施文順序は、沈線・同心円状文→コの字型とその内側の充填→二枚貝背面圧痕。
	4	I AS60B Ⅶ H 15 b サブトレ	壺	頸～体上	/	〃	良好	灰黒褐色	頸部外面：ナデ調整の後、二枚貝腹縁による刺突文。その下に、クシ描直線文を置き、その上下をヘラによるヨコへの沈線で区画。肩部外面：以下体部上半にかけ、ヘラによるヨコへの沈線を2本めぐらし、その間を同工具による鋸歯文(↑・→)で充填。外面に黒斑あり。
	5	I AS60A Ⅶ I 11 c 検出Ⅳ 貝層Ⅳ	壺	頸～体上	/	5㎜前後の細石粒子を多量に含む。	良好	灰黒色	頸部外面：3本歯のクシによる直線文を肩部にかけて、3段施す。肩部外面：同工具によりクシ描直線文間を波線文で充填。体部上半外面：最大径付近に、もう1段クシ描直線文を置き、3段目のものとの間に、ヘラによる重方形文を充填。最大径部分に、クシによる条痕(?)が見られる。波線文は、(→) に施文。
	6	I AS 60B Ⅶ H 15 a 検出Ⅱ	壺	頸～体上	/	細石粒子を多く含む。極微細な金雲母片を多く含む。	普通	灰黒色	頸部外面：ナデ調整の後、クシ描直線文を施し、クシ描縦直線文を置く。その後、クシ描文の上下を断面U字状工具による沈線で区画。肩部外面：以下体部上半にかけ、肩部と同様に施文。但し、沈線区画は、上側の1本のみで、さらに、クシ描弧線文が加えられている。クシ描文様帯以下の地は、クシによる条痕。クシ描直線文は、(←)、クシ描縦線文は、(↓)、沈線は、(←)に施す。

(安部かえで作成)

参考文献・引用文献

愛知県教育委員会『環状2号線関係　朝日遺跡群第一次調査報告書』1975。

愛知県教育委員会『朝日遺跡』1982。

石黒立人　『阿弥陀寺遺跡出土の中期弥生土器について－2』『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ－昭和59年度－』財団法人愛知県教育サービスセンター　1985。

石黒立人　「勝川遺跡出土の弥生土器について」『勝川』財団法人愛知県教育サービスセンター　1984。

石黒立人　「伊勢湾周辺の中期弥生土器に関する覚書'86」『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器　1986、11、29　30』群馬県考古学談話会他。

大渕遺跡Ⅲ期に見る平安時代の土器

池　本　正　明

大渕遺跡は、海部郡甚目寺町に所在する集落遺跡で、昭和58年より、名古屋環状２号線（国道302号線）建設に伴なう事前調査として、昭和58年度より60年度まで発掘調査された他、昭和61年度には、福田川河川改修工事に伴なう発掘調査が行なわれた。(1)

1

今回注目する大渕Ⅲ期は、平安時代を中心とする時期で、前段階（大渕Ⅱ）の集落構成を整地という形で否定した後に、掘立柱建物31棟、井戸15基、土坑多数が検出されている。

検出された建物は、全て掘立柱によるものだが、規模はさほど大きなものではない。しかし、井戸等の規模には見るべきものがあり、付近に６世紀創建の甚目寺が存在する点から、これに関連付けて考える必要も存在している。出土遺物は豊富とは言い難いが、その継続年代が従来空白とも言えた時期にあたり、注目すべきものがある。

本稿は、大渕遺跡Ⅲ期に属する土器変遷のアウトラインと、ここから派生する若干の問題を考察することにより、不明確な点が多い、当地における平安時代の土器変遷を考える。

2

大渕遺跡内の良好と思われる一括資料の内容を比較すると、以下の３群に大別できる。

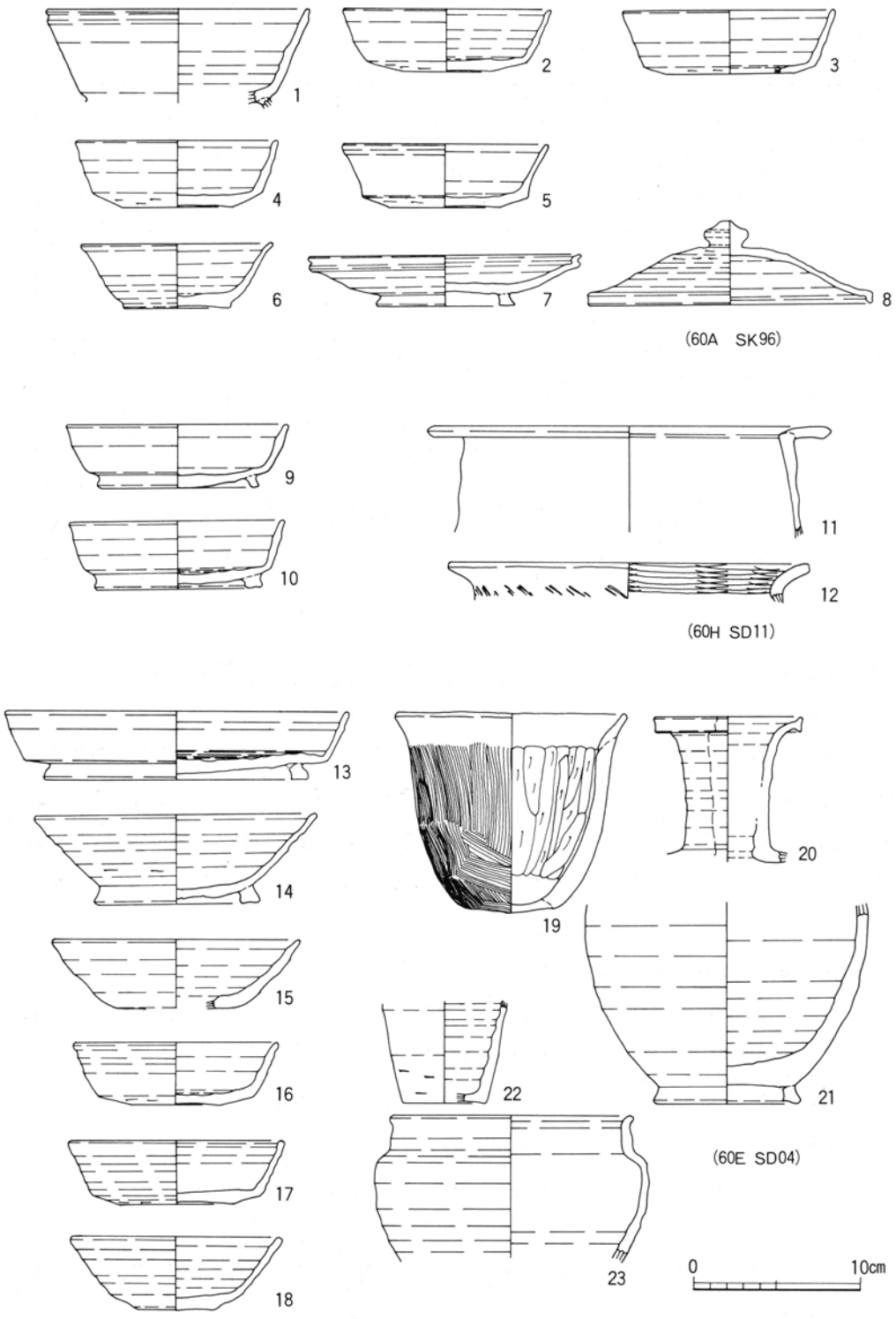
１群

１群は、60ASK96(2)出土資料を代表（第１図１～８）とするもので、供膳形態の主体が須恵器で占められている。得られた資料は、腰部で稜を持って立ち上がる有蓋杯（以下、須恵器杯Ａ類と仮称）が主体を占め（１～５）、底部より丸味を持ちながら口縁部に至る無蓋杯（以下、須恵器杯Ｂ群と仮称）が、これに加わる(6)状況である。

なお、類似する様相を持った遺溝出土資料として、60H SD11・60E SD04がある。

２群

２群は、60G SE01(3) 出土資料を代表（第２図１～４）とするもので、他に60D SE 01・60B_2SE01出土資料に類例がある。得られた資料は、供膳形態が須恵器と 古代灰釉陶器の組み合わせで構成されている。資料が量的に乏しいため、詳細は不明であるが、須恵器は杯Ａがほとんど見られず、杯Ｂが主体となっている（５～７・９・10）。 古代灰釉陶器には椀（１・７）・皿（２・11)がある。いずれも、丁寧な作りの断面が角形ないし三ヶ月形を呈する高台を有し、施釉技法はハケ塗りである。２群の、須恵器杯Ｂ類・古代灰釉陶



第1図 大渕遺跡出土遺物①（1群）

番　号	器　　種	口　径	底　径	器　高	番　号	器　　種	口　径	底　径	器　高
図1－1	須恵器　杯	15.6	－	(5.6)	図1－13	須恵器　杯	20.2	15.7	4.0
2	〃　〃	12.4	5.3	3.7	14	〃　〃	16.7	9.5	5.3
3	〃　〃	11.6	7.7	3.7	15	〃　〃	14.4	6.8	4.1
4	〃　〃	11.9	6.6	3.9	16	〃　〃	12.0	5.2	3.7
5	〃　〃	12.1	6.7	3.8	17	〃　〃	11.4	6.6	3.8
6	〃　〃	11.4	6.2	3.8	18	〃　〃	11.2	4.4	4.4
7	〃　盤	16.2	8.2	3.0	19	土師器　甕	13.4	4.9	12.0
8	〃　蓋	17.0	－	2.7	20	灰釉陶器 長頸瓶	8.9	－	(8.5)
9	〃　杯	13.0	9.0	3.8	21	〃　〃	－	8.5	(11.8)
10	〃　〃	12.3	9.7	4.1	22	須恵器　細頸壺	－	4.9	(6.1)
11	土師器　甕	23.2	－	(6.7)	23	〃　壺	14.2	－	(13.7)
12	〃　〃	22.3	－	(2.3)					

器など無蓋の器種がその主体を占める状況は、1群との大きな相異であろう。

3群

3群は、60E SE03[4]出土資料を代表(第3図1～5)とするもので、供膳形態の主体が、施釉技法ツケガケの古代灰釉陶器ないし、初期山茶椀[5]で占められ、これに若干の、土師器が加わる構成である。得られた資料は、古代灰釉陶器椀(1～3)・皿(4)・土師器椀(5)がある。こうした3群に見ることができる土師器は、全体数量がわずかなのに対し、椀・足高高台杯(12～14)・皿(15)と器種が多いことを指摘できる。

なお、類似する様相を持った遺構出土資料として、60E SE01がある。

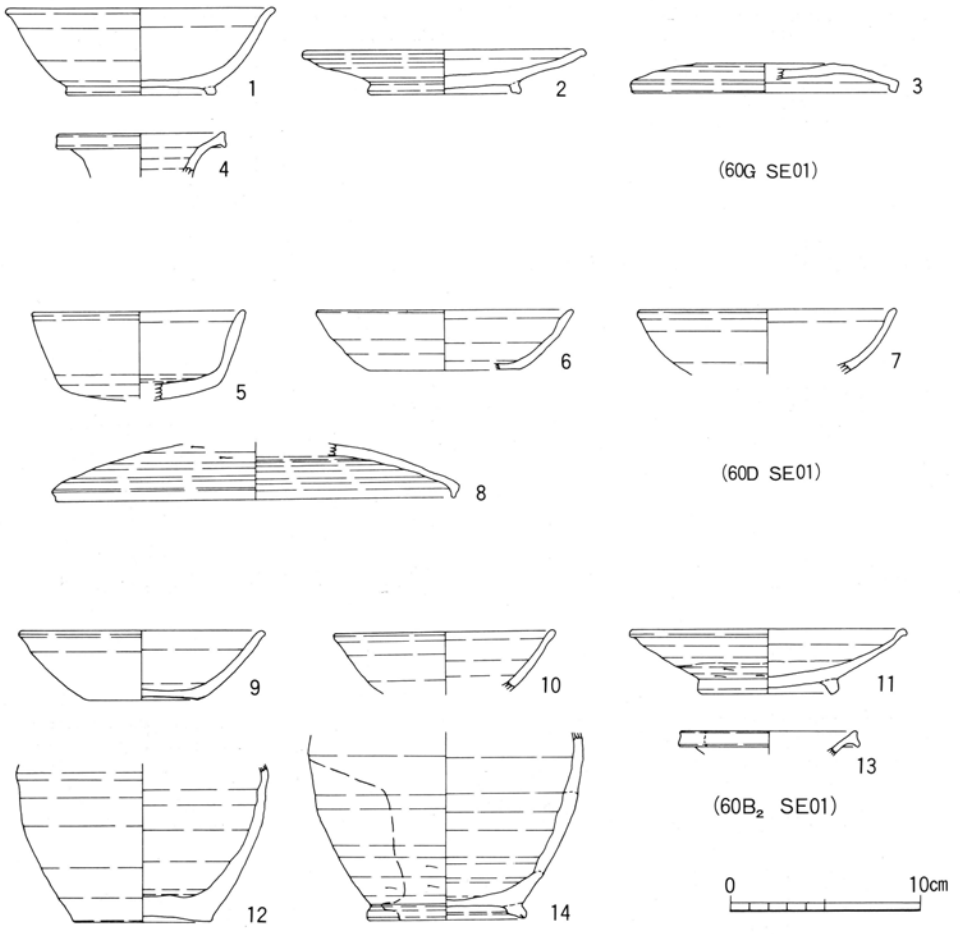
以上が、大渕Ⅲ期における一括資料の分類である。次に、これを大渕遺跡内における遺構の切り合い関係による、層位学的な見地から見ると、

1．60E区において、1群の内容を持つSD04と、3群の内容を持つSE01が切り合い、SDが古い。

2．60H区において、2群の内容を持つSEと、3群の内容を持つSKが切り合い、SEが古い。

3．60A_2区において、1群の内容を持つSKと、2群の内容を持つSKが切り合い、1群が古い。

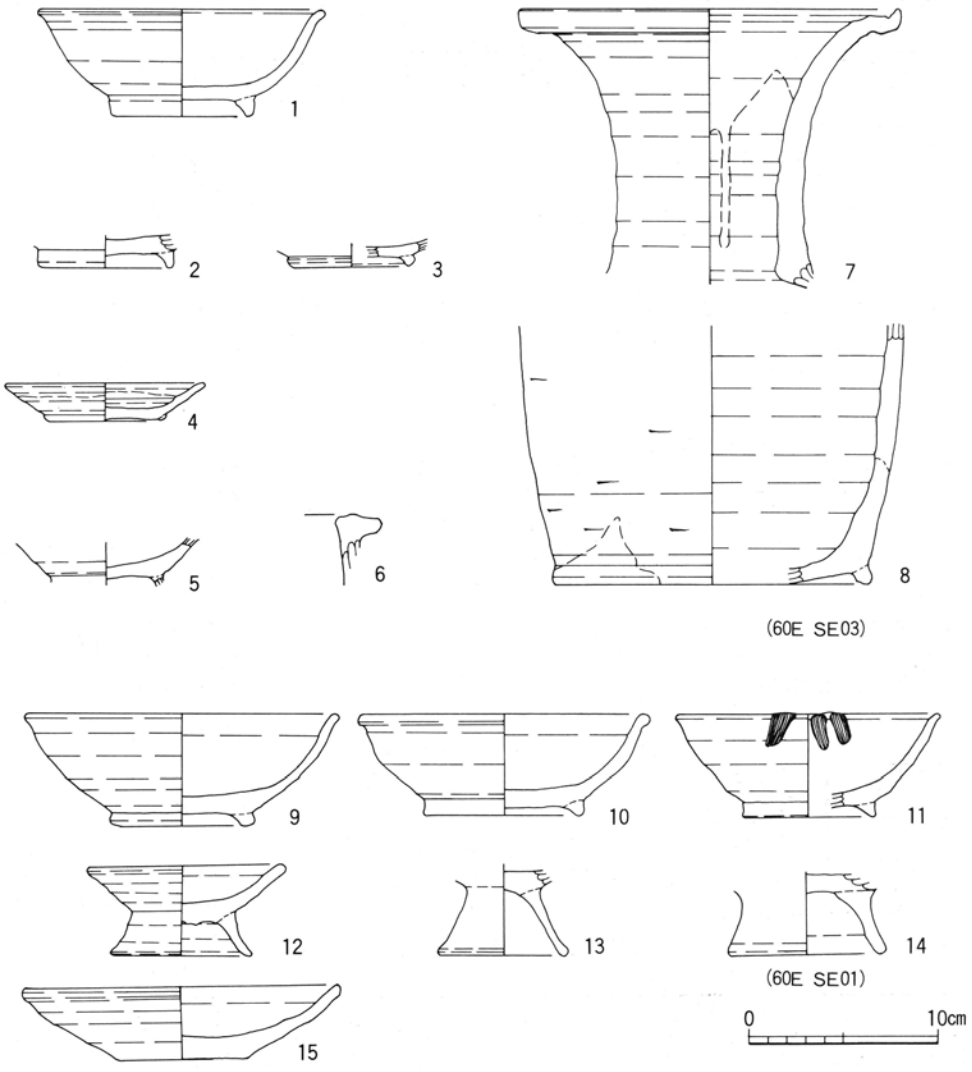
となり、1群→2群→3群と、時間的な前後関係を有している可能性が見られる。



第2図　大渕遺跡出土遺物②（2群）

番　号	器　種	口　径	底　径	器　高	番　号	器　種	口　径	底　径	器　高
図2－1	灰釉陶器　椀	14.0	7.8	4.5	図2－8	須恵器　蓋	21.0	－	(2.9)
2	〃　皿	14.6	7.9	2.3	9	〃　坏	12.7	5.6	3.6
3	須恵器　蓋	13.9	－	1.5	10	〃　〃	11.6	－	(3.2)
4	灰釉陶器　長頸瓶	8.7	－	(2.3)	11	灰釉陶器　皿	14.2	6.9	3.4
5	須恵器　坏	11.0	5.7	4.7	12	須恵器　長頸瓶	－	7.1	(8.2)
6	〃　〃	13.4	7.9	3.1	13	灰釉陶器　長頸瓶	9.2	－	(1.2)
7	灰釉陶器　椀	8.5	－	(3.4)	14	〃　〃	－	8.2	(9.7)

次に、これを検証するため、大渕遺跡内で検出されている掘立柱建物の状況と比較する。Ⅲ期の掘立柱建物は総計36棟ある。これらは、方位による規制をある程度受けており、主軸が真北より東へ30度（B類）、15度（C類）、10度（D類）と、3つに分類できる状況である。



第3図　大渕遺跡出土遺物③（3群）

番　号	器　種	口　径	底　径	器　高	番　号	器　種	口　径	底　径	器　高
図3－1	灰釉陶器　椀	14.9	6.9	5.6	図3－9	山茶碗　碗	16.1	6.4	5.9
2	〃　〃	－	6.7	（1.7）	10	灰釉陶器　椀	10.4	5.8	3.8
3	〃　〃	－	6.1	（1.3）	11	〃　〃	13.6	6.9	5.4
4	〃　段　皿	10.4	6.0	2.0	12	土師器　坏	10.2	7.2	4.7
5	土師器　椀	－	－	－	13	〃　〃	－	6.6	（4.4）
6	〃　甕	－	－	－	14	〃　〃	－	8.0	（4.3）
7	灰釉陶器　広口瓶	20.0	－	（14.5）	15	〃　皿	16.3	6.5	3.8
8	〃　〃	－	16.6	（13.5）					

これを、同一方向のものが、同一時期と仮定した場合、60H区と60F区などにおいて見られる掘立柱掘方の切り合いから、B類→C類→D類と変化がたどれることが明らかにできる。こうした変遷に、遺構の分布状況などから考えられる土器の動きを重ね合わせると、B類が1群、C類が2群、D類が3群となり、前述した遺構の切り合い関係から見た1群～3群の前後関係とよく一致する。

また、これら三群の土器様相は、例えば、図1－6と図2－6、図1－11と図3－6、図2－2・11と図3－4などに見ることができるように、型式学的に見ても、1群～3群へと技術的な年代差を有している。

従って、1群～3群の様相差を、年代による差として理解する[6]（以下、1群から順に、1期～3期と倹称し、Ⅲ－1～3と記述する。）

以上、大渕Ⅲ期の土器様相を見て来たわけだが、これらをまとめると、以下のようになろう。まず、供膳形態は、須恵器を主体とする段階（Ⅲ－1）から、古代灰釉がこれに加わる段階（Ⅲ－2）を経て、須恵器はほぼ姿を消し、代わって土師器が加わる段階（Ⅲ－3）へと変化していることが考えられる。

煮沸形態については、断片的な資料しか得られず、不明確な点が多いが、土師器甕を主体としていると思われる。ただし、甕は、Ⅲ－3期で見られる、いわゆる清郷型甕[7]を終末とし、この段階を前後して、伊勢型[8]と呼ばれる鍋に変化しているようである。

3

以上が、大渕Ⅲ期に見る平安時代の土器様相である。こうした変化は、現段階で他遺跡との比較資料に乏しいため、検証は十分にはできないが、断片的に見られる一括資料[9]と大枠での一致を見ることができ、これを一応、当地における平安時代の土器使用形態のモデルとして理解しておく。今後、同時代の資料増加を待って、遺跡内レベルから、さらに広域を見通したものを作り上げて行かなくてはならない。また、それぞれの段階は、大区

表1　猿投窯地区別古窯跡数

時　期	地区								備　考
	東山	岩崎	鳴海	有松	折戸	黒笹	井ヶ谷	瀬戸	
Ⅲ－1並行	0	6	16	3	13	24	5	0	
Ⅲ－2並行	2	20	24	6	20	43	16	0	
Ⅲ－3並行	12	0	4	5	2	3	4	12	古代灰釉陶器窯
Ⅲ－3並行	89	1	14	8	3	11	4	65	初期山茶椀窯
Ⅳ－1並行	0	32	37	50	17	56	16	158	

分として存在させたもので、さらに細分する必要を有してはいるが、現状では資料的な制約が大きく、今後の課題としておく。

この中で、今回特に注目したいのは、Ⅲ－3期に見られた土師器の存在である。従来こうした一群は、須恵器・古代灰釉陶器の有数生産地である当地域において、あまり存在がきわだったものではなかった。以下、こうした土師器について窯業生産の面から、若干の私見を述べたい。

周知のように当地域では、平安時代も終末になると、古代灰釉陶器は小器種大量生産の方向に、初期山茶椀へと変化をとげる。その動きは、スムーズなものではなく、現在知られている窯類が、この段階で減少を経て、集約増大することから見ても（表－1）[10]、大きな断絶が存在したことはまちがいはあるまい。しかし、それぞれの製品は型式学的な連続性[11]を持って展開することから、古代灰釉陶器と初期山茶椀の製作者には、大きな隔たりがあったとは考えられない。

こうした不安定な動きの中で、大渕Ⅲ－3期に見られる土師器は、窯数減少に伴なう『汁器の補完現象[12]』的に登場している。しかもこれは大渕遺跡のみに見られる特殊な状況でなく、新城市馬場遺跡1号・2号住居址[13]・稲沢市尾張国府遺跡SK131[14]・清洲町朝日西遺跡SK238・SK13[15]など並行すると思われる当地域の遺構資料にも見ることができる。しかも、それらが一部については確実に古代灰釉陶器製作者によって製作されている[16]ことは興味深いものがある。つまり、こうした状況には、古代灰釉陶器が需要に応じた形で初期山茶椀に転換するという内在された要因によるものではなく、外圧的な再編成によるものであった可能性が考えられるのである。従って、この動きの背景には、古代灰釉陶器製作者が、律令体制の影響力を完全に脱却した事実が必要であろう。

なお、この再編成が成されたと考えられる段階を時間的にあまりへだてることなく大渕Ⅲ期は終焉を迎え、その後、Ⅲ期遺構を否定する形で、全域に方格地割りが設定されている[17]（大渕Ⅵ－1期）ことは、上記の事項と同一レベルの動きとして理解し得るのではなかろうか。当地域の古代から中世への移行期を考える上で、極めて重要な事実とも理解することができると思われる。

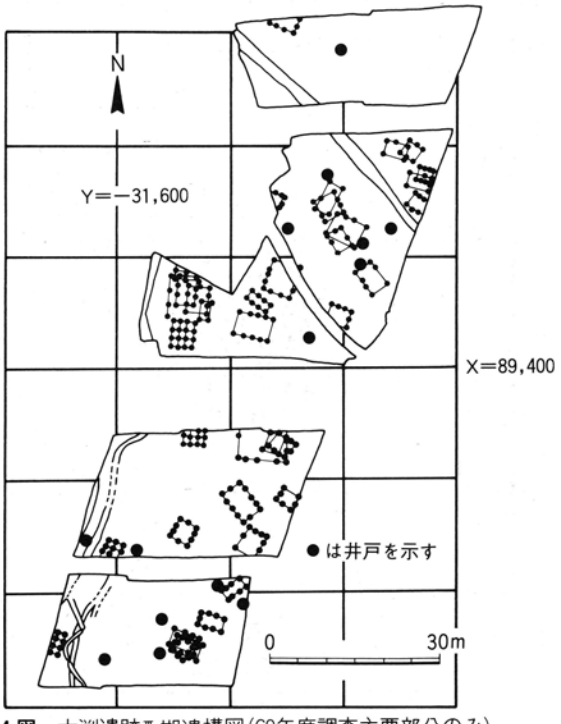
本稿を結ぶにあたり、御教示頂いた宮腰健司氏、図版作製に御協力頂いた河合明美氏に記して謝意を表します。

〔注〕

(1) 愛知県埋蔵文化財センター『年報』1986、及び本年報。

(2) 60A_1SK96は単一埋土を持つ土壙で、機能は限定できないが、埋土が単一であることから、一括（ないしはごく短期間）埋滅していることが考えられる。掲載資料は、埋土中より出土したものである。

(3) 60G SE01は、曲物を折敷上に乗せたやや特殊な内部構造を有する井戸である。掲載資料は、残存する最上段の曲物内より得られた、井戸廃絶儀礼に伴ない一括投棄されたものである。
(4) 60E SE01は内部施設を持たない（もしくは、完全に抜き取られた）井戸である。掲載資料は、埋土中より出土したものである。
(5) ここでは、生産地において、大椀、小椀のセットで焼成されている段階と同一型式の山茶椀を指す。（名古屋市教育委員会『御影町古窯跡群発掘調査報告』1974　11頁）
(6) 西弘海「土器様式の変化とその背景」『小林行雄博士古稀記念論文集　考古学論考』1975
(7) 一宮市教育委員会「清郷遺跡」『新編一宮市史資料編４』1974
(8) 新田洋「平安時代～中世における煮炊用具 —「伊勢型」鍋 — に関する若干の覚書」『三重考古学研究１』1985
(9) 斎藤孝正「灰釉陶器の研究Ⅰ」『名古屋大学文学部研究論集XCV　史学32』1986
(10) （楢崎彰一「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ』1983）に付載されている猿投窯地区別・時期別古窯数表をベースに、山茶椀窯数を加え、大渕遺跡Ⅲ期編年に型式学的に並行な窯式を書き替えた。なお、並行な窯式とは、Ⅲ－１が０－10・IG－78、Ⅲ－２がK－14・K－90、Ⅲ－３が０－53～百代寺である。
(11) 藤澤良祐「瀬戸古窯跡群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅰ』1982
(12) 服部敬史「関東甲信地域による古代末期の土器様相」『神奈川考古21号』1986、なお、供膳形態を考える時、木製品の存在も想定する必要があるが、大渕Ⅲ期では現状で確認されていないことから、一応考慮しないでおく。こうした推論は、例えば60G SE01に見られる曲物のような薄い木質すら良好な状態で残存する例も認められることから、特に無謀なものではないと考える。
(13) 愛知県教育委員会「馬場遺跡」『豊川用水路関係埋蔵文化財調査報告』1967
(14) 稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅴ』1983
(15) 佐藤公保「中世土師器研究ノート(1)」『愛知県埋蔵文化財センター年報』1986
(16) (9)39頁
(17) 池本正明「大渕遺跡に見る中世集落の一形態」『愛知県埋蔵文化財センター年報』1986



第４図　大渕遺跡Ⅲ期遺構図(60年度調査主要部分のみ)

清洲城下町遺跡出土の木製挽物漆器について

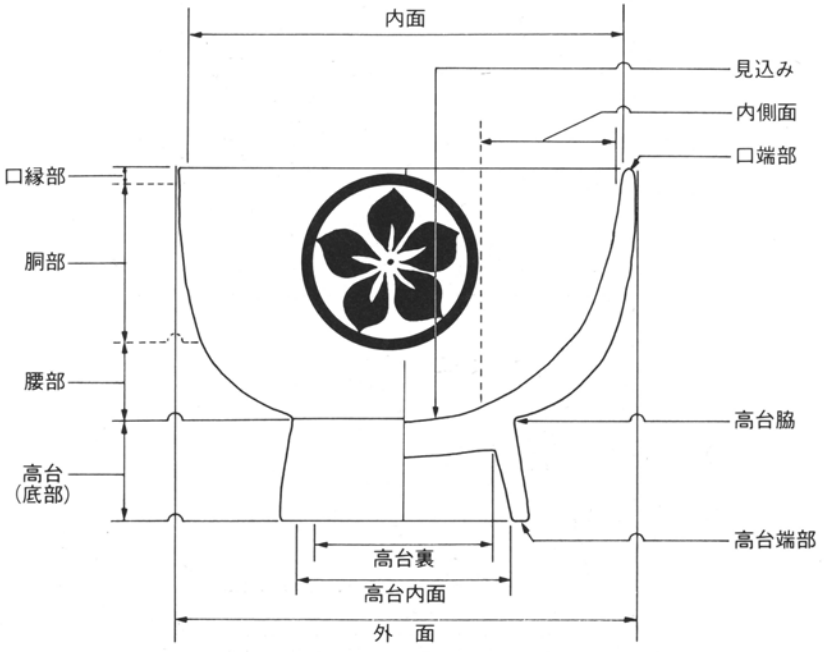
— 漆器椀を中心として —

梅 村 清 春

1．はじめに

16世紀から17世紀初頭にかけて尾張統治の中心拠点であった清洲城下町は、五条川とその自然堤防を巧みに利用して形成された低地の遺跡であるため数多くの木製品が出土している。その中でも、木製挽物漆器椀は単一製品として破片も含めると300点余りを数える。

従来、木製品は材質上、遺跡条件により出土する機会が限定されてしまう、また時代による形態変化が極めて少ない(1)などの理由からか十分な研究がなされなかったのが実状である。漆器研究に至っては、伝世品に見られるような蒔絵や螺鈿細工を施した高級品を中心に行われ、本稿で扱うような簡素な漆絵椀、皿は中世の絵巻物などに描かれながら、伝世品がない、出土例が少ないなどの理由からあまり注目されなかった。しかし、最近では中・近世の遺跡が調査される機会が増大したことによりその出土例が全国的に報告され、資料の増加と共に漆器研究の再検討が必要となってきている(2)。研究の進んでいる陶磁器に比べその比重は極端に小さく大きな影響を与えるには至らないが、当時の飲食器の中に、木製挽物器を加え検討してゆく時期に来ているのではないだろうか。



第1図 漆器椀部分名称(3)

本稿では、中世末から近世初頭に限定される清洲城下町遺跡出土の、轆轤を使用し製作したいわゆる木製挽物漆器を中心に紹介し検討を試みたい。漆器を出土した遺構は城下町期のものであり大きく２期に分けられる。１期の開始は、尾張守護所が清洲に移転された文明10年（1478）を考え、２期への移行は、織田信雄が清洲城の大改修をしたとする天正14年（1586）前後と考えられ、２期の終末を慶長15年（1610）の「清須越」に求めている。(4)

２．漆器の器種及び器形

漆器の主なものは、椀、蓋、杯、皿として使用されたと考えられる飲食器である。しかし、それらの多くは、脆弱で破片や漆膜だけを残すものであり、変形が著しく、口縁部、高台の欠損したものがほとんどである。ほぼ全体の器形を復原できるものは30点余りに過ぎない。さらに、個々の出土遺物がどの器種に該当するのか判断に苦しむ場合も多く、椀としたものの中に蓋、皿として使用されたものが含まれる場合もあることをお断りしておきたい。

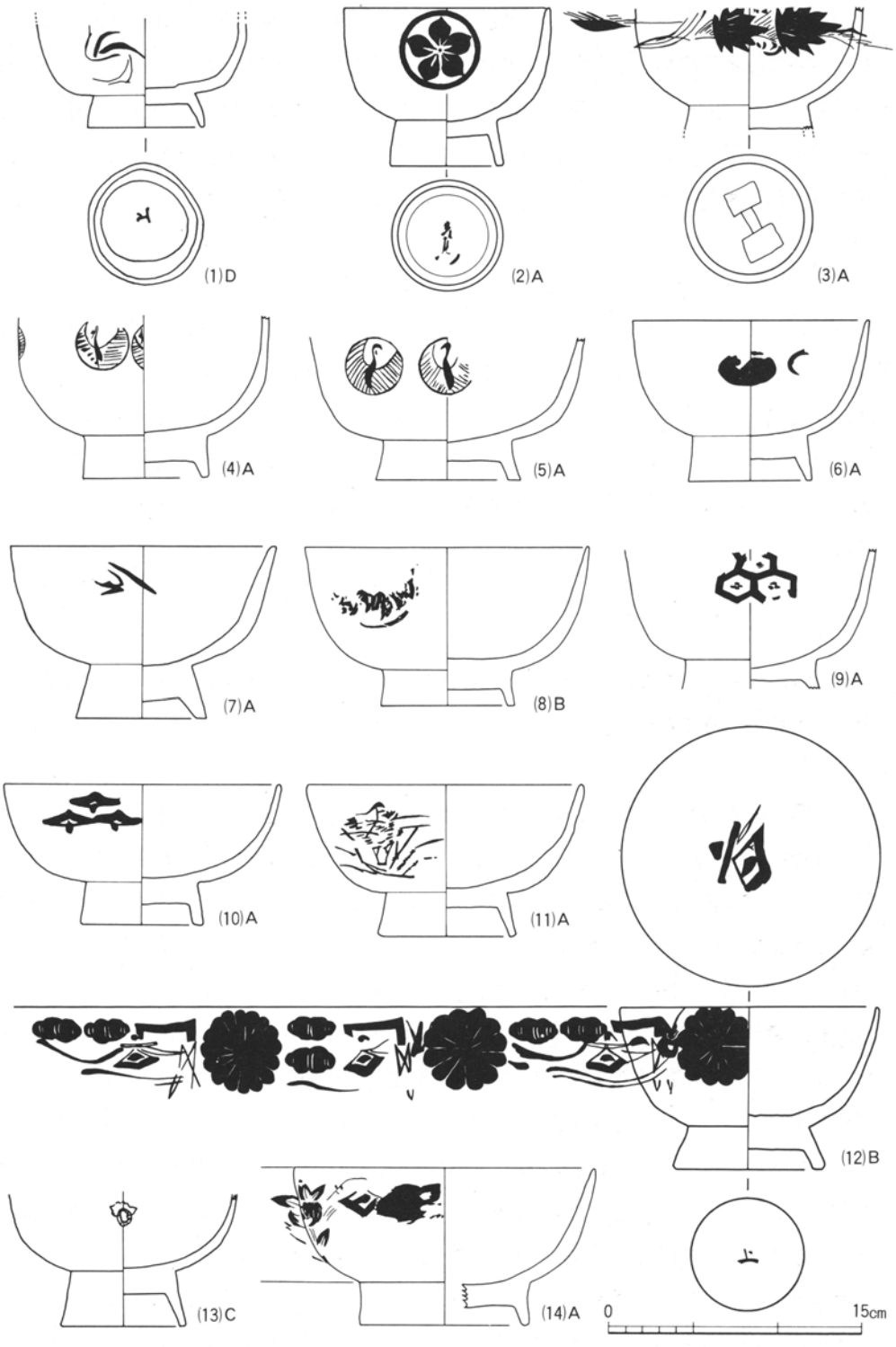
椀

出土漆器の90％以上の器種が椀と考えられるものであり、それぞれの器形的な特徴から大きく４類型に分けられる。

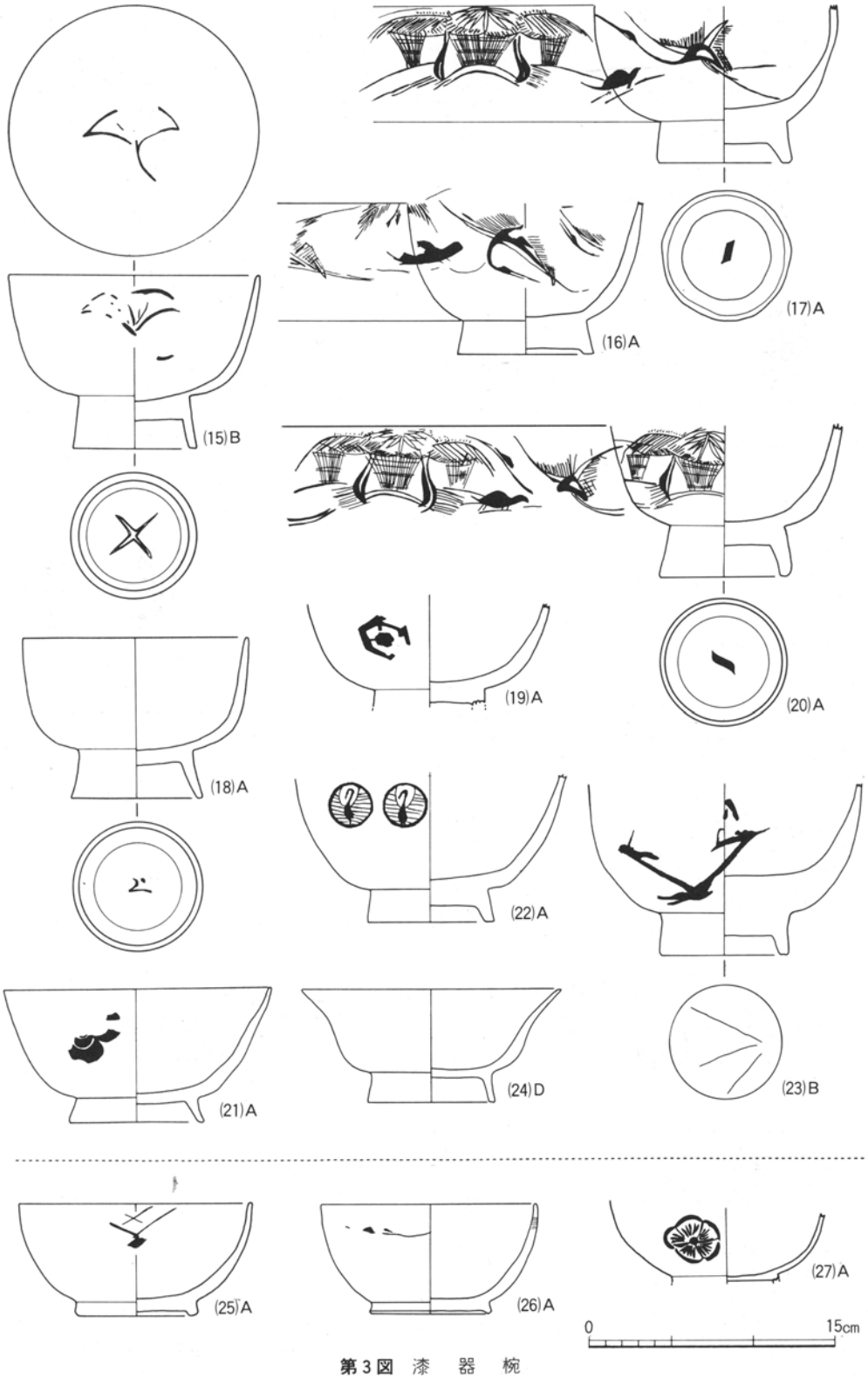
Ⅰ類（第２図(1)～(14)、第３図(15)～(24)）

全体的に高台を高くつくり出し、２cm以上の高さを持ち、器高も高く総体的に大ぶりでどっしりした形態の椀である。さらに器形からみると高台脇から腰部はゆるやかなカーブを描き湾曲しながら胴部は比較的垂直に立ち上がるタイプのものをⅠ－１類（第２図(1)～(6)(9)(13)、第３図(15)～(18)(20)(23)）とし、高台脇から腰部はゆるく屈曲しながら胴部はやや外方へ開き口縁が開き気味に立ち上がるタイプのものをⅠ－２類（第２図(7)(8)(10)～(12)(14)、第３図(19)(21)(22)）、特殊な器形ではあるが、腰部から胴部は内湾気味に立ち上がり胴部上方から口縁部にかけて外反するいわゆる端反りタイプのものをⅠ－３類（第３図(24)）と３タイプに細分することができる。Ⅰ－１類は、高口比率（器高÷口径）(5)が0.65内外となり深い椀形を呈するのが特徴である。また、内外面鉋挽きの深さにより、ａ：内面鉋挽きは高台脇近くまで挽かれ、高台内面は高台脇より浅く挽かれているが極端でないもの　ｂ：内面、高台内面共に極めて挽きが浅く、厚く堅牢なもの（第３図(23)）に分類される。

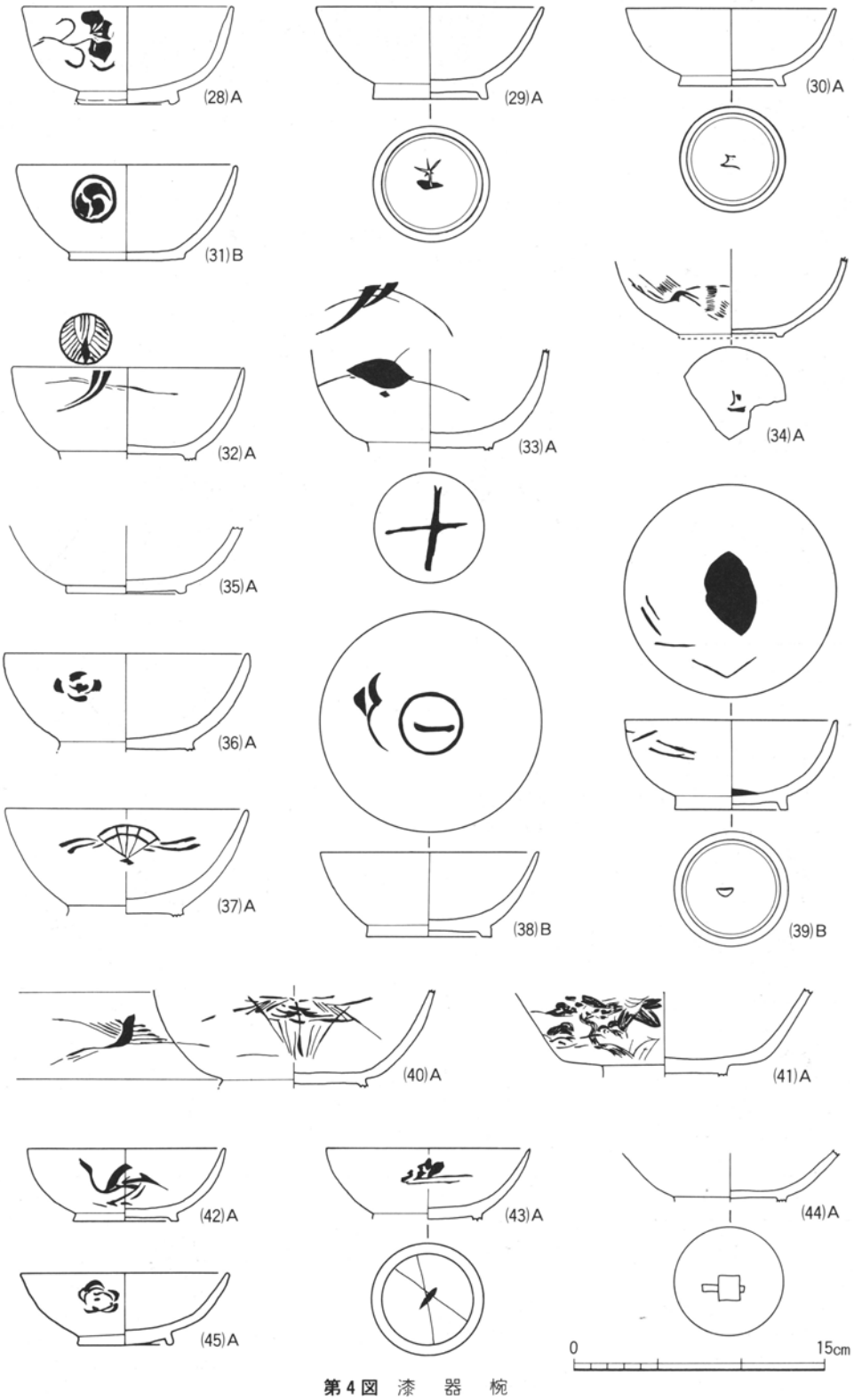
Ⅰ－２類は、胴部が外方へ開くため器高が比較的低くなり高口比率も0.5～0.6程度を示す。また内外面挽き込みの深さにより、ａ：１－ａ類に同じ　ｂ：内外面ともに高台脇近



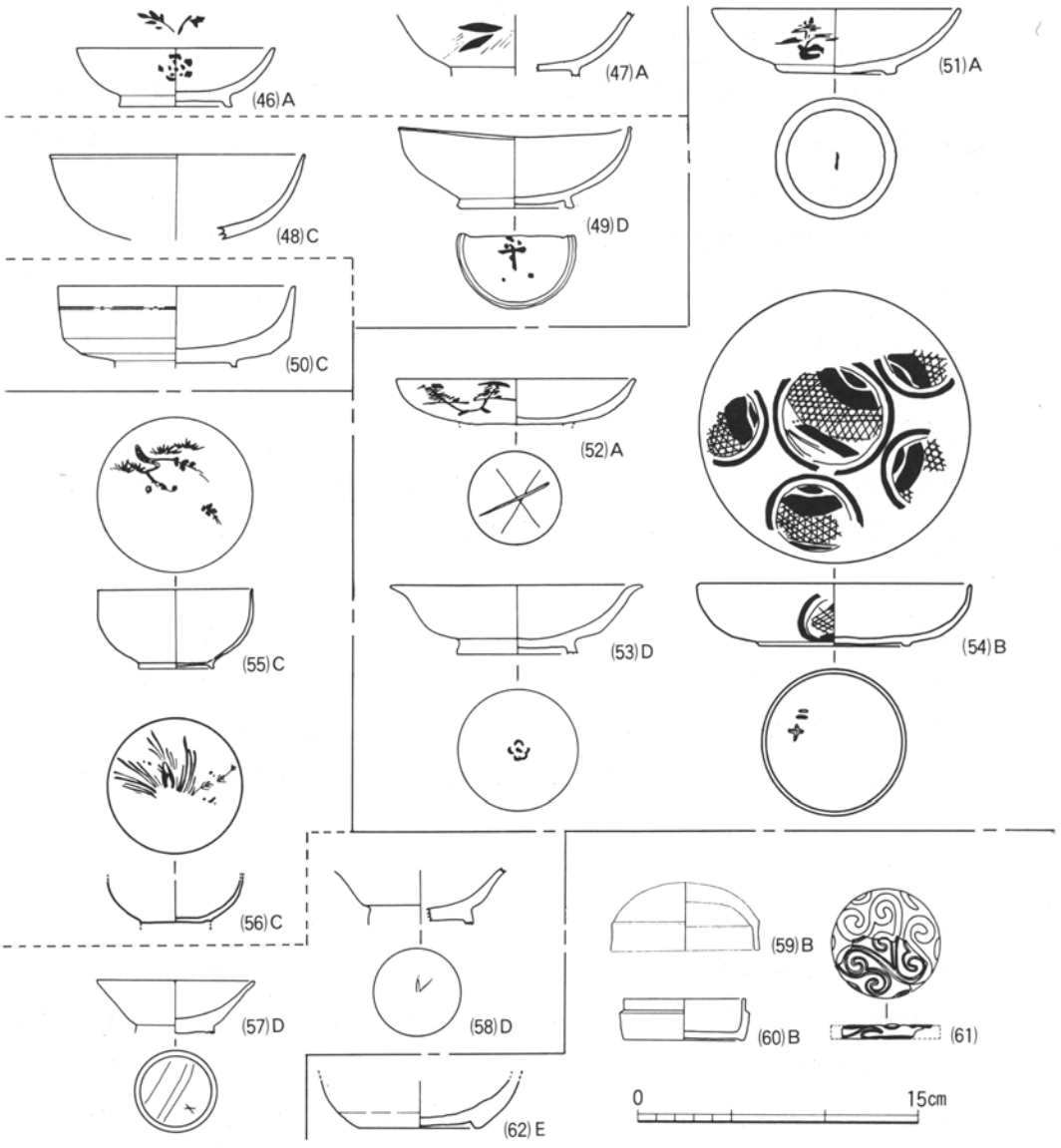
第2図 漆　器　椀



第3図 漆　器　椀


(28)A
(29)A
(30)A
(31)B
(32)A
(33)A
(34)A
(35)A
(36)A
(37)A
(38)B
(39)B
(40)A
(41)A
(42)A
(43)A
(44)A
(45)A
0
15cm

第4図 漆　器　椀



第5図 漆　器　類

くまで挽き込まれ、底の厚さも胴部の厚さとほぼ同じになるもの（第3図(21)）に分類される。2－b類は、高台も極端に高くなく、2cm以下である。

Ⅰ－3類の高口比率は0.43である。

Ⅱ類（第3図(25)～第5図(47)）

高台が1cm以下と低く、高口比率は0.3～0.49を示すものである。すなわち口径に対して器高が比較的低い椀形の形態を呈するものである。器厚は、全体的に均一の厚さで挽か

れている。器形的な特徴により２つに分類される。

高台脇からなだらかな曲線を描き腰部でゆるく屈曲して内湾気味に立ち上がる１類（第３図(25)～(27)）、胴部がやや外反しながら立ち上がり口縁が開き気味の２類（第４図(29)(38)(40)～第5図(47)）がある。Ⅱ－1類は、ほとんどが高口比率0.4台を示す。Ⅱ－2類の中には、高台脇から腰部が水平に開き、胴部はほぼ直線的に外反し立ち上がるもの（第４図(41)）と、口径10cm～12cm程で高口比率が0.3～0.39を示す浅い椀形を呈するもの（第4図(42)(43)(45)第５図(46)）も見られる。後者は、その器形より、蓋、皿として使用された可能性も強い。

Ⅲ類（第５図(48)(49)）

高台が低く、浅い椀形を呈し、口縁部に稜線を持つものである。他のものに比較して器壁が薄く丁寧なつくりである。(49)は高口比率0.35を示し、蓋としての可能性も高い。

Ⅳ類（第５図(50)）

１点のみの出土である。腰部に２条の明瞭な稜線を持ち、胴部は口縁部までほぼ直立しその間に、１条の隆起帯を巡らせるものである。隆起帯は、木地の隆起ではなく漆の際に盛り上げたものである。口径に比較して器高が低く、安定した感じを与える。形態から推察すればいわゆる平皿となろう(6)。

皿（第５図(51)～(54)）

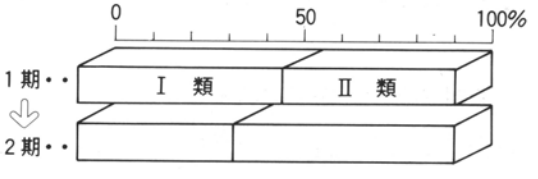
口径に比較して、極端に器高が低く、高口比率が0.2台を示すもの4点を皿として取り上げた。点数が少なく分類までに至らないが、高台脇からゆるく湾曲し胴部はやや外方に開きながら立ち上がるもの(51)、(52)、口縁部が強く外反するいわゆる端反形を呈するもの(53)、腰部でゆるやかに屈曲し、胴部は直立気味に立ち上がるもの(54)が見られる。明らかに皿と思われる(54)の他は、蓋としての機能を有するものかもしれない。

杯（第５図(55)～(58)）

杯（盃）と考えられるものは、口径が10cm以下と小さく容量も少ないものとした。

Ⅰ類（第５図(55)(56)）

口径に比して、器高が比較的高い半球形状を呈し、口縁部がわずかに外反する小椀とも言えるものである。

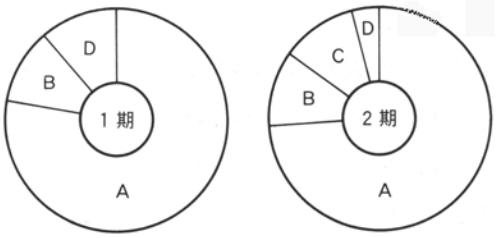


第６図 漆椀分類別出土状況

器壁も極めて薄手に挽かれ、轆轤技術の優秀さを窺わせる。

Ⅱ類（第５図(57)(58)）

高台脇から胴部へほぼ直線的に外方へ開き、口縁部がわずかに外反するものである。高台の形状は不詳である。



第７図　漆椀における髹漆

香合（第５図(59)～(61)）



第８図　漆　　絵

蓋(56)、身(60)、彫漆屈輪文香合蓋(61)がある。それぞれ1点ずつの出土であり、紹介だけにとどめたい。

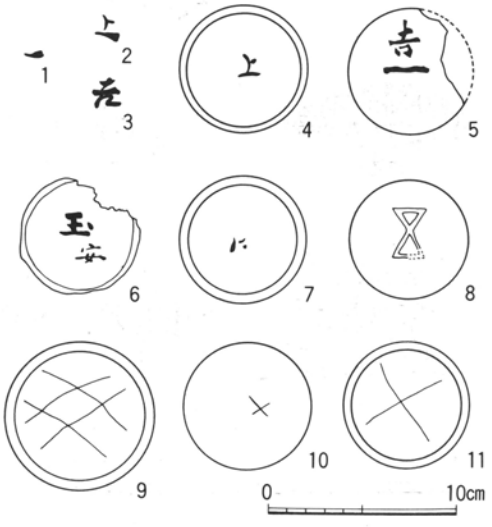
*

以上の木製挽物漆器の分類に補足をしておく。

底部のあり方は、(ア)輪高台 — 高台をつくり出し、高台内面を挽き込むもの。(イ)平高台 — 高台をつくり出し、内面を挽き込まず平らに削るもの。 (ウ)無高台 — 底を平らに削り高台のないもの。 (エ)内刳り底（碁笥底）—(ウ)の中央部を彫りくぼめるものなどが考えられる。これらの底部は轆轤の爪痕を除去する際に必然的に生じるものであり、挽物の製作技法上欠くことができないものである。本遺跡出土の遺物には爪痕を残すものは皆無であり、そのほとんどが(ア)タイプの輪高台を成すものである。平高台のものは椀において1点のみ確認した。第4図(31)は、平高台の形状を呈するが、低い高台が磨滅したと考えられるものである。(ウ)タイプは見られない。第5図(62)は、内刳り底の唯一のものであるが、無漆の木地椀である。数は少ないが椀の中には、外面に轆轤目を残すもの、轆轤の爪痕を消すため手斧で削った削痕を残すものなども見られる。

椀の法量は、Ⅱ－2類の一部の器形を除き概ね口径12cm（約4寸）～15cm（約5寸）、器高10cm以内を測る。椀は手に持ち使用するものであることを考慮すれば、片手に納まるよう手指の大きさに合わせたものであることが必要である。人間工学的に見て、日本人の手に持ちやすい椀は4寸どまりであると言われる(7)。日常の食生活に使用する椀は毎日使うことから手指に合わせて製作されているとすれば、4寸を超える大ぶりの椀は非日常（ハレ）の椀であったとも考えられる。

第6図は、時期別に椀の各類出土割合を示したものである。1期、2期共に大きな差異は認められないが1期にはⅠ類の椀の割合がわずかに多くなっている。古泉弘氏は、江戸の出土漆椀を層位別に検討することにより本稿におけるⅠ類に類似した漆椀が中世的な古い形態を示すものであると指摘している(8)。特にⅠ－1－bタイプのものは1期のみにおいて見られる。大坂城三の丸跡調査報告によれば『器壁の重厚なものは、古いつくりを



第9図 高台裏における朱漆文字、刻印

残すものであるが、室町時代ごろからつくられた薄手の椀との両者の見られることが、この時期の1つの特徴であるかもしれない』[9]としている。さらに古泉氏は、『漆椀は大ぶり、厚手で高台の高い形態から次第に小型化化し、薄手で高台の低い形態に変化していったともみられるのである(略)。こうした漆椀の変化は、おそらく近世になって陶磁器製の碗が広く普及することによって漆椀が汁物用の食器として専用化されてゆくことが一つの原因となったと思われる』[10]と推論する。清洲城下町においても1期から2期へと移行する中で混在はあるもののⅠ類からⅡ類への形態移行が序々に行われていったのかもしれない。Ⅲ類の椀は、両期において、Ⅳ類の椀は2期において出土している。

単位　%

	施文部位 / 髹漆	外面	内面	両面	無文
1期	A	100	0	0	0
	B	100	0	0	0
	C	−	−	−	−
	D	0	0	0	100
2期	A	85	0	0	15
	B	25	0	75	0
	C	37	25	0	38
	D	0	0	0	100

第1表　漆椀の髹漆別施文部位漆絵の割合

清洲城下町から出土した木製挽物の大半は横木取り[11]である。大径木からの木取りには横木取りが能率的で大量生産にむいていたと考えられる。

3．髹　漆

出土した木製挽物は、第5図62を除きすべて漆器である。髹漆は、色の違いによりA‥内面朱漆[12]外面黒漆塗　B‥内外面共に黒漆塗　C‥内外面共に朱漆塗　D‥Cタイプのもので高台内面のみ黒漆塗　E‥無髹漆（木地 ― 白木作り）の4タイプに分類される[13]。内面黒漆、外面朱漆で塗られたものは見られない。第7図は、各髹漆分類別の割合を示したものであるが[14]、1期、2期共にA髹漆のものが80%近くを占め当時最も一般的なタイプであったと考えられる。1期にC髹漆が認められないが、B、C、D髹漆は城下町期においては数量的に少なく特殊に近いものと言えよう。C、D髹漆のものはA、B髹漆のものに比較して、木地が薄手、髹漆も柿色に近い朱色で施され、全体的に丁寧なつくりでいわゆる「根来風」と思われるものが多い。

白木作りの挽物は、遺存状態が漆塗に比較し悪いと思われるものの出土例が極端に少なく、木製挽物には髹漆するのが一般的であったと考えられる。しかし、髹漆は簡素であり、また漆椀の下地には、各髹漆ともに黒漆を塗った例が多いが、数枚に剝離するようなものはなく、塗りの回数も簡略化されている[15]。

4．漆絵(文様)

出土漆器の大半は、多種多様な一色描の意匠化された漆絵（文様）が配されている[16]。漆絵の色彩は朱がほとんどで黒漆、金泥（第５図(55)(56)）を使用したものも極く少数見られる。また、黒梨漆には朱漆絵、朱梨漆には黒漆絵としていることは言うまでもない。施文部位は、外面胴部、内面見込み部である。第１表は、漆椀の梨漆別施文部位漆絵の割合を示したものである。１期においては、A、B梨漆共にすべて胴部のみ、２期になり内面見込みに文様の施されるものが現われてくる。B梨漆のものは両面に施文されるものが多くなり、C梨漆のものの中に黒漆、金泥で施文される場合が見られる。D梨漆のものは、１、２期を通して胴部、見込みに施文した例は見られない。ここで、城下町期における最も普遍的な木製椀のイメージをつくり上げることができる。挽物、Ⅰ、Ⅱ類タイプの組み合わせ、内朱、外黒漆塗り、外面胴部に朱漆絵と理解できよう。

漆絵の施文方法は、すべて手描きによるものと思われる。しかし、その中には部分的にかき落し技法[17]を用いる例もあり、菊花弁のくぎり、葉脈、扇の骨、俵目の表現など細線を表わすのに効果を上げている。これも省力化をはかる一方法と思われる。

文様には、動物文（舞鶴、立鶴、丸に鶴、亀）植物文（松・折れ松葉、竹・笹、梅、桐桔梗、楓、立銀杏、菊花、蘭、草花）器物文（扇、宝珠、俵）幾何文（丸文、亀甲、菱）紋章文（丸に鶴、丸に左三つ巴、丸に一の字、丸に桔梗、丸に菱、丸に九枚笹、丸に宝珠、花亀甲）などが見られる。長寿のシンボルである鶴亀、寒中にあっても樹勢のよい松竹梅、末広という将来の繁栄を意味するものとしての扇、仏教的な宝珠、霊鳥の宿るといわれる桐などの吉祥を表わす文様と桔梗、楓、銀杏、菊などの季節感を表わす文様にモチーフを求めているようである。これらの文様が当時好まれ流行したものと言えよう。文様単位は、２～３単位で単独文と文様を組み合わせ意匠的な工夫をこらした複合文とがある。前者は、紋章文系によく見られⅡ類の椀に多く、後者は、松、竹、鶴、亀を組み合わせる蓬莱文に見られ比較的器高の高いⅠ類の椀の胴部器壁に文様を巡らすものとなることが多い。また、文様の描き方は、２度３度と、その上を塗り直される例はなく、一様に筆勢がありタッチの強さを感じさせる。文様は、抽象的なものより具象的なものが多いが、その絵自体はずいぶん様式化され簡略化されている。

高台裏には、製作者か所有者か用途を表わすものか朱漆文字、記号が記される例も多い。

また線書き、刻印が施されたものも多く、いずれも梨漆された後に刻まれ漆を削り取っている[18]。線書き、刻印は朱漆文字をも削り取っていることから朱漆文字とは別の意味を持つことになると考えられる。線書きされてその後長く使用された形跡が認められないこと、文字、記号などの刻印はともかく使用時に支障のない高台裏とは言え漆を削り取り無雑作

に施しているなどから使用しないことの印、廃棄のための印になるのかもしれない。

5．出土漆器をめぐる諸問題

清洲城下町出土の木製挽物漆器の特徴の１つに、遺物のほとんどが椀類であり同じ膳に供される皿が占める割合は４％ほどでしかないことがある。これは全国的な傾向としても認められるようであるが、このことは木製品であることと共に手に持ち使用する椀と置いて使用する皿の違いにあるように思われる[19]木は熱伝導率が低く、保温性にもすぐれている点から熱い飯、汁を盛り手に持ち使用する椀の素材として利用価値は高い。皿は手を触れないし、熱物を入れることが少ないことを考慮すれば陶磁器がもっぱら利用されたと考えることができよう。当地方では瀬戸、美濃などの窯業生産地をひかえ大量の焼物が供給されている事実から、陶器と木製漆器との競合、比率などの問題は今後十分検討されるべき課題と言える。しかし、当地は、焼物の供給地であることと共に、美濃、信濃、三河等の挽物供給地でもあることを忘れてはならない。供膳形態を考える場合、限定された条件でのみ残存する木製品である椀の多量出土から見て陶磁器だけでなく木製挽物の存在を無視するわけにはいかない。蒔絵など高級品のほとんどは伝世されていったのか出土遺物としては見られないが、漆絵椀は汚れのひどいものや破損したものは、速かに廃棄され伝世されることは少なく消耗品として取り扱われていたと思われる。それは供膳用の実用品できわめて日常的に使用されていたことを表わすものである。裏を返せば容易に補充することができたことにつながる。横木取り粢漆の簡略化、きわめて様式化された漆絵、かき落し技法などは大量生産を示唆するものであり庶民への普及率の高さを示し、多大な需要に対応するものであったことを窺わせる。

製品が、製作者から使用者の手に至る経路には、二つの場合が考えられる。第１は自給自足をする場合である。第２は、第三者が製作したものを手に入れる場合である。一つの漆器が製作されるまでには多くの工程を経て轆轤挽き、粢漆という高度な技術が駆使されなければならない。誰でも自給できるとは到底考えられず後者の場合となろう。出土遺物の中には、固化した漆と思われる物質を残す漆椀も見られ城下における漆工活動の存在も考えられるがその規模、生産力を今は語ることはできない。椀の器形、描かれた文様[20]は、他の地域の遺物に類似性を見い出すことができる。これは当時、最大規模の消費地の一つであった清洲城下町への物資供給は並々ならぬ量であり、広域を対象にする流通網の存在を暗示しているものと考えられる。

6．おわりに

今後、資料の増加と共に、産地の確定、流通経路、製作技法などの検討を加え課題を明らかにすることにより、城下町に暮らした人々の生活の様子のみならず、城下町期における社会構造までをも物語ってくれるものと思われる。

本稿は、筆者の浅い知識ゆえに不明確な点、認識不足の点ばかりと思われるが、多くの御批判を賜われば幸いに思う。最後に本稿をまとめ上げるにつき愛知県埋蔵文化財センターの職員には多大な御教示、激励をいただいた。記して感謝の意を表わしたい。

〔注〕

(1) 人々の生活の中に強く密着してきたことを示すと共に、伝統的な生産、製作技法によるものであろう。

(2) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所において第5回中世遺跡研究集会が開催され、全国の漆器の出土例が報告されている（1985）
広島考古学研究会「第5回中世遺跡研究集会資料集　中世遺跡出土の漆器」（1985）

(3) 松田訓氏より多くの御教示をいただいた。
部分名称は民俗学の分野でも様々に呼称されている。例えば高台を取上げれば、橋本鉄男氏は、居尻（いとじり）とされ、その他糸底、糸輪などの呼称があるが本稿では考古学で一般的に使用される高台とした。
橋本鉄男『ろくろ』（法政大学出版局1982）

(4) 愛知県埋蔵文化財センター「清洲城下町遺跡」（『年報』1986）

(5) 形態比率として、高口比率（器高÷口径）＝口径に対する器高の割合と、底口比率（底径÷口径）＝口径に対する底径（高台径）の割合を求めた。
中村たかを氏は、「椀の形は縦横の比例（すなわち口の直径と高さとの割合）に関係が深く、試みにその値を計算してみると飯椀では六割五分内外、汁椀や平椀では四割台(略)別に高台の直径と口の直径との割合は押並べて高台は口の五割前後という結果がえられる」と指摘している。
中村たかを『日本の民具』（弘文堂1981）　P83

(6) 『類聚近世風俗志（守貞漫稿）』によれば「此古制の曲物より模し造るともに細き輪をかけたり細輪を桂と云也　模し之故に壺と平には外面に細紐を挽たり」とある。
他遺跡に類例を求めるならば、大坂城三の丸跡、江戸一都立一橋高校地点発掘調査遺物などにある。
追手門学院校地学術調査委員会（『大坂城三の丸跡』1982）
都立一橋高校内遺跡調査団（『江戸一都立一橋高校地点発掘調査報告』1985）

(7) 秋岡芳夫「木の触覚美」（『木の道具』朝日新聞社1984）

(8) 注(6)の（『江戸一都立一橋高校地点発掘調査報告』1885）

(9) 注(6)の（『大阪城三の丸跡』1982）

(10) 古泉弘『江戸を掘る』（柏書房1983）

(11) 奈良国立文化財研究所「容器」（『木器集成図録　近畿古代篇』1985）

(12) 朱漆にも、暗赤色、褐色に近い赤、黄ばんだ赤色など色調の差が見られる。この系統には酸化第二鉄、赤色硫化水銀を用いるものがあるが、遺物には鉄分の沈着などもあり、これらを区別することは難しく詳細は化学的検討を必要とする。また、朱などで木地を染めて透漆を塗った赤漆（せきしつ）と区別するためにも一般的に赤い漆を朱漆とした。

(13) 第2図～第5図にも、この朱漆タイプを付した。

(14) 朱漆が、確認できる有効破片まで含め示したものである。1期27点、2期75点を対象とした。

(15) 出土遺物の破片や剝離面を観察すると黒い粉末を認めることができる。同様の報告は、鎌倉の出土遺物にもなされている。
宍戸信悟「中世鎌倉出土の漆塗木製椀・皿の分類と変遷」（『神奈川考古第22号』1986）
下地に塗られた炭粉であるのかもしれない。

(16) 有効遺物97点中約90％の遺物に漆絵が施されている。

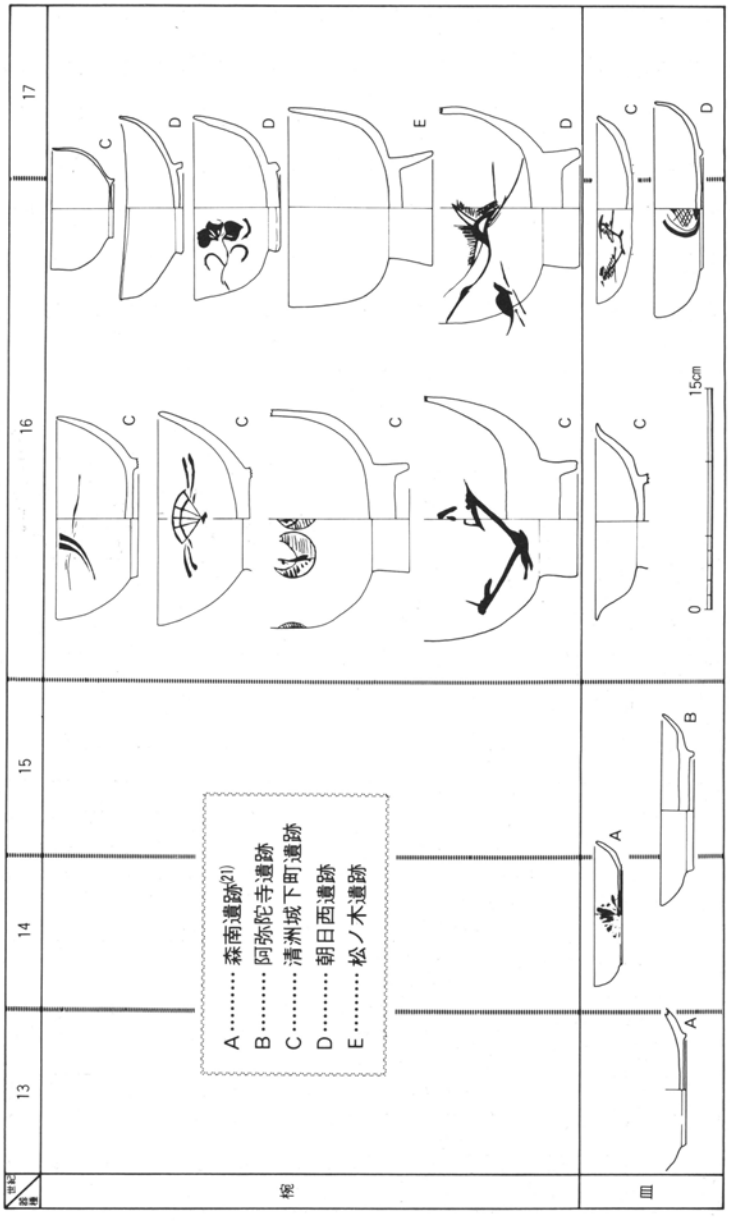
(17) 大三輪龍彦「鎌倉出土の漆器」（『日本の美術7 №230漆工（中世編）』至文堂1985）による。

(18) 福井県教育委員会（「朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ　朝倉館跡の調査」1979）にも同様の線書きの報告があり『用途または、使用者を区別するためのものと思われる』と指摘している。他遺跡にも類似する遺物の報告は多い。

(19) 「類聚近世風俗志」によると『焼物皿　猪口　手しほ皿　比三器は碗器を用ふる也』とある。

(20) 2期の遺構から出土した第3図(17)(20)の椀は、唯一の同文様のそろいと考えられる。また第3図(18)第4図(30)は2期と比定される同一井戸からの出土であり、朱漆、高台裏の上文字も同じであることからⅠ類、Ⅱ類のセットか、椀と蓋と考えられるものである。

(21) 長島広、安藤義弘の両氏より御教示をいただいた。



第10図　尾張地方出土の漆器

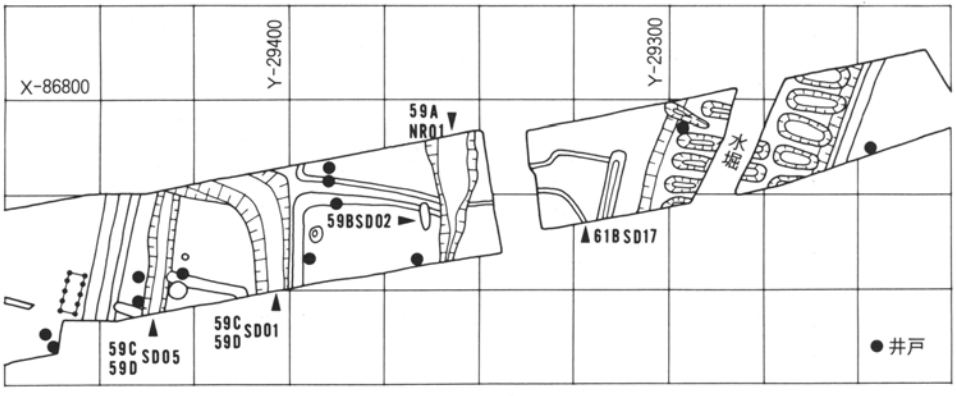
清洲城下町遺跡出土の墨書木製品について

梅　本　博　志

1．はじめに

清洲は、織田信長の居城地として知られているが、中世においても、尾張の守護所が置かれたこの地方の中心的都市であり、また、信長没後も、次男の信雄、豊臣秀次、福島正則、松平忠吉ら、豊臣、徳川政権下の有力大名が次々と居城し、慶長年間の名古屋築城直前においては、尾張地方のみでなく、全国屈指の「城下町」となっていた。

この清洲城とその城下町の調査は、昭和57年から継続的に実施され[1]、総数200点近い墨書木製品が出土している。これらは、質的にも良好な資料群と思われ、とりあえず、今年度で一応終了した環状2号線関係の調査の出土品について、その概要を報告したい。



遺　構	時期	規　模	概　要
自然流路 59A　NR01	Ⅱ	――	59C・DSD01～61A・BSD01（水掘）間に広がる自然流路（沼沢地）。Ⅱ－2期の段階で盛土が行なわれ、その結果、59C・DSD01、61A・BSD01が「溝」として確定し、59A NR01も「溝」として利用される。木簡類の出土した植物遺体層は、この盛土より下位に形成されたものであり、出土品はⅡ－1段階のものと考えられる。
溝 59B　SD02	Ⅱ－2	幅　2.0m 深さ　1.0m	Ⅱ－2期の溝59A　SD05よりさらに新しい、「土坑」とした方がよいかもしれない。
溝 59C　SD01 59D　SD01	Ⅱ	幅　15m 深さ　1.3m	発掘区の北端で、南北方向から東西方向へほぼ直角に折れ曲がる大溝で、西側では護岸用の柵列もみられた。上層は近世に到るまで水田として利用されている。
溝 59C　SD05 59D　SD05	Ⅱ－1	幅　5.0m 深さ　0.8m	南北方向の溝、西側では木と竹を格子状に組んだ護岸柵を検出。木簡類の他に底部に「上せん」等と墨書し、さらに穿孔を施した土師皿等が出土。
溝 61B　SD17	Ⅱ－1	幅　1.5m 深さ　0.3m	東西から南北方向へゆるく弯曲する浅い溝で、自然の小流路の可能性もある。Ⅱ－2期の盛土により埋没する。

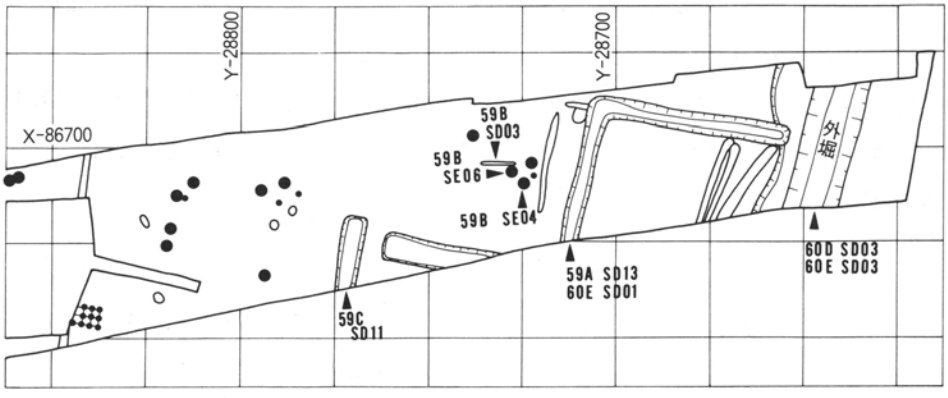
第1図　墨書木製品の出土した遺構（神明町地区）

2．墨書木製品の出土した遺構

清洲城下町遺跡の遺構、遺物群は、大きく三時期に区分することができる。この遺構群のうち、13C～14Cを中心とするⅠ期、及び17C以降のⅢ期については、墨書木製品の確実な出土例がなく、従って今回紹介する資料は概ね15C末～17C初頭にかけてのⅡ期、即ち、「城下町」の時代に属するものである。

Ⅱ期の遺構群は、大規模な盛土整地層の存在等から前後２小期の区分が可能であるが、その分布は一様ではなく、後半(Ⅱ－２)期の遺構が調査地点のほぼ全域に展開するのに対し、前半(Ⅱ－１)期の遺構は、朝日西地区では、ほとんど確認することができない。

これらの遺構群と、文献等による年代の対応関係は、明確にはし得ないが、Ⅱ－２期遺構群の終末は慶長15年(1610)の「清須越」が、また、Ⅱ－１期からⅡ－２期への移行は、織田信雄が清洲にその居城を移した天正十四年(1586)前後が考えられ、60年度調査で出土した「天正十四」の紀年銘のある丸瓦もその傍証とすることができる。Ⅱ－１期の開始については、出土遺物等から、15C末頃の年代を考えることができよう。



遺　構	時 期	規　模	概　要
溝（外堀） 60D SD03 60E SD03	Ⅱ－２	幅　15ｍ 深さ 2.5ｍ	城下町期の遺構群の東限を画し、清洲城の「外堀」に比定される大溝。
溝 59A SD13 60E SD01	Ⅱ－２	幅　6.0ｍ 深さ 1.2ｍ	南北方向から東西方向へほぼ直角に折れ曲がり、外堀の直前で終了する大溝、寺社地を画する溝と推定され、木簡類の他に、「文禄弐年」の墨書のある碗も出土。
溝 59B SD03	Ⅱ（?）	幅　1.8ｍ 深さ 1.2ｍ	性格不明、位置関係から、59B SE04、SE06に関係する可能性もある。
溝 59C SD11 59D SD11	Ⅱ－２	幅　7.0ｍ 深さ 0.9ｍ	外堀(60D･E SD03)と平行し、屋敷地を画すると思われる大溝、東西方向の大溝(59B･D SD14)で画される方形の地割内には、寺社の存在が想定される。
井　戸 59B SE04	Ⅱ－２	径　3.0ｍ （桶　組）	笹塔婆４点の他に、井戸廃棄の際の儀礼に伴うと考えられる完形の水滴２点、人形、小柄、永楽通宝等が出土。
井　戸 59B SE06	Ⅱ－２	径　1.6ｍ (内部構造不明)	花押のある木簡の他に、漆塗の箸、石硯等が出土。

第２図　墨書木製品の出土した遺構（朝日西地区）

3．墨書木製品とその分類

城下町遺跡出土の墨書木製品については、機能、形態等から大きく５類に区分し得た。

第Ⅰ類　中世木簡

いわゆる狭義の「木簡」であり、その形態から「板材」と「札材」に区分した。

(1)　板材　方形の材を使用するもの。木目の方向に文字を記したもの(縦板材)と木目に直交する方向に文字が記され、横長の材として用いられたもの(横板材)がある。

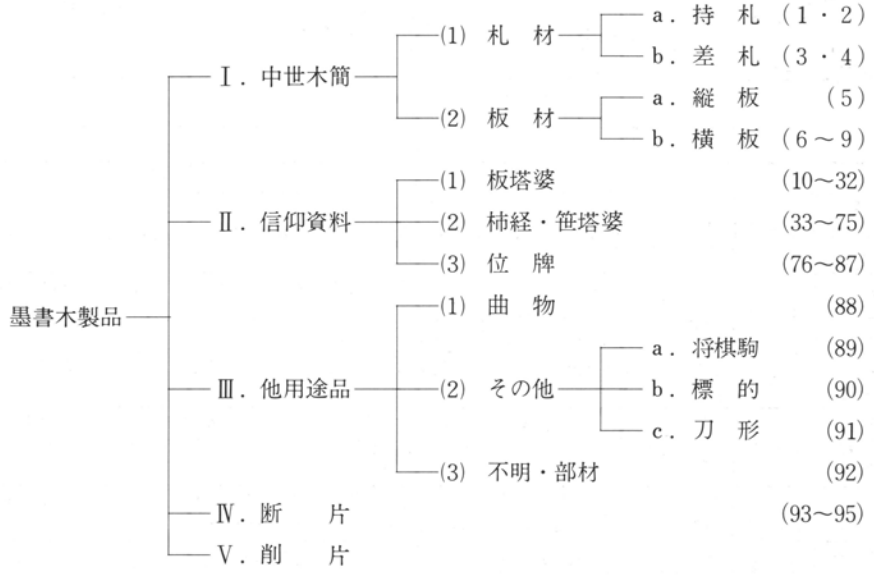
(2)　札材　長方形、又は端部を圭頭とするもの(持札)とさらに下端を串状とし、地面等に差し込むことを意図したもの(差札)がある。また、頭部に穿孔、又は切れ込みを加え固定できる様にしたもの(付札)の存在は当然予想されるが、出土例はなかった。

第Ⅱ類　信仰資料

形態、記載内容から信仰生活に関係すると思われるもの。仏教関係のものがほとんどであり、いわゆる「呪符」に属するものはみられなかった。

(1)　笹塔婆・柿経　薄板に経文を筆写したものを「柿経」、六字名号等を記したものを、「笹塔婆」とするのが一般的であるが、小片では判断し得ないものも多い。幅３cm前後の柾目材を用い、上端が確認できたものは、全て圭頭となっている。

(2)　板塔婆　死者の墓標あるいは供養塔として作成されたものであり、頭部を五輪形とする。幅８cmを超える大型のものが全て柾目材を使用しているのに対し、それ以下では、板目材が多くなっている。



第１表　墨書木製品とその分類

(3) 位　牌　葬送儀式における死者の依代、あるいは、追善の祈念の対象として作成されたもの。上端を平頭又は圭頭とし、下端は串状とする。墓地へ安置した「野位牌」と考えられるものである。

第Ⅲ類　他用途品

用途が明らかな墨書木製品のうち、Ⅰ・Ⅱ類以外のもの。また、用途不明品のうちでもⅠ・Ⅱ類に属するとは考えられないもの。曲物への墨書の様に、その内容物を示したもの、あるいは、将棋の駒のように、その機能の為に、必然的に文字を伴うものの他に、木製品の部材と考えられるものも含めた。

第Ⅳ類　断　片

破損等で原形を留めず、また記載内容等からもその用途が推定し得ないもの。

第Ⅴ類　削　片

本体の二次的使用のために、削り取られた破片、その意味で、本体の一部である「断片」とは区分した。城下町例では、同一個体から削り取られたと思われる3例のみである。

形態			調査地区	神明町地区					朝日西地区						出土点数		比率(%)
			発掘区・遺構	59A NR01	59B SD02	59C 59D SD01	59C 59D SD05	61A 61B SD17	59A SD13 60E SD01	59B SD03	59B SE04	59B SE06	59C 59D SD11	60D 60E SD03			
			時期	Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅱ	Ⅱ-1	Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅱ(?)	Ⅱ-2	Ⅱ-2	Ⅱ-2	Ⅱ-2			
Ⅰ	(1)札材	a 持札			1(1)	1 (1)								2 (2)			
		b 差札						1 (1)					1 (1)	2 (2)			
	(2)板材	a 縦板	1 (1)											1 (1)			
		b 横板			5 (2)								7 (2)		12(4)	17(9)	10.0
Ⅱ	(1)板塔婆		1		1		1 (1)	23(18)					2 (2)		28(23)		
	(2)柿経・笹塔婆		66(26)	1					2 (2)	4 (4)			16(11)		89(43)	129 (78)	
	(3)位牌		1 (1)										11(11)		12(12)		75.9
Ⅲ	(1)曲物													1 (1)	1 (1)		
	(2)その他	a 将棋駒	1 (1)												1 (1)		
		b 標的	4 (1)												4 (1)		
		c 刀形			1 (1)										1 (1)		
	(3)不明・部材												1 (1)		1 (1)	8 (5)	4.7
Ⅳ	断片		6 (1)									1 (1)	6 (1)		13 (3)		7.6
Ⅴ	削片		3												3		1.8
計(点数)			83(12)	1	8 (4)	1 (1)	1 (1)	24(10)	2 (1)	4 (1)	1 (1)	43(22)	2(2)	170 (95)			100.0

( )内は釈文を掲載した点数

第2表　墨書木製品の形態と遺構別出土点数

4．出土品の概要

墨書木製品の分類に基づき、各類形毎に出土品の概要を記したい。

第Ⅰ類　中世木簡

(1)　札　材

持札 (1)　神明町　59C　SD05

五角形の札材に花押を記し、反対面に年号、日付を入れたもの。年号は、共伴遺物の年代観からみると、永正(1504～21)の可能性が高い。花押は、いわゆる「足利様」であり、この年代観と矛盾しない。

持札 (2)　神明町　59C　SD01

墨書の意味は不明。ただし、形態は、朝倉氏遺跡[2]例で「香札」、草戸千軒町遺跡[3]例で「闘茶札」などに比定されているものに類似する。

差札 (3)　朝日西　59E　SD01

墨書は、串状の材の上半部に限定されており、下端を地中に差し込んで使用したものと思われる。「かちや町」は、文禄３年(1594) ２月に実施された清洲町奉行３人による「家改」[4]にみられる「鍛治屋町」に比定されるものである。また「十六間三尺六寸」は、町並の奥行を示すものと推定され、従って、本製品は、城下町の地割に際し、「かちや町」の範囲を表示したものと考えることができよう。また文頭の「六」は、明らかに異筆であり、同様の製品が複数あったことを示唆するものである。あるいは、町割施行に際し、各工事担当者の分担を現地で表示したものか。

差札 (4)　朝日西　60E　SD03(外堀)

墨書は(3)と同様、上半に限定される。文字は墨痕ではなく、材の盛りあがりとして確認されるのみであり、相当期間屋外に露呈していたものと思われる。小牧町は、やはり、「家改」にみられる「こまき町」のことと考えられ、「鍛治屋町」と共に、奉行の一人、日比野下野の家改担当地区に含まれている。

(2)　板　材

縦板 (5)　神明町　59A　NR01

板材の表裏両面に、「久罷」「仕候」等、書簡の文言らしきものをくり返し記す。板材の本来の用途は不明であるが、転用し、習書に用いたものと考えられる。

横板 (6)　朝日西　59D　SD11

木目に直交する方向に、漢字・仮名交じりの文を10行にわたり記したもの。文体から書簡とも考えられるが、一般の書簡に板材を使用したとは考えられず、下書の類か。また、文中の「憑」等の文字に注目するならば、一種の祈願文とも考えられる。

横板 (7)　朝日西　59D　SD11

小片であり、不明部分も多いが、数字とともに、「分」、「文」らしき文字もみられ、(6)とは、横板材という共通性があるものの、その性格を異にすると考えられる。草戸例にみられる様な、商取引関係の帳簿類か。

横板 (8)　神明町　59D　SD01

人名らしきものを列記する。草戸例では、折敷に三人の名前を列記したものがあり、柾目の薄板材への人名列記という点では共通する。

横板 (9)　神明町　59D　SD01

一字のみの記載、材は原形を保つ。

第Ⅱ類　信仰資料

(1)　板塔婆

板塔婆 (10)　神明町　59A　NR01

板塔婆の下部、右辺は原形を保つか。

板塔婆 (11)　神明町　59D　SD01

左右は整形されているが、上下両端は原形を留めていない。非常に小型ではあるが、一応板塔婆と考えた。

板塔婆 (12)　神明町　61B　SD17

独特の書体から、法華宗系と考えられる。盂蘭盆会の際の供養に用いたものか。

板塔婆 (13)～(30)　朝日西　59A　SD13、60E　SD01

総数18点のうち、(30)は60E区内より単独で、他は59A区内より重なり合った状態で出土。59A区内の一括出土品の中には、墨痕は有しないが、その形状から、明らかに板塔婆と考えられるものも5点認められた。規格は大小様々であるが、頭部を確認し得たものは、全て五輪状となっており、頭部を基準に、墨書の無いものも含め、その個体数を復元すれば、18本となる。

このうち、(13)～(19)及び(14)、(15)の断片と考えられる(20)、(21)は、その規格、書式、字体が共通するものであり、いわゆる「七本塔婆」と考えられるもの[5]である。

また、(23)の裏面には、(22)の文言の一部が逆文字となって写っており、両者が同時に作成されたものであることを示している。

板塔婆 (31)、(32)　朝日西　59D　SD11

いずれも中型の板塔婆であるが、頭部の形状は不明。(32)は、日付から盂蘭盆会の供養に用いられたものか。

(2) 柿経・笹塔婆

柿経・笹塔婆 (33)～(58)　神明町　59A　NR01

自然流路中の植物遺体層よりの出土品。供養が終わった後の柿経を水辺に流したものか。用材、及び筆跡が同一と思われるものは少ないが、筆写された経典は、確認し得たものは、全て法華経であった。

笹塔婆 (59)、(60)　朝日西　59D　SD11

共に六字名号を記したものと考えられるが、筆跡などは全く異なる。

柿経・笹塔婆 (61)～(71)　朝日西　59D　SD11

溝中より、多量の人、獣骨に混在する形で出土したもの。「㐂見禅定門」「かめ代」等は、いずれも供養されるべき人物か。

柿経 (72)～(75)　朝日西　59B　SE04

同一の筆跡により六字名号を記したもの。井戸廃絶時の儀礼に伴うものか。

(3) 位　牌

位牌 (76)　神明町　59A　NR01

平頭で、下端を串状とした材に、2人の名を列記したもの。裏面は上・下端部を除き、作為的に削り取られ、また、左右の側面も二次的な整形が行なわれている。

位牌 (77)～(87)　朝日西　59D　SD11

溝中よりの一括出土品、墨書された文言のうち、「灵」は「霊」の異体字。また、「久々」の語句は、呪符等にみられる「急急如律令」の「急急」からきたものと考えられ、発掘例では確認し得なかったが、民俗例では、「久々如律令」と記す例[6]も知られている。(82)にみられる「㐂見禅定門」は、笹塔婆(60)と同一人物か。(86)の「念三日」は「廿三日」の意。

第Ⅲ類　他用途品

(1) 曲　物

曲物側板 (88)　朝日西　60D　SD03

側板の外面にその内容物及び量を表示したもの。曲物は、復元すれば、高さ98㎜、径100㎜、容積は770㎖程となる。砂糖は、当時南蛮貿易の輸入品であり、贈答品としても珍重されていたことが知られており[7]、本例もその様な際の容器として用いられたものか。

(2) その他

将棋駒 (89)　神明町　59A　NR01

彫り込みはなく、墨書のみの駒「歩兵」。

標的 (90)　神明町　59A　NR01

一辺が10.3cm(3寸5分)の正方形の材に対角線を針書し、交点を中心に直径4.5cm(1寸

5分）の墨円を描き、対角線の方向に「上」の一字を入れる。楊弓等の標的か。

刀形 (91)　神明町　59C　SD01

一個体分と考えられる三片からなり、復元すれば、長さ32cm程の刀形となる。柄部分に「大くに□」と針書し、墨を入れる。裏面の「永□」はあるいは年号か。刀身部分には、墨で刃文を表現し、写実的に仕上げる。

部材 (92)　朝日西　59C　SD11

ほぼ同形、同大の2片を中央部の三ヵ所の小孔により、十文字に組み合わせる。用途は不明であるが、基本的には「木簡」とは考えられず、何らかの木製品の部材と思われる。

第Ⅳ類　断　　片

断片 (93)　上端の折れた札状の材に花押を記したもの。異筆部分は墨痕も薄く、文字数も特定し得ない。花押は、いわゆる「明朝体(徳川判)」に近く、持札(1)より新しい様相を呈しており、これは遺構の年代観とも一致する。

断片 (94)　朝日西　59D　SD11

原形不明、2文字の記載か。

断片 (95)　神明町　59A　NR01

原形不明、2文字の記載か。

5．まとめ

1．清洲城下町遺跡出土の墨書木製品は、塔婆、柿経をはじめとする信仰関係資料が最も多く、全体の¾(78点)を占めるが、これは中・近世木簡の一般的な傾向でもある。

しかし、その一方、「蘇民将来」札をはじめとする、いわゆる「呪符木簡」が全くみられないこと。また、「付札」の類が確認されないなど、他の中・近世遺跡とは若干異なる状況もみとめられる。

2．さらに、草戸千軒町遺跡例では、全体の92%を占める削屑が、城下町例では、わずか1.8%(3点)しか認められないことも特筆されよう。これは、草戸例でいう、101、103、143の各型式、即ち、表面を削って再利用した木簡類が、城下町例では全くみられないことと対応すると考えられる。

しかし、こういった多量の削屑類と、その母体となった再利用痕のある木簡類は、朝倉氏遺跡例などでは、報告されておらず、この相違は、その記載内容とも相俟って、港町あるいは市場町として発達した前者と、政治的都市として機能した後者との、「集落」としての性格の相違に由来するとも理解されよう。

3．木簡類のうち、花押と年号のある持札(1)については、ほぼ同形・同大で、花押と「天文十七」の年号を有するものが、沓掛城遺跡[8]より出土している。これは、その記載要素

から、何らかの「証明」に使用したと考えられるものであり、「入会地への立入許可証」[9]とされている道場田遺跡[10]例、馬場屋敷遺跡[11]例との類似性を指摘することができよう。

また、町名を記した差札(3)、(4)は、城下町の地割実施時に使用されたものと考えるならば、若宮大路側溝中より出土し、公共事業を御家人に分担奉仕させた当該地点を表示したものと理解されている北条泰時、時頼邸跡[12]出土例との共通性を見出すことができよう。いずれも、今後類似資料の増加をまって、改めて検討したい。

4．本稿では、環状2号線関係の調査の出土品のうち、一文字でも釈読し得たもの全てを記載した。しかし、今年度よりはじめられた五条川河川改修関連の調査においても、既に何点かの墨書木製品があり、これらについては、後日改めて報告したい。

5．墨書の釈読にあたっては、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の全面的な御指導を得た。また、図版等の作成にあたっては、鈴木規子氏の協力を得た、記して感謝したい。

〔注〕

(1) 清洲城下町遺跡の調査は、五条川を境とし、東側を「朝日西遺跡」の名称で昭和57年から、西側を「清洲城下町遺跡」の名称で、昭和59年からそれぞれ継続的な調査を実施してきた。しかし、両者とも、清洲城を中心とする城下町の一画であり、本稿では、両者を合わせて「清洲城下町遺跡」として取り扱った。また、神明町地区をはじめとする城下町遺跡の地区割については、本年報「調査の概要・清洲城下町遺跡」を参照されたい。
(2) 福井県福井市朝倉氏遺跡
(3) 広島県福山市草戸千軒町遺跡
(4) 『駒井日記』文禄三年二月十七日条
(5) 参考文献清洲城下町遺跡(b)
(6) 難波俊成「物忌札」(『日本仏教民俗基礎資料集成4』1977)
(7) 『信長公記』には、天正8年(1580)に、長曽我部氏が砂糖三千斤を信長に献上した旨の記載がみられる。
(8) 愛知県豊明市沓掛城遺跡
(9) 志田原重人「出土の文字資料からみた中世庶民生活の一面」(『木簡研究』第8号1986)
(10) 新潟県白根市馬場屋敷遺跡
(11) 静岡県焼津市道場田遺跡
(12) 神奈川県鎌倉市北条泰時・時頼邸跡

〔参考・引用文献〕

朝倉氏遺跡　福井県教育委員会「朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ」(1979)
草戸千軒町遺跡　(a)広島県草戸千軒町遺跡調査研究所「草戸千軒－木簡－」(1982)
(b)志田原重人「草戸千軒町遺跡出土の木簡」(『木簡研究』第3号 1981)
沓掛城遺跡　豊明市沓掛城址発掘調査団「沓掛城第四次発掘調査報告書」(1985)
道場田遺跡　焼津市教育委員会「道場田遺跡・小川城遺跡」(1984)
馬場屋敷遺跡　川上貞雄「馬場屋敷遺跡出土の中世木簡と呪術資料」(『日本歴史』441号 1985)
北条泰時・時頼邸跡　馬淵和雄「中世鎌倉若宮大路出土の木簡」(『日本歴史』439号 1984)
清洲城下町遺跡　(a)遠藤才文・小澤一弘「人・獣骨類の出土した大溝」(『年報昭和60年度』愛知県埋蔵文化財センター 1986)
(b)服部哲也「朝日西遺跡の紀年銘資料及び共伴遺物」(『年報昭和60年度』愛知県埋蔵文化財センター 1986)

68 十一月

笹塔婆 (56)×(23) 柾目

69 □□〔月十カ〕
□□

笹塔婆 (25)×(20) 柾目

70 南×

笹塔婆 (30)×28 柾目

71 □弥陀〔阿カ〕×

笹塔婆 (57)×(25) 柾目

朝日西 59B SE04

72 南無阿弥□×

笹塔婆 (90)×29 柾目

73 ×無阿弥陀佛

笹塔婆 (93)×29 柾目

74 ×無阿弥陀×

笹塔婆 (83)×(15) 柾目

75 ×阿弥陀×

笹塔婆 (57)×29 柾目

(3) 位牌

神明町 59A NR01

76 ・「□□〔定治カ〕
長□□ 御れうこんさま

・「□□ お□

位牌 (132)×(15)×1.5 柾目

朝日西 59D SD11

77 「三界萬霊有縁無縁」

位牌 195×29×2 柾目

78 「物故妙連禅尼」

位牌 195×27×2 柾目

79 「物故者八郎殿十月十五日」

位牌 210×30×1.5 柾目

80 「今次久々 〓位」

位牌 200×29×2.5 柾目

81 「□寂玄□公 〓位」

位牌 205×28×2 柾目

82 ・「物故□〔宗カ〕見禅定門」
・「梅月浄白」

位牌 187×27×2 柾目

83 「皈寂斤公慶公久々〓位」

位牌 191×27×2 柾目

84 「皈真□□うそ久々〓位」

位牌 196×26×2 柾目

85 「お次うそ久々〓位」

位牌 203×27×2 柾目

86 「源八郎おなへ久々八月念三日」

位牌 240×30×1 柾目

87 ・「皈真仙天宗白禅定門〓位」
・「□〔寂カ〕六日」

位牌 240×26×1.5 柾目

釈文の記載及び符号については、木簡学会編「木簡研究」の記載例に従った。

(2)　柿経・笹塔婆

神明町　59A　NR01

33　「羅頻婆羅□　柿経　(82)×(14)　柾目

34　「□□〔薩説カ〕大□　柿経　(98)×(23)　柾目

35　「娑婆世界□□〔他カ〕　柿経　(82)×(10)　柾目

36　「能持是経者　柿経　(100)×(13)　柾目

37　「縁果□□□〔報生處カ〕　柿経　(93)×(18)　柾目

38　「又□佛□□〔轉カ〕〔子カ〕　柿経　(55)×32　柾目

39　「□□〔尒カ〕　柿経　(72)×(25)　柾目

40　□□□皆六種□」〔動カ〕　柿経　(155)×32　柾目

41　□□咒日〔説カ〕　柿経　(38)×(23)　柾目

42　□〔須カ〕　柿経　(14)×(14)　柾目

43　□求聲　柿経　(32)×(16)　柾目

44　□□□〔滿カ〕　柿経　(30)×(14)　柾目

45　□具足六□　柿経　(46)×(15)　柾目

46　人　柿経　(29)×(14)　柾目

47　□實相□□　柿経　(51)×(10)　柾目

48　□一乗　柿経　(27)×(8)　柾目

49　□者□□曽□　柿経　(52)×(6)　柾目

50　目皆令　柿経　(31)×(13)　柾目

51　□□国〔彼カ〕　柿経　(61)×(21)　柾目

52　□□〔合カ〕　柿経　(19)×(6)　柾目

53　「無量衆所尊　為□　笹塔婆　(136)×(34)　柾目

54　□×〔南カ〕」　笹塔婆　(28)×(21)　柾目

55　南無□×　笹塔婆　(61)×29　柾目

56　・□妙法□〔無カ〕〔蓮カ〕　・『め□』　笹塔婆　(83)×(24)　柾目

57　・□□□□□〔七十カ〕　・『　□　□□□』(別筆)　笹塔婆　(121+53)×(23)　柾目

58　ろ(梵字)　笹塔婆　(24)×27　柾目

朝日西　59B　SD03

59　×無阿弥陀佛　笹塔婆　(104)×(29)　柾目

60　□無阿弥　笹塔婆　(23)×(22)　柾目

朝日西　59D　SD11

61　「浄終□□□　柿経　(106)×(29)　柾目

62　□□須弥山幢上　柿経　(78)×(26)　柾目

63　沙　・　柿経　(21)×(19)　柾目

64　□□〔佛カ〕　柿経　(93)×(109)　柾目

65　「常長田夕丘公於仏満　笹塔婆　(156)×29　柾目

66　□見禅定門□□〔宗カ〕　笹塔婆　(155)×31　柾目

67　×かめ代四月二日　笹塔婆　(109)×30　柾目

22
・「□（梵字カ）水菊在月手（美花香カ）□□□衣　七□
□□□（龍カ）
・「□（梵字カ）」

板塔婆　(630)×115×1.8　枠目

23
・「五蘊本来空　一撃□（忘カ）所知　造伏以
三世一切□□観□
若人欲了知七□□於此□□
・「□（逆字）水菊在月□（手カ）」

板塔婆　(626)×99×2　枠目

24
「[illegible]　若人欲了知　三世一切佛
三界唯心造　應観法界性矣
為道西（禅定門カ）□□七□□
慶長□□」

板塔婆　(723)×95×5　枠目

25
「南□（無カ）大日×

板塔婆　(312)×76×1.2　板目

26
「[illegible]　南無□（大カ）□□×

板塔婆　(440)×124×2.0　枠目

27
「南無大日観世音

板塔婆　(552)×97×2　枠目

28
□（門カ）□□
五月十五日　白」

板塔婆　(476)×90×1.4　枠目

29
□□□之□□□□□慶長□×

板塔婆　(203)×(23)×1　枠目

30
・「南無阿弥陀佛　光明遍照十□（方カ）
念佛衆生□　×
・「南無阿弥陀□（佛カ）

板塔婆　(150)×39×1　枠目

朝日西　59D　SD11

31
×無大悲観世音

板塔婆　(178)×65×3　板目

32
罪為お多美□也七月十四日」

板塔婆　枠目

第Ⅱ類　信仰資料

(1)　板塔婆

神明町　59A　NR01

10　×□□七月……□　〔葬也カ〕　〔日カ〕

板塔婆　(86+37)×42×2　柾目

神明町　59D　SD01

11　□□□□□□為」　(梵字)

板塔婆　(150)×25×2　板目

神明町　61B　SD17

12　×無妙法蓮華経□聡寿出儀罪障
　　不復受　　七月

板塔婆　(724)×(66)×2　柾目

朝日西　59A　SD13・60E　SD01

13　「五蘊本来空　今地上□　□□□
　　□是□□　…　…右志者×　□×

板塔婆　(344+53+155)×85×1.5　柾目

14　「帰依佛法僧　是不□□
　　□如□

板塔婆　(380)×85×2.5　柾目

15　「地水火風空　一切衆生
　　皆菩提□　〔心カ〕□

板塔婆　(496)×85×2　柾目

16　「五蘊本来空　文殊大
　　十方諸□　右志者為浄□□□□　〔敬カ〕
　　〔悉カ〕　五月□日　白

板塔婆　(685+74)×85×1.9　柾目

17　「帰依佛法僧　南無六道　慶長四年
　　能化無佛　右志者為浄圓禅門　敬
　　六月初七日　白

板塔婆　678×85×1.6　柾目

18　「地水火風空　其後當作佛
　　号名日弥勒　右志者　浄圓□□　〔禅門カ〕
　　六月十四日

板塔婆　678×85×1.8　柾目

19　・「五蘊本来空　我此□□　〔慶カ〕□長四年
　　一経其耳　右志者□□□□月□十一日　〔二カ〕

・「(釈文とれず)

板塔婆　678×85×1.2　柾目

20　×□志者　□□浄□□　〔圓カ〕×

板塔婆　(163)×(49)×1　柾目

21　×□□志者□□□

板塔婆　(221)×(65)×2　柾目

第Ⅰ類　中世木簡

(1)　札　材

神明町　59C　SD05

1・「(花押)」

・「永□□□

三月八日」　持札　47×26×4.5　板目

神明町　59C　SD01

2　「三何」　持札　51×18×1.0　柾目

朝日西　60E　SD01

3　「かちや町

『六』十六間三尺六寸

是より北　差札　291×40×2　柾目

朝日西　60E　SD03(外掘)

4・×□□小□□〔牧町カ〕

・□□□□□小□□〔牧町カ〕　差札　318×27×2　柾目

(2)　板　材

神明町　59A　NR01

5・「久罷久罷

□　」

・「□□〔罷カ〕□　縦板　201×(42)×2　板目

朝日西　59D　SD11

6　□ん…お…て」

□四□□…□□〔故カ〕也

□

□も憑□覧ハ

□若衆□…かとも

□

□けん□…□□□〔よのカ〕

せん□…ても

□□…□…□し

□□□…□座〔御カ〕候　横板　(34+46)×169×2　柾目

7

十八」

□〔分カ〕三□

□〔文カ〕

□

□

□　横板　(15)×(72)×2　柾目

神明町　59D　SD01

8

「□

□〔如カ〕□

□〔道カ〕□

如□〔肝カ〕

□泉〔道カ〕　横板　214×(61)×1　柾目

9

「眷」　横板　189×39×1.5　柾目

第Ⅲ類　他用途品

(1)　曲　物

朝日西　60D　SD03(外掘)

88　「白さたう

壹斤」　曲物側板　358×98×1.5　柾目

(2)　その他

神明町　59A　NR01

89・「歩兵」

・「金」　将棋駒　28×12×3.5　板目

90　「上」　標的　103×(51+9+28)×2.5　板目

神明町　59C　SD01

91　「大くに□」

「永□　」　刀形　(47+150+109)×26×5　柾目

(3)　部　材

朝日西　59C　SD11

92　「□□□□□〔夫カ〕大□」　部材　210×33×4　板目

第Ⅳ類　断　片

朝日西　59B　SE06

93　□(花押)『□　□』」　断片　106×26×8　板目

朝日西　59D　SD11

94　□□〔をカ〕　断片　(70)×(36)×2　柾目

神明町　59A　NR01

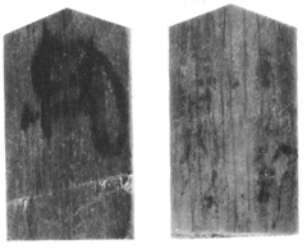
95　□□〔陰カ〕　断片　(44)×(10)×1　柾目



第3図　墨書木製品(1)（1・2・89のみ½）


34
31
66
65
34
36
56
72
34
53
67
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
0
15cm

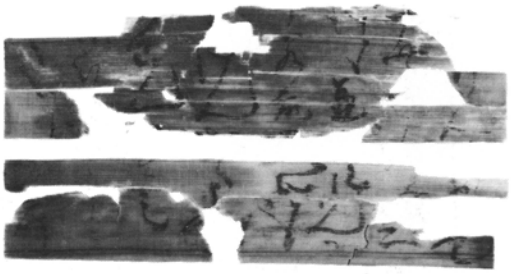
第4図　墨書木製品(2)



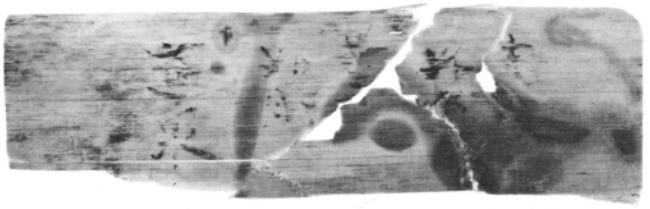
1



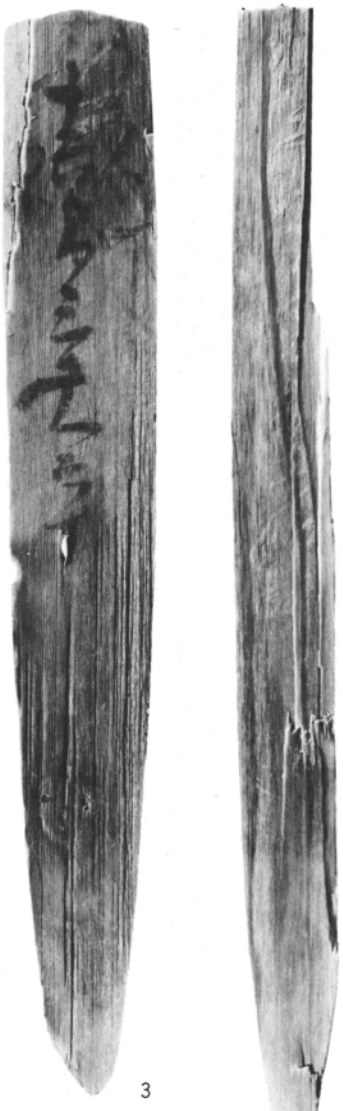
2



6



8



3

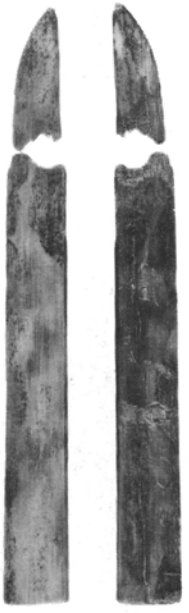
4

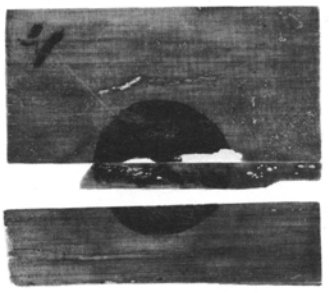


5

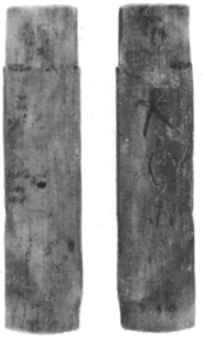


93





90



91

写真　1


17


18


19


24


61


34


65


67


53


72


77


78


82




83


86


87

写真 2

清洲城下町遺跡出土の瓦について

小　澤　一　弘

1．はじめに

清洲城下町遺跡は、濃尾平野を南下する五条川の中流域に形成された自然堤防上とその後背湿地上に立地している。16世紀から17世紀の初頭にかけては歴代の尾張の領主が居住する城と、一説によれば人口７万人を擁していたとも言われ、三重の堀に囲まれた東西約1.5km、南北約2.7kmに及んだ清洲城下町も慶長15年(1610)から３年の歳月をかけた「清須越」によって町は解体された。その後は美濃街道の宿場町と周囲に点在する農村へと変貌していったのである。

清洲城下町遺跡の発掘調査は、名古屋環状２号線に伴う緊急調査の一つとして、昭和57年度から開始され、五条川を挟んで朝日西遺跡と城下町遺跡との東西２地点で実施され、昭和61年度の調査で終了した。そしていくつかの調査区からは城郭の一部をなす建物に使われていたと思われる瓦類が出土した。とりわけ「天正14年(1586)」の紀年銘を有する玉縁丸瓦片は、検出された遺構群の成立時期を考える上で注目される資料でもある。

ここでは名古屋環状２号線に伴う発掘調査によって出土した清洲城下町遺跡関連の瓦類を集成し瓦当面の紋様により分類したものである。出土した瓦のうち、大部分は丸瓦・平瓦が占める。ついで軒丸瓦・軒平瓦が、そのほかに少量の面戸瓦・鯱瓦・飾り瓦などの道具瓦がある。軒先瓦だけをえらびだすと軒丸瓦が53点、軒平瓦が64点出土している。これらの瓦はいずれも本瓦造りであり、桟瓦ではなく、黒色や銀色を呈した燻し瓦である。

2．軒丸瓦

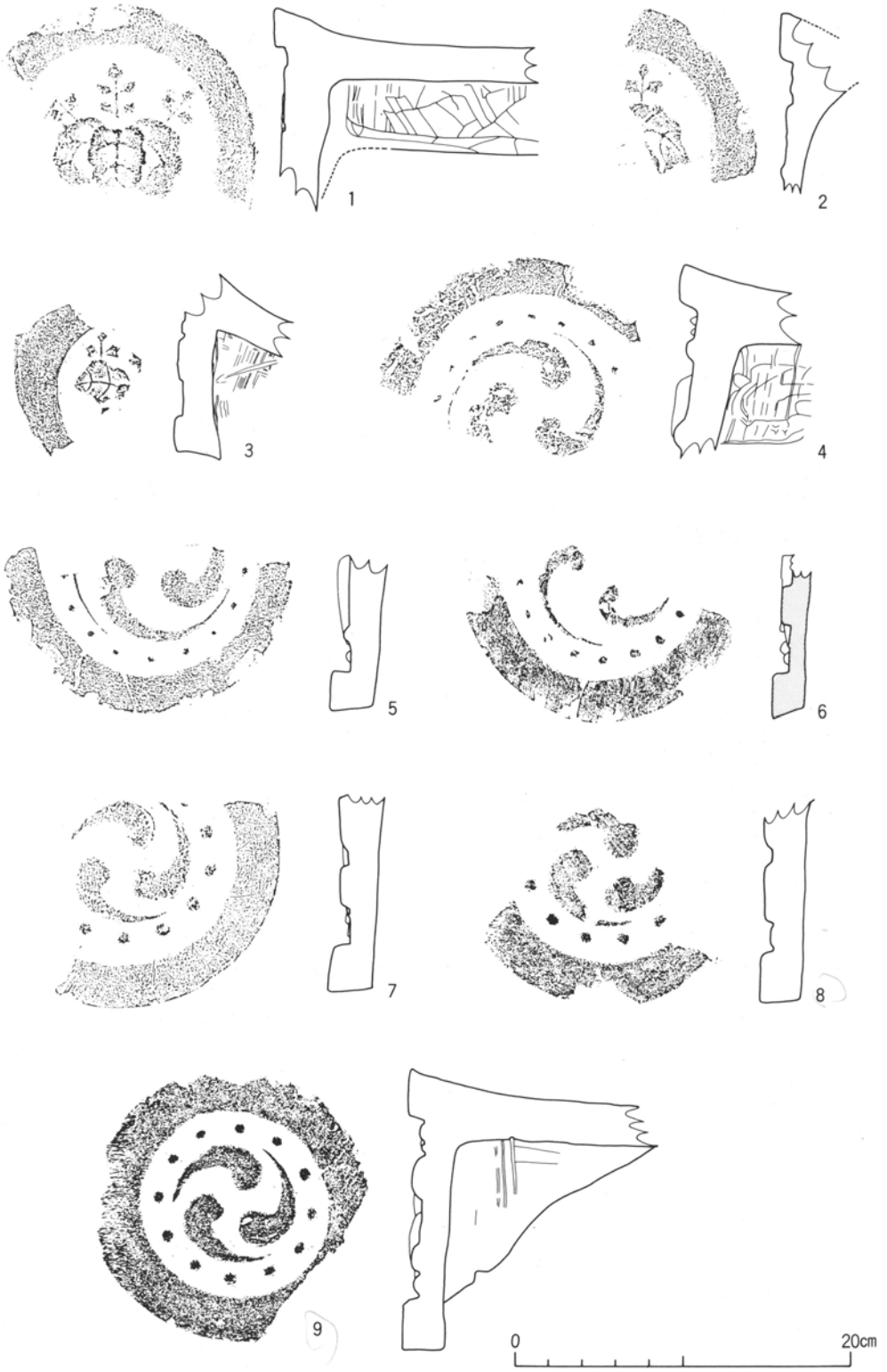
軒丸瓦の紋様構成は、桐文と三ツ巴紋があり、三ツ巴紋はさらに、大型、中型、小型に分けられ、巴紋の周辺に配してある珠紋数によってさらに細分した。

Ⅰ類

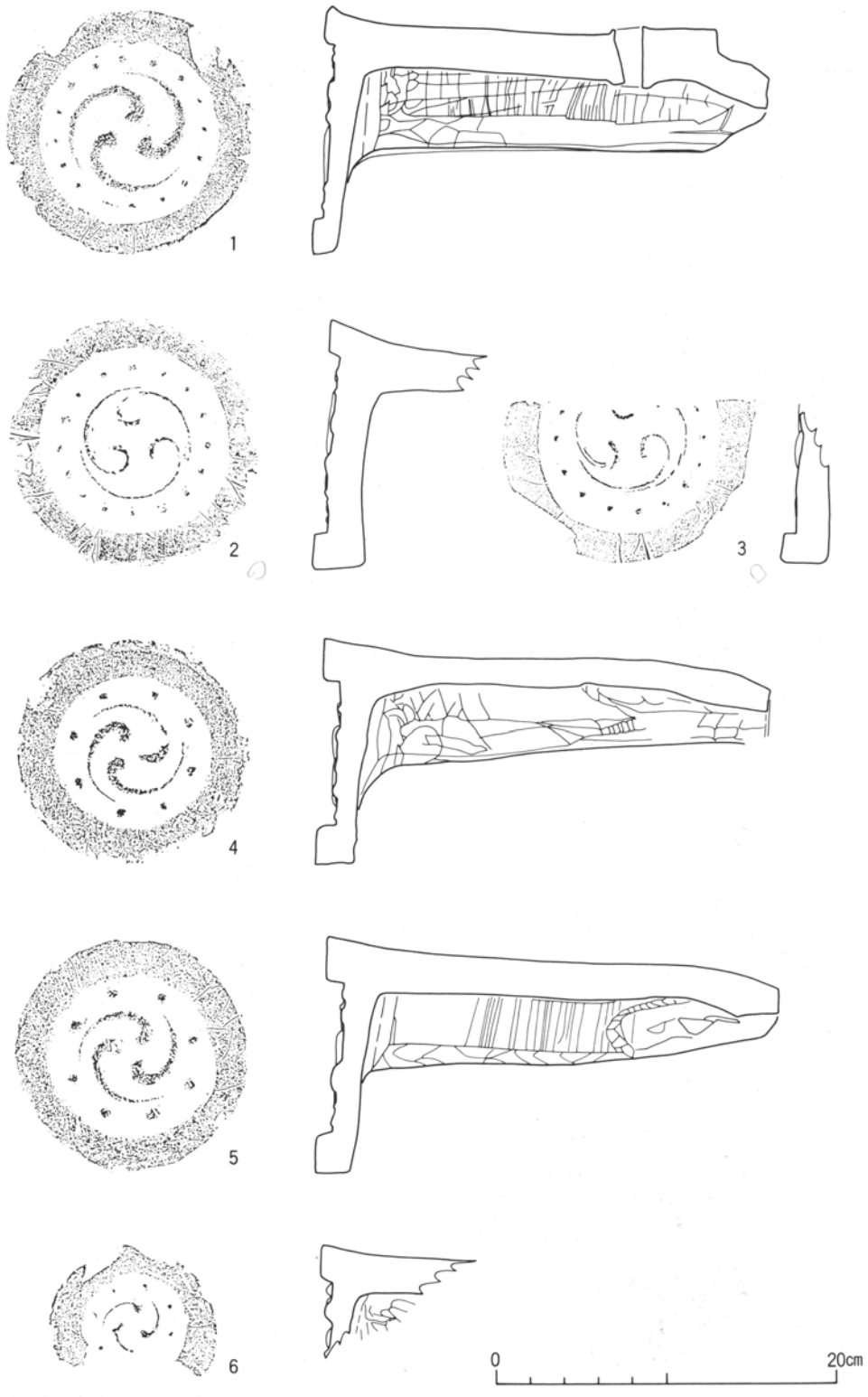
桐紋(第１図１～３)。五三の桐で、出土点数が３点と少ない。第１図の１は推定瓦当径が17cmを測る大型の軒丸瓦である。第１図の３は鳥衾瓦かもしれない。

Ⅱa_1類

巴紋(第１図４・５)。左巻三ツ巴紋を内区におき、外区に推定18個の珠紋をめぐらしている。巴紋は扁平な頭部からなだらかに尾部に移行しており、頭部には、わずかな平坦面をもつ。



第1図　軒丸瓦拓影・実測図（アミは金箔瓦）



第2図　軒丸瓦拓影・実測図

Ⅱa₂類

巴紋(第1図6)。左巻三ツ巴紋を内区におき、外区に推定18個の珠紋をめぐらしている。巴紋の頭部は平坦である。外区の周縁には9㎜間隔で三角形の金箔がはってある。周縁の厚さも2㎝と薄い。

Ⅱa₃類

巴紋(第1図7～9)。左巻三ツ巴紋を内区に、外区に12個の珠紋をめぐらしている。巴紋は尾部が短く太い。また珠文も大粒で扁平である。第1図7、8の巴紋の頭部は平坦であるが第1図9の頭部は丸く扁平である。

Ⅱb₁類

巴紋(第2図1)。左巻三ツ巴紋を内区に、外区に16個の珠紋をめぐらしている。瓦当の直径が14.7㎝とⅡa類より小さくなり、周縁は低く狭い。珠文は小さくて低い。

Ⅱb₂類

巴紋(第2図2・3)。右巻三ツ巴紋を内区に、外区に16個の珠紋をめぐらしている。巴文の頭部は細く、尾部は細長くつくられており、繊細な感じがする。

Ⅱc類

巴紋(第2図4・5)。左巻三ツ巴紋を内区に、外区に8個の珠紋をめぐらしている。巴紋は扁平な頭部からなだらかに尾部に移行している。

Ⅲ類

巴紋。図示できなかったが、直径137㎜、内区径98㎜、珠紋数12、珠紋径7㎜、巴径66㎜、外区幅17㎜、外区高6㎜を測る。右巻三ツ巴紋を内区に、外区に12個の珠紋がめぐる。

Ⅳ類

巴紋(第2図6)。小型で左巻三ツ巴紋を内区に、外区に推定8個の珠紋がめぐる。

第1表 軒丸瓦計測表 (単位：㎜)

類型	直径	内区				外区		全長	出土地点	図-番号	備考
		径	珠文数	珠文径	巴径	幅	高				
Ⅰ						22	7		IKJ60C SK06	1－1	
Ⅰ						25	9		IKJ60C₁ SD01Ⅲ層	1－2	
Ⅰ							4.5		IKJTT3 SD01	1－3	鳥衾か
Ⅱ－a₁				8	88	24	12		IAW SK61	1－4	
Ⅱ－a₁				7	85	24	13		IAW59G SK35	1－5	
Ⅱ－a₂				8		26	10		IKJ60B SD01	1－6	金箔
Ⅱ－a₃				11	75	28	10		IKJ61A SD01	1－7	A468
Ⅱ－a₃				12	75	28	8		IKJ61A SD01	1－8	A466
Ⅱ－a₃			12	11	75	28	11		IKJ61A	1－9	A391
Ⅱ－b₁	147	100	16	6	72	23	8	257	IKJ60E SK25	2－1	
Ⅱ－b₂	148	105	16	6	68	21	7		IKJ61A SD01	2－2	
Ⅱ－b₂	145	100		6	65	24	5		IKJ61A SD01	2－3	
Ⅱ－c	136	83	8	6	54	24	10	264	IKJ60E SK25	2－4	
Ⅱ－c	136	87	8	8	56	25	11		IKJ61A SD01	2－5	
Ⅳ	98	58		6	36	20	7			2－6	

3．軒平瓦

軒平瓦を瓦当の紋様によって大別すると、均整桐唐草紋と均整唐草紋にわかれる。均整唐草紋はさらに瓦当の中心飾りによって細分した。

Ⅰ類

均整桐唐草文(第3図1～3)。瓦当紋様の中心飾は桐で、左右に唐草を巻き出しており、その先端は右が上に向ってのびているのに対し、左は横に向ってのびている。中心飾りの桐や唐草はともに細くシャープである。

Ⅱa$_1$類

均整唐草文(第3図4～6)。瓦当紋様の中心飾に三つの子葉を置き、左右には外上方へのびる下向きと上向きの早蕨状の唐草を配している。中心飾や唐草はともにシャープである。

Ⅱa$_2$類

均整唐草文(第3図7)。瓦当紋様はⅡa$_1$類のそれと全く同じパターンであるが、中心飾の三つの子葉の先端が剣先のようになり、左右にある下向きと上向きの早蕨状の唐草は巻き出している。

Ⅱb類

均整唐草文(第4図1)。瓦当紋様はⅡa$_1$類のそれと全く同じパターンであるが、中心飾の三つの子葉が五つの子葉となっている。

Ⅱc$_1$類

均整唐草文(第4図2・3)。瓦当紋様の中心飾りに先端が剣先のようになった三つの子葉を置き、左右には下向きと上向きの早蕨状の唐草を配し、唐草の末端は巻き上げられており、外側には上向きの短い早蕨状唐草がある。中心飾りや唐草はともに細くシャープである。

Ⅱc$_2$類

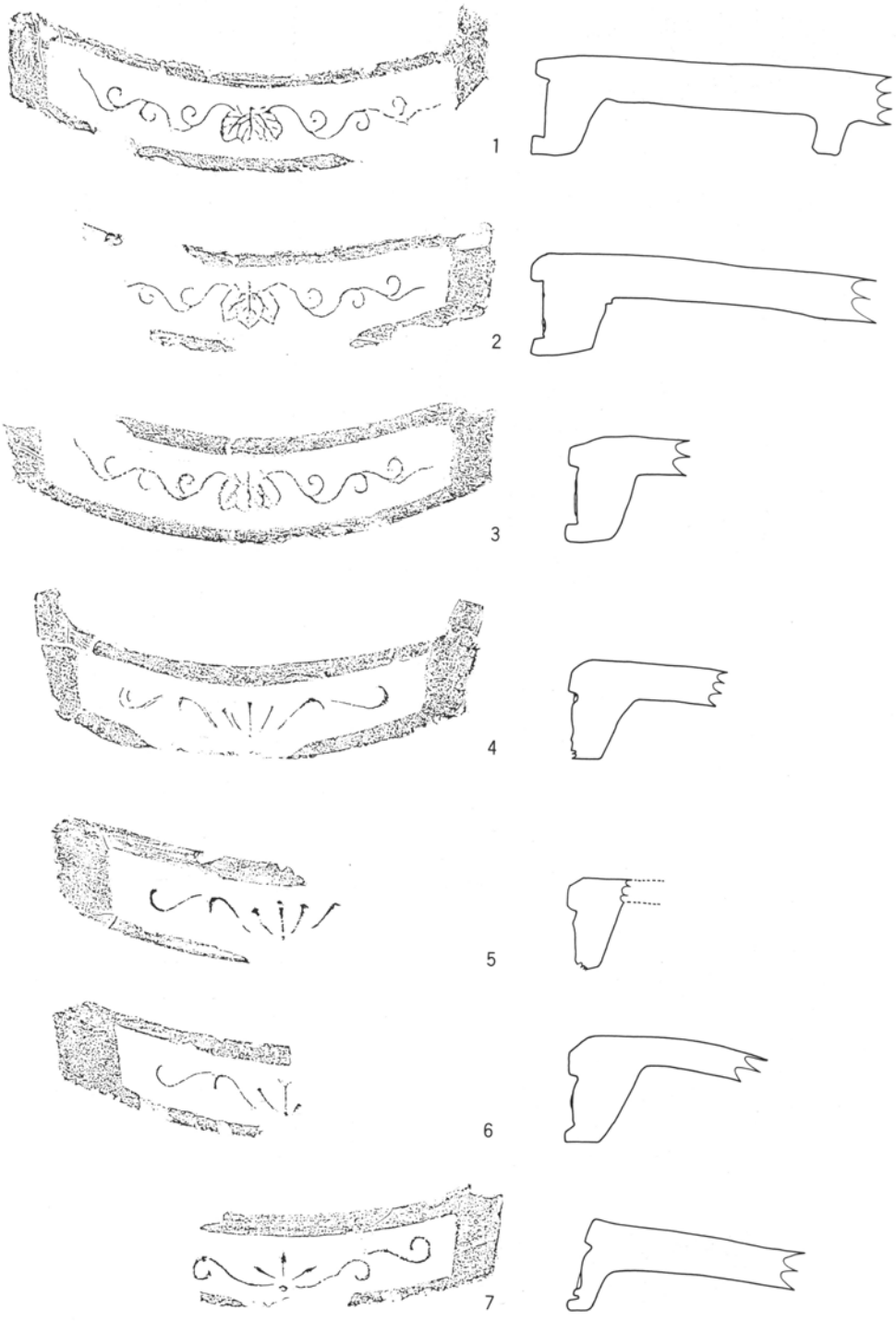
均整唐草文(第4図4・5)。瓦当紋様はⅡc$_1$類のそれと全く同じパターンであるが、中心飾りや唐草がともに短く太い。

Ⅲ類

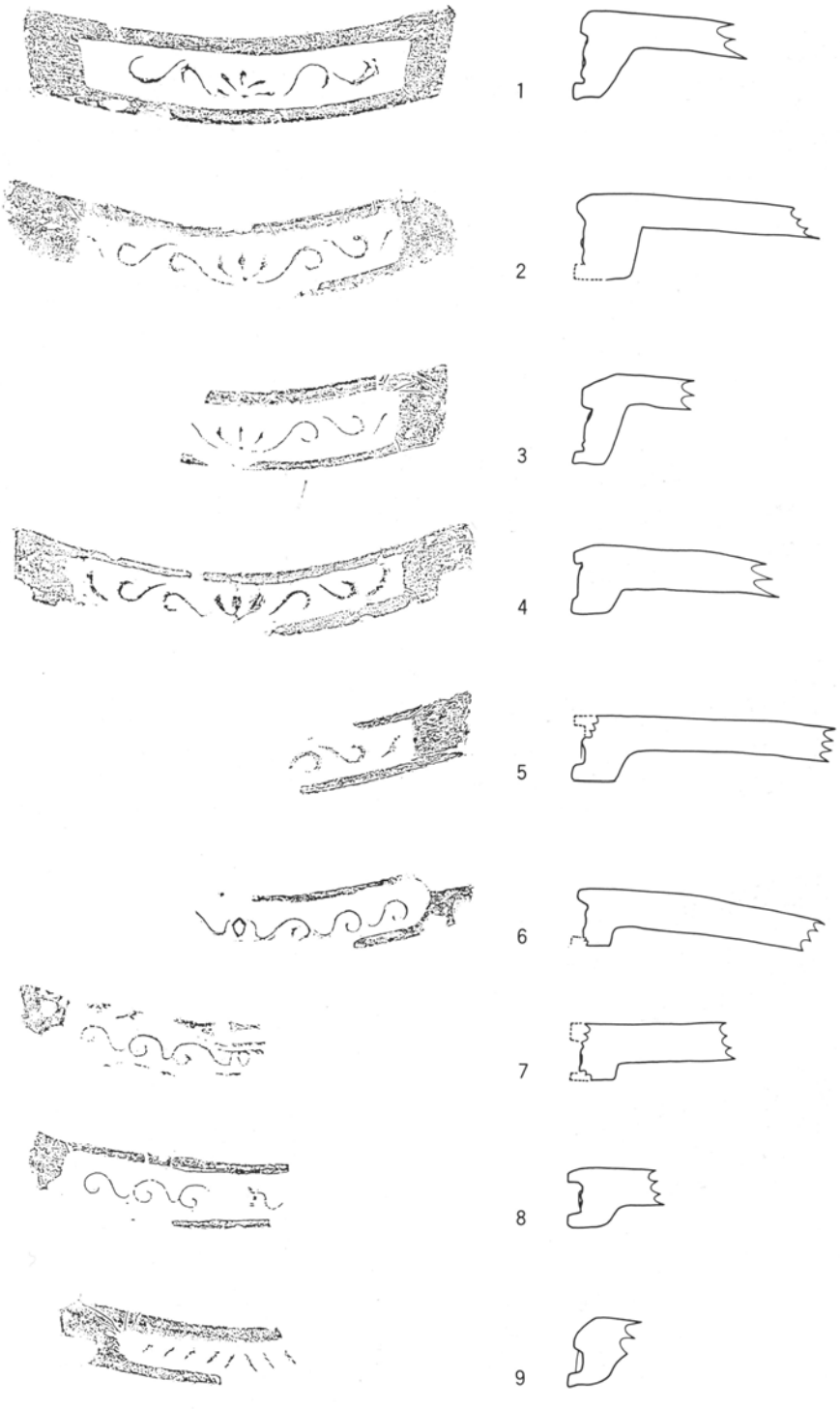
均整剣菱唐草文(第4図6～8)。瓦当紋様の中心飾りに剣菱を置き、左右には下向きの早蕨状の唐草を三つ配し、唐草の末端は巻き上げられている。中心飾りや唐草はともに細くシャープである。

Ⅳ類

第4図の9。1点のみの出土で、瓦当紋様の中心がハの字状を呈する。



第3図　軒平瓦拓影・実測図



第4図　軒平瓦拓影・実測図

第2表 軒平瓦計測表

（単位：mm）

類型	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区幅	外区幅 上	外区幅 下	脇幅 右	脇幅 左	出土地点	図-番号
Ⅰ	273	27	276	55	32	12	10	21	27	IAW59E$_2$ SD56	3－1
Ⅰ	279	31		53	32	11	10	24	26	IKJ60C SK53	3－2
Ⅰ				56	32	12	10		26		3－3
Ⅱ－a$_1$	255	21	240	52	30	12	10	18	29	IKJ60E SX02	3－4
Ⅱ－a$_1$				55	33						3－5
Ⅱ－a$_1$				51	32	11	8	39		IKJ61A SD01	3－6
Ⅱ－a$_2$				55	32	15	8		26	IAW59G SX01	3－7
Ⅱ－b	239	20	230	46	27	10	9	31	23	IKJ59C SD01	4－1
Ⅱ－c$_1$				44	25	11	8	45	34	IKJ61A SD01	4－2
Ⅱ－c$_1$				40	23	9	7		28	IKJTT 1 SK 2	4－3
Ⅱ－c$_2$	250	27		34	18	7	8	32	39	IKJ61A SD01	4－4
Ⅱ－c$_2$				34	21	7	6		33	IKJ61A SD01	4－5
Ⅲ				32	20	5	7	30		IKJ61A SD01	4－6
Ⅲ				33	27			27		IKJ61A SD01	4－7
Ⅲ				30	18	7	5			IKJ61A SD01	4－8
Ⅳ				30	15	9	6	34		IAW59G SK35	4－9

4．丸瓦・平瓦

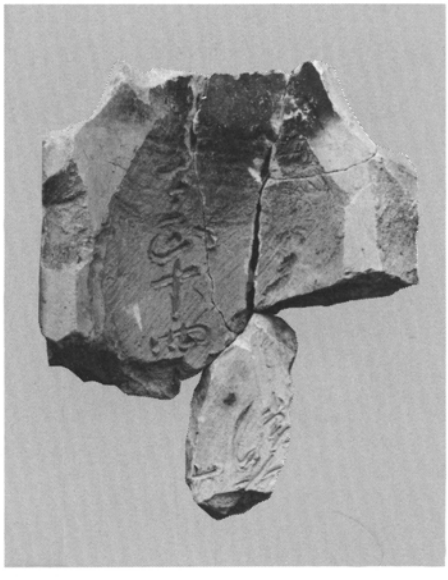
丸瓦・平瓦ともに多量に出土しているが、全長を計測できるものは数点しかない。

丸瓦は玉縁を有するもので、形態的にはほぼ同じであり、凹面に布目と切り離す際の横筋が見られる。

平瓦は一枚づくりで、凹面では丁寧なナデ調整のため、それ以前の調整痕がはっきりとみいだせない。

『天正十四年』銘玉縁丸瓦

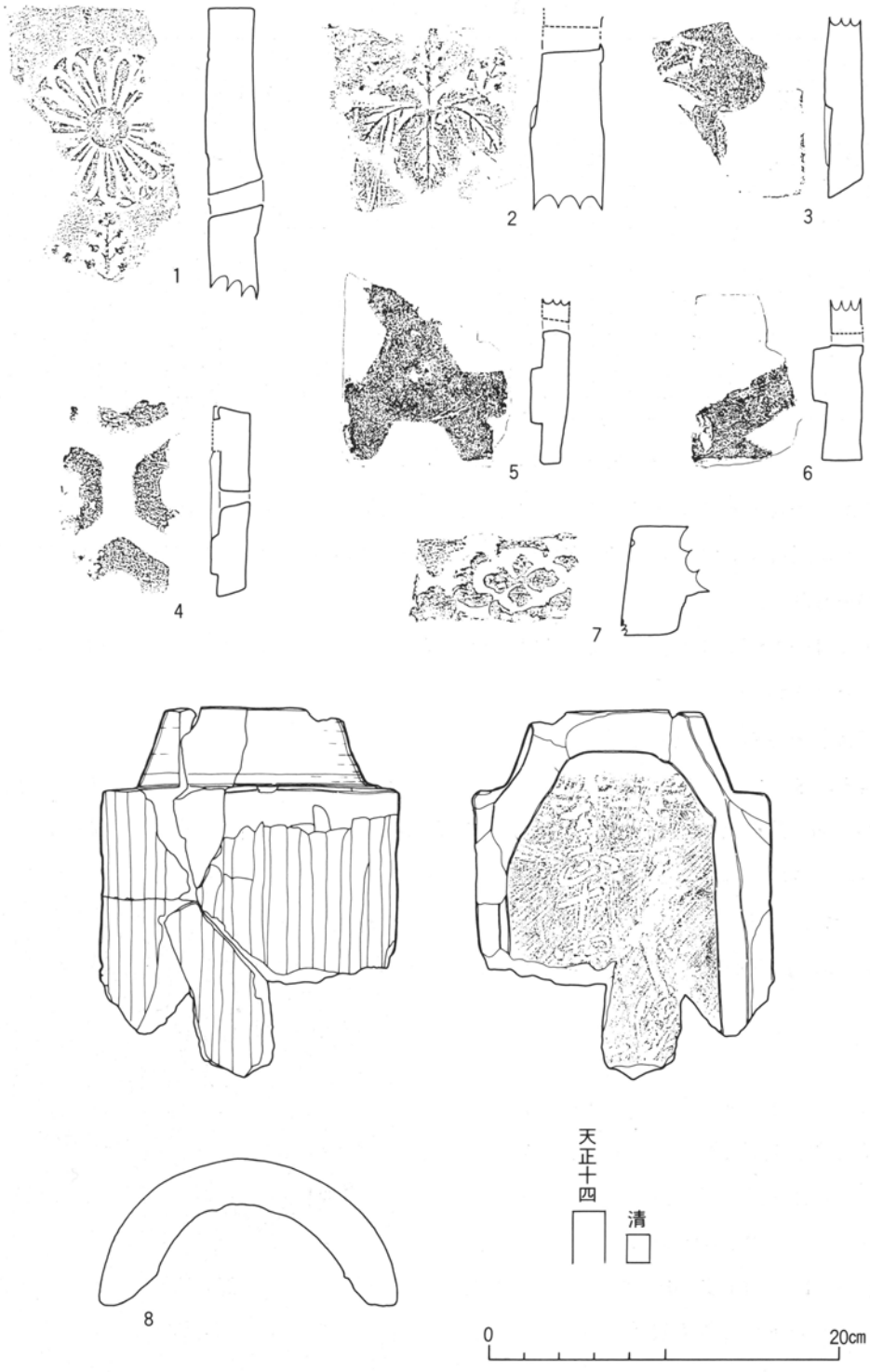
第5図8。中堀に比定される大溝よりの出土で軒丸瓦Ⅱa$_2$類も中堀より出土している。幅16.5cm、残存長20.7cm、厚さ2.5cm、玉縁幅4.5cmを測る。外面は丁寧なヘラ削り調整が施され、内面には布目痕と糸切り状の弧線が無数についている。半乾燥の時点に内面に篦状工具で「清□　天正十四□□」と記されている。



「天正14年」銘玉縁丸瓦

5．飾瓦

飾瓦は紋様から見ると3種類ある。モチーフが菊と桐を上下二段にあしらったもの（第5図1・2）で一辺の推定22.8cmの大形タイル状を呈す。モチーフも剣かたばみ（第5図3）、亀甲（第5図4）、重ね菱（第5図5・6）、木瓜（第5図7）などの浮彫模様である。



第5図　飾瓦・丸瓦：拓影・実測図

6．まとめ

清洲城下町遺跡出土の瓦のうち、紋様による分類から軒丸瓦は９種類、軒平瓦は８種類に類別したが、これらの各瓦の法量や製作技法上の特色などによって類別はさらに細分できると思われ、法量と製作技法の検討は今後の課題でもある。

分類した瓦の規模等から考えられる瓦の組み合せは次の３通りのものが現在考えられる。

A．軒丸瓦Ⅰ類＋軒平瓦Ⅰ類

B．軒丸瓦Ⅱa$_1$類＋軒平瓦Ⅰ類

C．軒丸瓦Ⅱb類・Ⅱc類＋軒平瓦Ⅱa類

Aは桐紋を中心とするもの、Bは三ツ巴紋と均整桐唐草紋、Cは三ツ巴紋と中心飾に三つの子葉を置いた均整唐草紋の組み合せである。このうちBの組み合せの軒丸瓦Ⅱa$_1$類に合う丸瓦として、『天正14年(1586)』銘の丸瓦片があり、天正14年は、織田信雄の清洲入城と城の修理・拡張の年でもあり注目されるのである。これらの組み合せも整形手法や法量などにより、今後組み合せ例が増えるものと思われる。

本稿は、清洲城下町遺跡の名古屋環状２号線用地内の発掘調査によって出土した瓦のうち、軒丸瓦と軒平瓦をその紋様から分類し紹介することにあった。しかし、紋様による分類だけでは不十分であり、課題は多く今後さらに整理検討する必要がある。

最後に種々御教示と御協力を仰いだ、遠藤才文、赤塚次郎、梅本博志の各氏、また図版等の作成にあたっては鈴木規子氏の協力を得た、記して心より謝意を表する次第です。

〔参考文献〕

梅本博志「清洲城下町遺跡」(『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報昭和60年度』1986)
遠藤才文「遺跡としての清洲城下町」(『埋蔵文化財愛知No 1』1985)
遠藤才文「清洲城下町遺跡出土紀年銘瓦」(『埋蔵文化財愛知No 2』1985)
遠藤才文「清洲城下町遺跡」(『教育愛知33－9』1985)
坪井利弘『日本の瓦屋根』理工学社　1976
藤沢典彦『中・近世瓦の研究－元興寺篇－』元興寺文化財研究所　1982
森田克行『摂津高槻城本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会　1984
渡辺　誠「江戸時代の瓦類」(『平安京土御門烏丸内裏跡－左京一條三坊九町－』1983)

中世土師器研究ノート (2)

―― 朝日西遺跡の様相 ――

佐 藤 公 保

1．はじめに

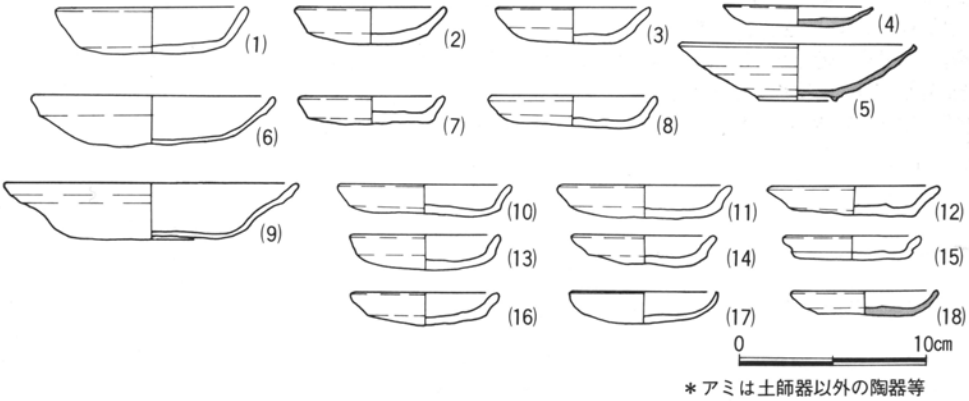
前稿[1]では、朝日西遺跡の11世紀後半から14世紀中葉までの皿を中心とする土師器（供膳形態）について検討を試みた。今回は14世紀後半から、朝日西遺跡でⅡ期[2]とする17世紀初頭までの溝を中心とした遺構出土の供膳形態の土師器皿を検討していきたい。

2．非ロクロ成形の土師器皿を出土する遺構及び供伴遺物

前稿で口縁部外面に幅狭のナデを施し、椀に近い形態を取る土師器皿をC類とし、その出現をⅢ期とした。供伴遺物及び土師器皿の形態、調整等から、Ⅲ期に続く土師器皿を出土する遺構には、ＳＥ07、ＳＫ11(共に朝日西遺跡59年Ｂ区、以下59Ｂと略する。)、SD02(59D)がある。

ＳＥ07(59Ｂ)は、内部構造物に曲物をもつ井戸である[3]。出土遺物(第１図(1)～(5))は、美濃系の灰釉系陶器椀、皿にB_1、B_2類の土師器皿が伴う。灰釉系陶器椀は、その特長より14世紀後半に比定できる[4]。B_1類の土師器皿(第１図(1))は、口径10cmを測り、Ⅲ期のB_1d類よりさらに口径が縮小する。また、口縁部に一枚の粘土帯を重ね、接合した痕を残す。

ＳＫ11(59Ｂ)は、出土遺物が少なく土師器皿しか見られない性格不明の土坑である。(第１図(6)～(8)) (6)は、Ｃ類に範疇に入り、口縁部外面に幅狭のナデを施し、ナデの幅だけ口縁部は肥大する。器壁は薄い。



第１図　ＳＥ07、ＳＫ11(共に59Ｂ)　SD02(59D)　出土遺物
(1)～(5) ＳＥ07(59Ｂ)　(6)～(8) ＳＫ11(59Ｂ)　(9)～(18) SD02(59D)

ＳＤ02(59Ｄ)は、ほぼ南北に走り、後述するＳＤ01、ＳＤ03(共に59Ｄ)に切られる溝である。図示(第１図(9)～(18))した遺物の他、陶器類として、古瀬戸と言われる施釉陶器、灰釉系陶器が見られるが、いずれも小片であり、図示できたのは(18)の灰釉系陶器皿のみである。(9)～(17)は土師器皿である。(9)は、体部が屈曲して外反する。口縁部外面に二段の幅狭のナデを施す。器壁が薄く、大型の皿である。Ｃ類の範疇に入る。(10)～(16)は、B_2・B_3類に入り、Ⅲ期のB_2・B_3類に比べて、口縁部が外反する傾向が強くなる。(17)は、底部から口縁部にかけ内弯する小皿である。外面は全面、無調整、内面は摩滅が著しく調整は不明である。Ⅲ期以前には、見られない皿である。

３．ロクロ成形の土師器皿の再出現

B_1～B_3、Ｃ類の非ロクロ成形の土師器皿しか見られなかったＳＤ02(59Ｄ)に対して、を切るＳＤ01、ＳＤ03(共に59Ｄ)では、B_2、B_3、Ｃ類の非ロクロ成形の土師器皿とロクロ成形の土師器皿の混在が見られる。

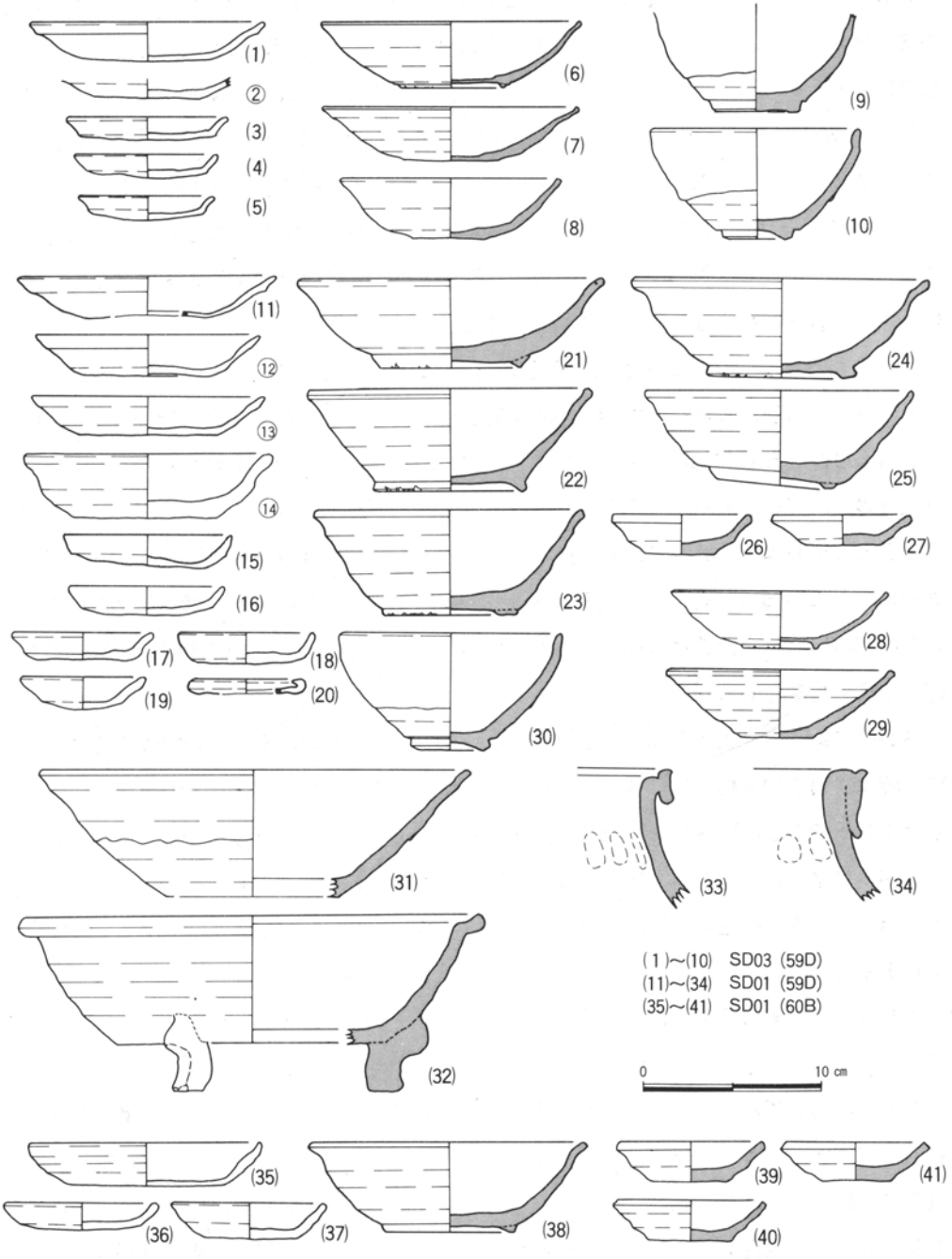
ＳＤ01(59Ｄ)は、ＳＤ02(59Ｄ)に直交し東西に走り、上層は整地を受ける幅５ｍほどの溝である。この溝は、前述したようにＳＤ02(59Ｄ)を切ると共に、ＳＥ01(60Ｂ)を切る。ＳＥ01(60Ｂ)は内部構造物に曲物をもつ井戸であり、出土遺物(第２図(31)～(40))から、13世紀前半代に比定できる。

ＳＤ01(59Ｄ)の出土陶器類は、上層が整地を受けているため、かなりの時代幅をもつ。(21)～(29)は灰釉系陶器椀・皿であり、それらの特長により11世紀後半から15世紀後半に比定されるものである。(30)～(32)は、所謂、古瀬戸と呼ばれる施釉陶器であり、古瀬戸の中期から後期に比定される。(33)、(34)は常滑産の大甕の口縁である。(33)はＮ字状口縁を呈するもので、(34)は、口縁の折返しが体部に密着するものであり、(33)は14世紀後半に、(34)は15世紀末に比定される[6]。

これらの出土陶器類より、ＳＤ01(59Ｄ)は少なくとも15世紀末には整地を受けたと考えられる。

これらの陶器類と共に、整地層中より(11)～(20)の土師器皿が見られる。(11)はＣ類、(15)～(19)はB_2・B_3類、(20)はB_4類の非ロクロ成形の土師器皿である。それに対して⑫～⑭はロクロ成形の土師器皿である。その中で⑭は、形態、胎土等よりA_1類の土師器皿であり、A_1類は11世紀後半から12世紀後半までしか見られないことを考えると、整地を受けた15世紀後半代のものとは考えにくい。⑫、⑬は、底部に回転糸切り痕を残す。体部は直線的に開き、口縁部外面がナデの幅の分やや肥大する。見込み、体部内外面は、ナデ調整をうける。器壁が非常に薄い。A_1類とは別系統のものと考えたい。

同じく、ＳＤ02(59Ｄ)を切るＳＤ03(59Ｄ)でもＣ類等の非ロクロ成形の土師器皿とロク



＊断面白ぬきで㊟は、ロクロ成形の土師器以下同じ

第2図　SD03、SD01（共に59D）　SE01（60B）　出土遺物

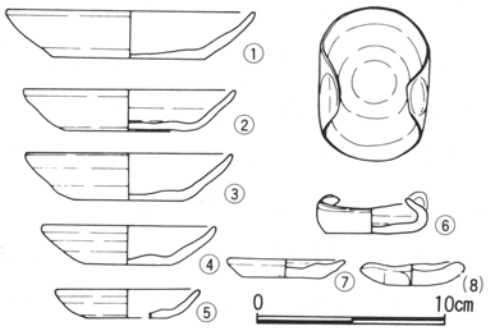
ロ成形の土師器皿の混在が見られる。このＳＤ03(59Ｄ)は、ＳＤ02(59Ｄ)と近接してほぼ平行に南北へ走り、ＳＤ01(59Ｄ)の手前でとぎれる。ＳＤ01(59Ｄ)同様、上層は整地をうける。出土遺物は、第２図(1)～(10)である。(6)～(8)は美濃系の灰釉系陶器椀である。高台の有無等の特長より、14世紀後半から15世紀後半に比定できる[7]。(9)、(10)は、所謂、古瀬戸の天目茶椀と言われる鉄釉の椀であり、いづれも古瀬戸の後期に入る[8]。土師器皿は、(1)～(5)である。非ロクロ成形のものとして、(1)はＣ類、(3)～(5)はB_3類に入る。これらと共に、②は底部のみであるが、器壁が薄く底面に明確に回転糸切り痕を残すものが見られる。

このようにＳＤ01、ＳＤ03(共に59Ｄ)では、12世紀後半から15世紀末の陶器類と共に、B_2・B_3、Ｃ類の非ロクロ成形の土師器皿とロクロ成形の土師器皿とが見られた。前稿でもふれたように朝日西遺跡において13世紀から14世紀中葉までは、非ロクロ成形の土師器皿しか見られない。また、前にも述べた様に、第２図②、⑫、⑬の土師器皿は、11世紀後半から12世紀後半代まで見られたA_1類とする土師器皿とは、形態、胎土等がまったく異なる。この２つのことから、A_1類と別系統のロクロ成形の土師器皿が少なくとも15世紀末には出現していたと考えられる。

さて、ＳＤ01、ＳＤ03(共に59Ｄ)が整地をうけた15世紀末以降、朝日西遺跡では一時期、遺構が非常に希薄になる。そして、約半世紀後の16世紀後半代になると、朝日西遺跡は清洲城下の外堀近く北東の一画として、遺跡全面に遺構が展開するようになる。

その中でまとまった土師器皿を出土しているのは、ＳＤ11(59C・D)である。

ＳＤ11(59C・D)は、南北に走り、屋敷地を画する溝である。前年度の愛知県埋蔵文化財センター『年報』で、遠藤才文、小澤一弘両氏が紹介している通り、溝内からは多量の陶磁器類と共に、木製品、人・獣骨類が出土した。出土陶磁器類には、鉄釉天目茶椀、長石釉天目茶椀、摺鉢等の大窯後半の陶器類、中国陶磁の椀、皿が見られる。土師器としては、供膳形態の他、煮沸形態として、羽釜、内耳鍋が見られる[9]。土師器皿は、ロクロ成形のものが主体を占めており、法量で５形態にわかれる(第３図①～(8))。①は、口径13.0cm、器高2.4cmを測り、大型のもの。②、③は、口径11.0～11.2cm、器高2.2～2.4cmを測り、中型のもの。④は、口径10.0cm、器高2.0cmを測り、②、③に比べやや小さい中型のもの。⑤は、口径7.6cm、器高1.6cmを測り、小型のもの。⑦は、口径7.0cm、器高0.8cmを測り、偏平なものである。また、⑥は、⑤とほぼ同じ法量で、口縁部を内側に曲げた、所謂、



第３図　SD11(59D)　出土土師器

耳皿と呼称されるものである。①～⑦は、いずれもやや丸味をもち、直線的に開く体部をもつ。見込み、及び体部内外面には、ロクロ回転を利したナデを施し、底面には回転糸切り痕を残す。非ロクロ成形のものは、(8)のみである。口径8.8cm、器高1.2cmの偏平な皿である。粘土塊を手ひらや指腹にのせ肘で押し成形したと考えられ、外面は、指の痕を残し無調整、内面はナデを施す。

出土陶磁器類に長石釉を施したものが見られること、織部焼の製品が出土していないことから、この溝の時期を16世紀後半から17世紀初頭にかけて比定している[10]。

4．清洲城下町遺跡ＳＤ03(60Ｆ)出土の遺物

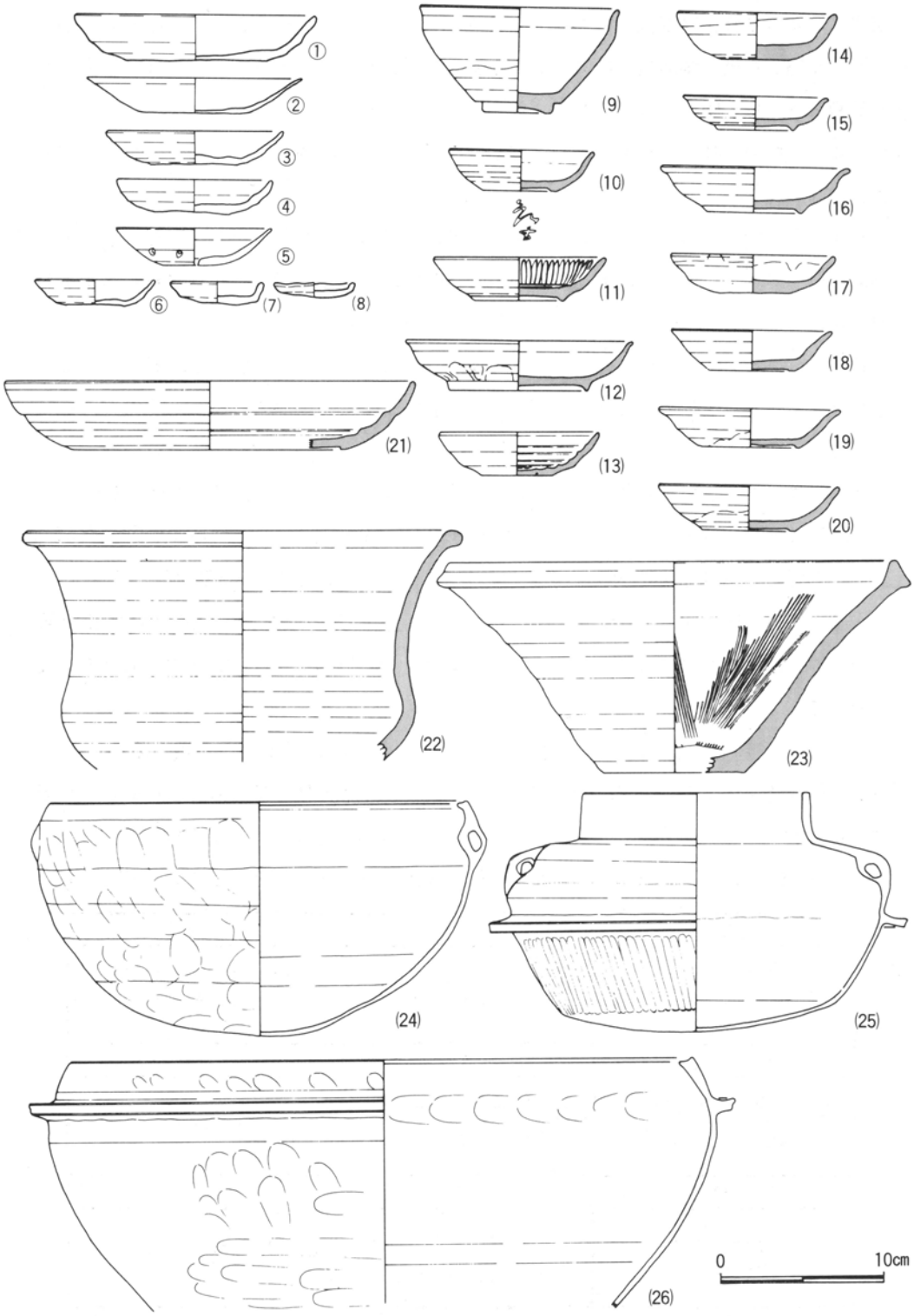
朝日西遺跡で遺構が希薄になる15世紀末から16世紀前半代の間、朝日西遺跡と五条川を挟んで対岸に位置する清洲城下町遺跡では、遺構が大規模に展開する。

その中で、ＳＤ03（清洲城下町遺跡60年Ｆ区、以下城下町60Ｆと略する。）は、清洲城下町遺跡の西端に位置する美濃街道の下を北西に走る溝で、幅約1.8m、深さ1mを測り、断面Ｕ字形を呈する。出土遺物（第4図）は、瀬戸・美濃産の椀・皿・摺鉢、常滑産の甕、中国陶磁の染付皿、塝・皿等の土師器が見られる。瀬戸・美濃産の陶器類は、口縁部が外反する端反皿、口縁部のみ施釉される縁釉皿が見られること等から、16世紀初頭に位置づけている[11]。土師器皿（第4図①～⑧）は、ＳＤ11(59Ｄ)と同様ロクロ成形のものが主体を占める。①は体部下部に稜をもち、やや外反しながら立ち上がる。口径14.6cm、器高2.8cmを測る大型の皿である。②は、直線的にひらく体部をもち、口縁部がやや肥厚する。ＳＤ01(59Ｄ)出土の土師器皿（第2図⑫、⑬）に類似する。口径13.2cm、器高2.0cmを測る。①に比べ、やや小さい。③は、体部下部に緩い稜を有し、直線的に立ち上がる。口径10.4cm器高2.0cmを測る。④は、やや内弯する体部をもつ。口径9.6cm、器高2.0cmを測る。⑤は緩やかに立ち立がる体部をもつ。口径9.6cm、器高2.4cmで、やや器高が高い。なお、図中の⑤には、体部側面、底部に数ヶ所に穿孔が見られる。③～⑤は中型の皿である。⑥は体部下部に稜をもち、直線的に立ち上がる。口径7.2cm、器高2.0cmを測る小型の皿である。(7)、(8)は非ロクロ成形の皿である。(7)は、B_2類に入る小皿であるが、口径5.6cmと口径の縮小が著しい。調整はB_2類と同様で、外底部は無調整、体部外面はナデ、見込みは横ナデ、内面には外周に沿ったナデが施される。(8)は、口径4.8cm、器高0.8cmと低い体部をもつ。調整は(7)と同じであることから、B_2類の範疇に入ろう。

5．形態分類

次に各遺構から出土した土師器皿を分類してみたい。

Cb類－ＳＫ11(59Ｂ)、ＳＤ01～ＳＤ03（いずれも59Ｄ）で見られる非ロクロ成形の大皿（第1図(6)、(9)、第2図(1)、(11)）。体部は緩やかに立ち上がり、丸味をおびる。口縁部外面は幅



第4図　清洲城下町遺跡60F SD03出土遺物

狭のナデが施され、縁帯状に肥大する。体部外面中位以下底部まで無調整。内面は見込みにナデを施した後、体部内面にはね上げるようなナデを施す。器壁は非常に薄い。横田洋三氏の言う「B_1・B_2タイプの白色系土師皿」に類似する(12)。

なお、前稿でC類とした土師器皿を、形態・調整等よりCb類に先行するものとしてとらえ、Ca類とする。

D類－ＳＤ02(59D)で見られる非ロクロ成形の小皿(第１図(17))。全体的に丸味をおび、体部はやや内弯しながら立ち上がる。外面は口縁部から底部まで無調整。内面の調整は不明。現在のところ、確認しうるD類はＳＤ02出土の１点のみである。

E類－ＳＤ11(59D)で見られる非ロクロ成形の小皿(第３図(8))。偏平で体部をほとんどもたない。外面は指腹の痕または手のひらの痕を残し、無調整である。内面にはナデが施される。

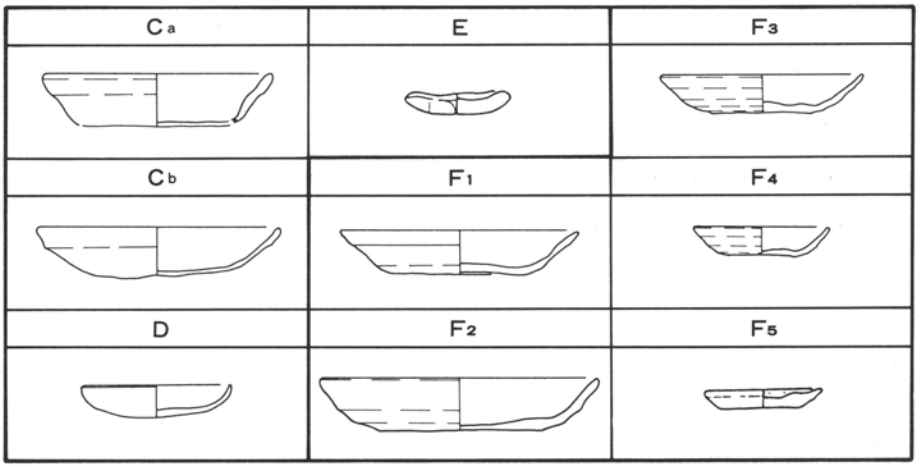
F類－ロクロ成形の土師器皿である。形態及び法量からさらにF_1～F_5に細分できる。

F_1類－ＳＤ01(59D)、ＳＤ03(城下町59F)で見られる(第２図⑫、⑬ 第４図②)。体部は直線的に開き、口縁部がやや肥大する。口径12.6～13.2cm、底径2.4cmを測る。

F_2類－ＳＤ11(59D)、ＳＤ03(城下町59F)で見られる(第３図①、第４図①)。体部下部に稜をもち、やや外反しながら立ち上がる。口径13.0～14.6cm、器高2.4～2.8cmを測る大型の皿である。

F_3類－ＳＤ11(59D)、ＳＤ03(城下町59F)で見られる(第３図②～④、第４図③～⑤)。体部下部に陵をもつもの、直線的に立ち上がるもの、やや内弯して立ち上がるものと形態的に細分できうる。口径9.6～11.2cm、器高2.0～2.4cmを測る中型の皿である。

F_4類－ＳＤ11(59D)、ＳＤ03(城下町59F)で見られる小型の皿である（第３図⑤、第４



第５図 形態分類（S=¼）

図⑥)。体部下部に稜をもち、直線的に立ち上がる。口径7.2～7.6cm、器高1.6～2.0を測る。

F_5類－ＳＤ11(59Ｄ)で見られる(第３図⑦)。器高0.8㎝と器高が低くく、偏平な皿である。口径7.0㎝を測る。

F_1～F_5類は、全て、底部に回転糸切り痕を残し、体部内外面、見込みにナデを施す。また、F_5類以外のF_1～F_4類のほとんどには、口縁部、体部内面に煤やタール状の炭化物が付着する。F_5類には、そうした痕跡を残すものは、まったく見られない。

６．まとめにかえて

以上、朝日西遺跡を中心として、14世紀後半から17世紀初頭の土師器皿を検討してきた。14世紀後半から17世紀初頭の時期は、土師器皿の成形、形態、組成等により、次の５期にわかれる。なお、Ⅲ$_1$期は前稿で、「B_1d類とＣ類が混在する時期」としたⅢ期に相当する(第６図)。

Ⅲ$_2$期－ＳＥ07(59Ｂ)出土の遺物を中心とする。B_1類は、口径がさらに小さくなり、口縁部に粘土帯の接合痕を残し、調整の省略化が著しい。小皿類としては、B_2類しか確認できていない。現在のところ、Ｃ類に属する土師器皿は見られないが、Ⅲ$_1$期及び後述するⅢ$_3$期でＣ類が見られることから、Ｃ類とB_1類が混在すると考えられる。共伴遺物から14世紀後半代が比定される。

Ⅲ$_3$期－ＳＫ11(59Ｂ)、ＳＤ02(59Ｄ)出土の遺物を中心とする。Cb類の大皿とB_2、B_3、Ｄ類の小皿の組成からなる。B_2、B_3類の小皿は、口縁部の外反が著しくなる。また、Ca類に比べCb類は口縁部外面のナデの幅がせまくなる。現在のところ、B_1類は見られない。

Ⅳ$_1$期－ロクロ成形の土師器皿が再出現する時期である。Cb、B_2、B_3類の非ロクロ成形の土師器皿と混在する。ＳＤ01、ＳＤ03(共に59Ｄ)の遺物が中心である。大皿として、ロクロ成形のF_1類、非ロクロ成形のCb類、小皿として、B_2、B_3類が見られる。共伴遺物は、かなり時期幅をもつが、15世紀末の常滑産の大甕や15世紀中頃の瀬戸・美濃産の施釉陶器が見られること、14世紀後半代にはロクロ成形の土師器皿は見られないことから、ロクロ成形の土師器皿の出現は、やや時代幅をもたせ、15世紀後半代と考えたい[13]。

Ⅳ$_2$期－ロクロ成形の土師器皿が主体を占める時期である。ＳＤ03(城下町60Ｆ)の遺物が中心である。ロクロ成形の土師器皿の組成は、大型のもの２種(F_1、F_2)、中型のもの3種(F_3)、小型のもの(F_4)からなる。非ロクロ成形の土師器皿は、B_2類が法量的に縮小化したものが見られる。中には、体部の立ち上がりがほとんど見られないものが見られ、成形、調整の省略化がうかがえる。共伴遺物より16世紀前半代が比定できる。

Ⅳ$_3$期　ＳＤ11(59Ｄ)の遺物が中心である。ロクロ成形の土師器皿の組成は、大型のもの１種(F_2)、中型のもの２種(F_3)、小型のもの２種(F_4・F_5)からなる。Ⅳ$_2$期の大型の

ものに比べ、大型の土師器皿は口径がやや減少し、新たにF5類が出現する(14)。非ロクロ成形の土師器皿は、Ⅳ2期のB2類の成形、調整がさらに省略されたE類が出現する。共伴遺物から16世紀後半から17世紀初頭に比定できる。

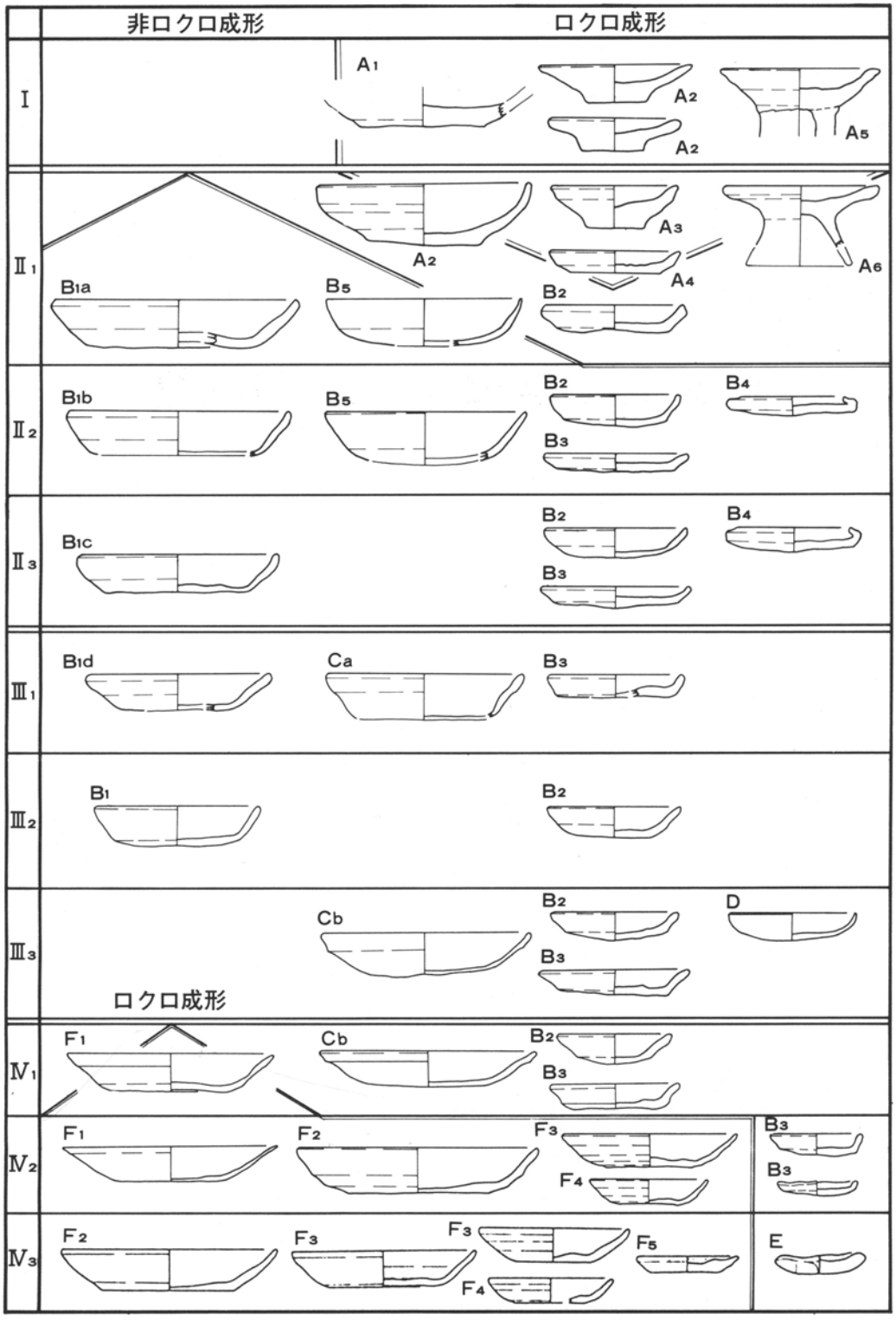
なお、Ⅲ3期は、共伴遺物からは時期が比定できないが、Ⅲ2期が14世紀後半代に、Ⅳ1期が15世紀後半代に比定できることから、その間をうめる15世紀前半代と考えたい。

Ⅲ1期からⅣ1期にかけては、前述したように、朝日西遺跡では遺構が希薄なため、同時期の土師器皿の組成を網羅したと言えない。今後、周辺の遺跡の資料の対比と資料の増加をまたねばならない。しかし、いずれにせよ、12世紀後半以降、主流を占めていた非ロクロ成形の土師器皿は、15世紀後半代以降には、ロクロ成形の土師器皿へ転換していく傾向がある。非ロクロ成形の土師器皿を京都の土師器皿の影響を受けたものととらえるならば、ロクロ成形の土師器皿は、近年窯体内でロクロ成形の土師器皿の焼成が確認されていることから(15)、窯業地の影響を受けて成立した在地の土師器として考えられる。またこうしたロクロ成形の在地土師器が非ロクロ成形の土師器を駆逐していく時期が、大窯の出現・成立期とほぼ同一時期であることは興味深い。今後、尾張を中心とする地域で、非ロクロ成形・ロクロ成形の土師器皿が、時間的に、また空間的にどのような広がりを示すかを明らかにすると共に、生産地との関係を検討しなければならない。課題は山積みされるばかりである。

本稿をまとめるにあたり、赤塚次郎、赤羽一郎、遠藤才文、小澤一弘、斎藤孝正、鈴木規子、田口昭二、立松彰、服部哲也、藤澤良祐、宮石宗弘、安田幸市の各氏の御教示と各氏の所属機関の御協力をいただいた。文末ながら記して御礼申し上げるものである。

〔注〕

(1) 佐藤公保「中世土師器研究ノート(1)」(『愛知県埋蔵文化財センター　年報』1985)
(2) 愛知県教育サービスセンター「朝日西遺跡Ⅰ」(『埋蔵文化財発掘調査年報』1984)
愛知県教育サービスセンター「朝日西遺跡Ⅱ」(『埋蔵文化財発掘調査年報』1985)
(3) 遺構の細かい検討は、本報告にゆずりたい。
(4) 田口昭二「美濃窯業史(一)　須恵器から古瀬戸系施釉陶器まで」(『美濃陶磁歴史館報Ⅰ』1981)
(5) 口縁部に粘土帯を接合した痕を残すB1類は、Ⅱ3期からすでに見られるが、B1類よりむしろ、B2、B3類で顕著である。
(6) ＳＤ01(59Ｄ)、ＳＥ01(60Ｃ)の灰釉系陶器、施釉陶器、甕については、赤羽一郎氏、宮石宗弘氏、藤澤良祐氏の御教示による。
(7) 注(4)と同じ。
(8) 藤澤良祐「〝古瀬戸〟概説」(『美濃陶磁歴史館報Ⅲ』1984)
(9) 遠藤才文・小澤一弘「人・獣骨類の出土した大溝」(『愛知県埋蔵文化財センター　年報』1985)
(10) 注(9)と同じ。
(11) 小澤一弘「遺物から見た城下町　その１」(『埋蔵文化財愛知No.２』1985)
(12) 横田洋三「出土土師皿編年試案」(『平安京跡研究調査報告　第５輯　平安京左京五条三坊十五町』1981)
(13) 尾張地方でのロクロ成形の土師器皿の再出現については、「下津城跡」(『新修　稲沢市史資料編第六考古』1984)の註の中で、15世紀代を示唆している。
(14) F5類はE類と共に出土することが多く、E類と同じく体部の立ち上がりがほとんど見られないことから、Ⅳ2期のB2類、またはE類の影響により出現したと考えられる。
(15) 浅田由員「山茶碗窯出土の土師器皿について」(『愛知県陶磁資料館　研究紀要５』1986)また、田口昭二、斎藤孝正両氏によると、多治見市の尼ヶ根窯跡でも土師器焼成窯が確認、調査されている。


非ロクロ成形
ロクロ成形
I
A1
A2
A2
A5
II1
A2
A3
A4
A6
B1a
B5
B2
II2
B1b
B5
B2
B3
B4
II3
B1c
B2
B3
B4
III1
B1d
Ca
B3
III2
B1
B2
III3
Cb
B2
B3
D
ロクロ成形
IV1
F1
Cb
B2
B3
IV2
F1
F2
F3
F4
B3
B3
IV3
F2
F3
F3
F4
F5
E

第6図　変遷試案（S=¼）